

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

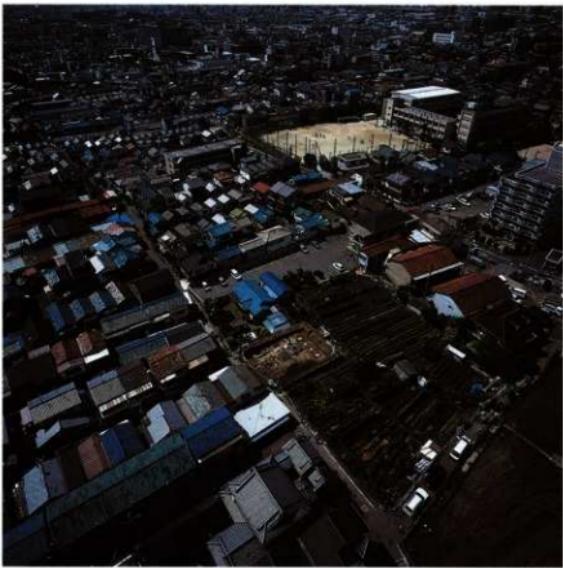
— 平成16年度 —

2005. 3

東大阪市教育委員会

『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報-平成16年度-』正誤表

ページ	行	誤	正
(目次)	6	第4章 若江北遺跡第10次発掘調査	第4章 若江北遺跡第9次発掘調査
1	3	届出638件	届出678件
7	(第1図)	西ノ辻22次	西ノ辻42次
105	1(タイトル)	第6章 河内寺跡第11次発掘調査	第6章 河内寺跡第11次発掘調査(中間報告)
116	3	仏道	仏堂
報告書 抄録 (その1)	13	(若江北遺跡・所在地) 東大阪市長堂1丁目70-6,70-11番地	(若江北遺跡・所在地) 東大阪市若江南町3丁目33-2番地
報告書 抄録 (その2)	4	若江北遺跡 (第10次調査)	若江北遺跡 (第9次調査)



調査地遠景



調査地全景

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。平成14年11月には、市立埋蔵文化財センターがオープンし、多くの市民に利用されています。

本書では、平成16年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、鬼虎川遺跡、若江遺跡、若江北遺跡、西ノ辻遺跡、河内寺跡の調査概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。とくに河内寺跡では、これまで不明であった塔跡が検出されました。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成17年3月

東大阪市教育委員会

目 次

はしがき

目次・例言

第1章 平成16年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 鬼虎川遺跡第59次発掘調査	5
第3章 若江遺跡第81次発掘調査	51
第4章 若江北遺跡第10次発掘調査	71
第5章 西ノ辻遺跡第47次発掘調査	75
第6章 河内寺跡第11次発掘調査(中間報告)	105

例 言

- 1 本書は、国庫補助50%・市負担50%（総額10,000,000円）で実施した、個人住宅建設工事及び個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査は、調査原因に係る個人・小規模事業主の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 3 現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（2000年版）に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 4 本書の執筆は次のとおりである。
第2章4)・5)は市田英介、第2章6)・第3章3)・第4章4)・第5章4)は釜山有理絵、その他の章節及び編集は菅原章太。
- 5 考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』（2002年）の表記に従った。
- 6 調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・濠・溝状遺構
SK	土坑	SE	井戸
SX	その他の遺構		

- 7 鬼虎川遺跡第59次調査で出土した人骨、動物遺体については、大阪市立大学大学院医学研究科分子生物学大講座器完構築形態学の安部みき子氏、大阪市立大学大学院文学研究科哲学歴史学専攻日本史コース博士課程前期の高志こころ氏にご鑑定いただき、報文をご寄稿いただいた。厚くお礼申し上げます。
- 8 河内寺跡の調査については、現在実施中であり、今回の報告は中間報告として掲載したものである。平成16年末段階の調査成果をまとめており、調査の進行によっては、遺構の規模、時期観が変更される可能性がある。諒とせられたい。
- 9 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々や関係諸機関からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。

櫻井 実男・橋本 勝行・伊藤 憲志・櫻井 一義・山崎 高義

森 郁夫・上原 真人・上田 駿・菱田 哲郎

第1章 平成16年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成16年度の文化財保護法第57条の2・3に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成17年2月28日現在で届出638件、通知104件で合計782件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる。

個人住宅	111件	分譲住宅	280件	共同住宅	12件	工場	4件	店舗	5件
その他建物	39件	道路	2件	学校	10件	宅地造成	3件	公園造成	3件
ガス	122件	電気	0件	上水道	46件	下水道	145件	電話	0件

782件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査 87件、工事立会259件、慎重工事436件であった。昨年平成15年度では、届出(通知)が853件と過去最高を記録した。16年度はそれより71件の減少を見たが、以前高水準を保っているといえる。平成15年度の工事内容別と比較すると、個人住宅が15件、分譲住宅が39件増加したのに対し、下水道が107件減少している。下水道の件数減少は、本管の埋設や整備が進行し、一段落ついたことの証左とみることができる。

東大阪市教育委員会では、上記の工事内容のうち、個人専用住宅建設ないし個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査と発掘調査について、次ページ一覧表のとおり平成16年度国庫補助事業として実施している。その内容は、個人住宅建設に伴う確認調査が21件、個人住宅及び兼用住宅建設に伴う発掘調査が3件、個人による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が5件、個人による賃貸共同住宅建設に伴う発掘調査が1件で合計30件であった。平成15年度は18件であったことから漸増傾向にある。とくに個人住宅建設に伴う確認調査件数の増加が著しい。なお、平成16年度については埋蔵文化財包蔵地外での試掘調査は実施していない。

平成16年度の国庫補助事業の傾向として、個人住宅建設に伴って実施する確認調査が増加したことなどが挙げられる。各時代の遺構面の水準が高い、すなわち現地表面から比較的浅いところに遺構面が広がる遺跡では、通常のベタ基礎や布基礎でも確認調査を実施するほか、地盤改良や杭打設を伴う個人住宅については、悉皆的に確認調査を行なっている。大手メーカーでは耐震・免震設計に基づき、上記の地盤改良や杭打設を予定することが多い。その折、届出提出時には、ベタ基礎・布基礎であったものが、地盤の調査を経て、杭打設等に急速変更し届出を再提出されるケースが増えている。埋蔵文化財保護行政を進める立場からすれば、対応に追われることになり、トータルな視点に立った行政指導が望まれるところである。

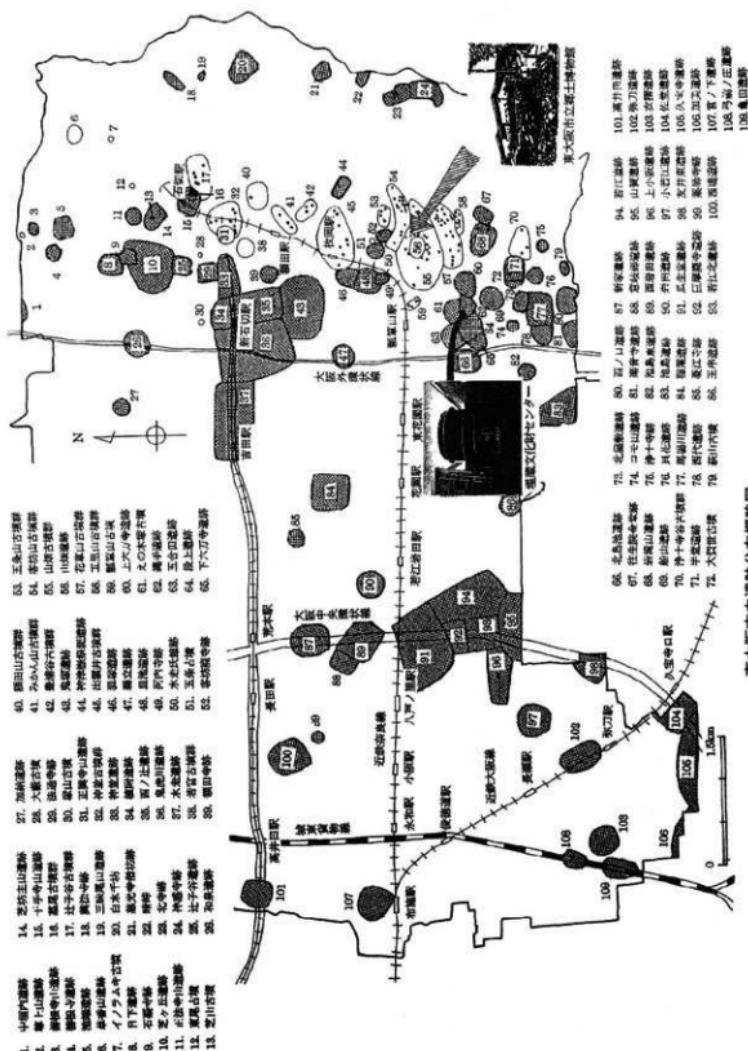
次に、平成16年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。
№6の西岩田遺跡では、現地表-1.2mで層厚10cmの遺物包含層を検出した。層内から古墳時代から鎌倉時代の遺物が出土した。この取扱いについて協議した結果、届出者は遺物包含層を破壊しない設計に変更された。変更した基礎とおりに工事が行なわれているかどうか、再度確認のため立会調査を実施した。

若江遺跡は、現地表から浅い遺構面が広がる遺跡で、毎年連続して本発掘調査を実施している遺跡である。本報告でも第81次調査の成果を掲載している。№26では基礎の下部に地盤改良が伴い、その床底は-1.3mであった。調査を実施したところ、現地表から-1.0mで鎌倉時代の遺物包含層を検出した。この遺物包含層は調査で確認した-1.3mまで、30cm以上の層厚を持つものであった。層内から瓦器類や上師器皿が多量に出土した。若江遺跡では中世期の遺物包含層に時期幅が認められるのが通例であるが、今回は大概13世紀代に収まるもので、貴重な成果といえよう。協議の結果、地盤改良の水準を遺物包含層の損壊がないところまで変更(再届出)され、立会調査を実施した。

平成16年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
	鬼虎川遺跡第59次発掘調査 (賃貸共同住宅)	弥生町1401-2番地	菅原	平成15年12月16日～平成16年1月28日	270m ²	本書第2章。
	若江遺跡第81次発掘調査 (個人専用住宅)	若江木町4丁目536-8番地	菅原	平成16年2月12日～平成16年2月18日	22m ²	本書第3章。
1	河内寺跡第11次発掘調査 (個人専用住宅)	河内町443番地	菅原	平成16年3月4日～平成16年3月31日	100m ²	本書第6章。
			菅原	平成16年4月1日～平成16年5月21日		本書第6章。
			菅原	平成16年12月24日		中断に伴う遺構面清掃作業。経過詳細は次年度報告。
2	口下遺跡確認調査 (個人専用住宅)	H下町2丁目1096-1,2番地	菅原	平成16年4月26日	1m ²	GL-0.7mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
3	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江南町2丁目473-5番地	菅原	平成16年5月7日	4m ²	GL-1.7mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
4	横沼跡確認調査 (個人専用住宅)	横沼町3丁目33-1番地の一部	菅原	平成16年5月26日	4m ²	GL 1.2mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
5	船渠遺跡確認調査 (個人専用住宅)	吉田下島4-27番地	菅原	平成16年6月14日	4m ²	GL-3.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
6	西ノ辻遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	弥生町1414-1番地	菅原	平成16年6月16日	4m ²	GL-3.0mまで調査。0.35mで弥生時代の遺物(含む層検出。本調査実施(N.13))
7	西岩田遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西岩田4丁目274-275-1番地の各一部	菅原	平成16年6月23日	4m ²	GL-1.8mまで調査。1.2mで古墳時代～中世期の遺物(含む層)検出。墓地の設計変更の再露出をみて、立会調査実施。
8	丘谷町遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東広町824-7番地	菅原	平成16年7月6日	2m ²	GL-0.8mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
9	植附遺跡確認調査 (個人専用住宅)	西石切町1丁目49-6番地む	菅原	平成16年7月29日	2m ²	GL-0.7mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
10	綱手遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南四条町984番地	菅原	平成16年8月3日	2m ²	GL 0.5mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
11	若江北遺跡第9次発掘調査 (個人住宅施設)	若江南町3丁目33-2番地	菅原	平成16年8月17日	10m ²	本書第4章。
12	前山遺跡確認調査 (個人専用住宅)	六万寺町3丁目638-26番地	菅原	平成16年9月3日	2m ²	GL-2.2mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
13	西ノ辻遺跡第47次発掘調査 (賃貸共同住宅)	弥生町1414-1番地	菅原	平成16年7月30日～平成16年8月30日	137m ²	本書第5章。
14	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町1980-45,44番地の一部	菅原	平成16年9月7日	4m ²	GL 2.2mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
15	山崎古墳群確認調査 (個人専用住宅)	雲草山町59-9番地	菅原	平成16年9月30日	4m ²	GL-1.2mまで調査。0.4mで古墳時代の遺物(含む層)検出。本調査実施(N.22)

	調査事業名及び用途	実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
16	芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)	北石切町1980-22番地	菅原	平成16年10月22日	4m ²	GL-1.1mまで調査。1.0mで古墳時代の遺物包含層検出。届出事には支障なし。
17	衣摺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	衣摺3丁目1073-4-1073-6番地	菅原	平成16年10月25日	4m ²	GL-3.0mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
18	小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	小若江3丁目678-22番地	菅原	平成16年10月28日	4m ²	GL-2.7mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
19	若江遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	若江南町2丁目520-2番地ほか3棟	菅原	平成16年11月8日	5m ²	GL-0.9~1.6mまで調査。0.3mで室町時代の遺物包含層検出。基礎の設計変更の再届出をへて、立会調査実施。
20	若江遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	若江北町3丁目873-1-2番地	菅原	平成16年11月10日	5m ²	GL-0.7mまで調査。0.3mで室町時代の遺物包含層検出。別途発掘調査実施。
21	山崎古墳群確認調査 (個人専用住宅)	鶴巣山町56-4番地	菅原	平成16年11月1日	2m ²	GL-0.8mまで調査。0.6mで古墳時代の遺物包含層検出。本調査実施(No.23)
22	山崎古墳群第25次発掘調査 (個人専用住宅)	鶴巣山町59-9番地	若松	平成16年11月4日～平成16年11月20日	70m ²	詳細は次年度報告。
23	山崎古墳群第26次発掘調査 (個人専用住宅)	鶴巣山町56-4番地	若松	平成16年11月26日～平成16年12月7日	54m ²	詳細は次年度報告。
24	千手寺山遺跡確認調査 (個人専用住宅)	上石切町2丁目1630-13番地	菅原	平成16年11月22日	2m ²	GL-2.7mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
25	若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江本町4丁目925.1-3番地の各一部	菅原	平成16年11月22日	2m ²	GL-0.5mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
26	芝坊竹山遺跡確認調査 (個人専用住宅)	東石切町6丁目1672-232番地	菅原	平成16年12月6日	3m ²	GL-0.9mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
27	若江遺跡確認調査 (賃貸共同住宅)	若江本町4丁目955-6番地ほか3室	菅原	平成16年12月21日	5m ²	GL-1.3mまで調査。1.0mで鎌倉時代の遺物包含層検出。基礎変更の再届出を経て、立会調査実施。
28	横手遺跡確認調査 (個人専用住宅)	六万寺町3丁目1081-28番地	菅原	平成16年12月24日	1m ²	GL-1.1mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
29	抵塙遺跡確認調査 (個人専用住宅)	喜多川町115.11.118-6番地	菅原	平成17年1月31日	4m ²	GL-0.9mまで調査。埋蔵文化財検出せず。
30	山崎古墳群確認調査 (賃貸共同住宅)	鶴巣山町45	菅原	平成17年3月14日	4m ²	GL-1.75mまで調査。0.8mで古墳時代の遺物包含層検出。基礎変更の再届出を経て、立会調査実施。



第2章 鬼虎川遺跡第59次発掘調査

1) はじめに

鬼虎川遺跡は、東大阪市弥生町を中心に、宝町・西石切町5丁目・同7丁目・新町の一部にわたる後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。本遺跡は生駒山地西麓部に発達した、標高4~8mの沖積扇状地の扇端部から沖積低地にかけて立地する。南北約1150m、東西約650mの範囲に広がっている。遺跡は昭和41年の国道170号線の水道管理設工事の際に発見され、昭和50年の第1次調査以来、今まで60次に及ぶ発掘調査が実施されてきた。

これまでの調査で、本遺跡が弥生時代前期末から中期後半にかけて河内潟(河内湖)東縁辺における拠点集落に成長したことが判明している。遺跡周辺での人間活動の痕跡は、後期旧石器時代に溯源る。第25次調査で海蝕崖堆積層からナイフ形石器が発見されているのがその証左といえよう。縄文時代に入ると、前期の海蝕崖が検出されている。中期の船元式土器も中量程度出土しており、該期の集落が縁辺に營造したことが窺える。また近年の調査で晚期後半の刻目凸帯文土器が散見されることも注目される。主に遺跡の東部、海蝕崖付近では、古墳時代中期の集落が見つかっており、竪穴住居址などの遺構が発見されている。遺跡西部の弥生集落の上部には、室町時代の溝から卒塔婆が出土するなど、中世考古学の分野においても貴重な成果を提供している。

平成15年9月、弥生町1401-2番地において、賃貸共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人より提出された。建物基礎の形状は杭打工事で埋蔵文化財への影響が懸念された。そこで確認(試掘)調査が必要な旨届出者宛て通知した。確認調査の結果、弥生時代の遺物包含層が検出された。取扱いについて、協議を重ねた結果、工事に先立って発掘調査を実施することで双方合意した。工事により埋蔵文化財が破壊される箇所は、共同住宅の本工事部分200m²と貯留槽等工事部分70m²の都合270m²となり、「東大阪市埋蔵文化財緊急発掘調査補助事業取扱い要綱」の規定に基づき、本体工事箇所は公費負担、貯留槽箇所は原因者負担とした。調査は平成15年12月16日から平成16年1月28日まで実施した。

2) 第59次調査地付近の調査状況

今回の第59次調査地は、鬼虎川遺跡と西ノ辻遺跡の境界付近にあたる。そこで行論の都合上、西ノ辻遺跡の調査成果についても触れておきたい。

まず、調査地の東、西ノ辻遺跡第45次調査地(以下、「西ノ辻45次地」と略記する)では、弥生時代中期の竪穴住居址が切り合い関係も含めて9棟検出されたのをはじめ、溝・ピット・土坑・流路などが発見されている。古墳時代中期の掘立柱建物1棟・溝も見られる。西ノ辻42次地では弥生時代中期の方形周溝墓・大溝・上坑、古墳時代の掘立柱建物などが検出された。西ノ辻44次地では弥生時代中期のピット・溝、平安時代の掘立柱建物(柱通り)が発見された。西ノ辻42次・44次地では共通して、弥生時代の遺構・遺物包含層から、縄文時代晚期後半滋賀里IV式土器が中量出土している。該期集落の存在を予想させるものである。鬼虎川39次地は共同住宅の浄化槽を調査対象としたため、面積は狭隘で詳細は密らかでないが、単位面積で考えると多量の弥生土器(中期)が出土した。その中には胴部下半に穿孔を持つ壺がみられ、方形周溝墓などの存在を示唆する。これらの成果をまとめると、鬼虎川59次地周辺では、弥生時代中期の遺構が稠密に分布し、その上部には古墳時代中期や平安時代の遺構が部分的に所在することがわかる。縄文時代晚期については、その出土状況から、もと周囲に介在したもののが、弥生時代以降に擾乱されたと考えることができる。したがって、今回の調査では縄文時代晚期・弥生時代中期の集落様相の把握が期待されたところである。

次に、条里制と小字地名について、触れておきたい。第1図は、『枚岡市史』第2巻別編(1965)所載の小字図をもとに、現代の地形図上にプロットした『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』(2001、東大阪市教育委員会)所収小字切図を、1/2500地形図に拡大して落としたものである。参考として、昭和16・17年に京都大学考古学教室小林行雄氏によって調査された2号地点・4号地点も併記した。その結果、鬼虎川59次地は字「溝延」に、鬼虎川39次・西ノ辻42次・同44次地は字「五之坪」に、西ノ辻45次地は字「植付前」にそれぞれ該当することがわかった。第1図を見ると、鬼虎川59次地の北側道路は字「溝延」と「七の坪」の字境にあたり、この延長線は西ノ辻45次地の南面に至っている。字「植付前」は現在の近鉄東大阪線の北側に所在する旧植附町(現西石切町3丁目~一帯)に因んだ字名であり、「植附町の前面に控えた」あるいは「植附町を臨むほど指揮の間にある」といった意味合いが含まれており、字の形態を見ても、複数の字を統合したものと考えられる。荻田昭次氏^{*}に拠れば、「植付前」は昔から四に分割できるようである。また、字「七の坪」は正方形を呈し、東西・南北とも約108mを測ることが判明した。のことから現代にあっても、条里制の遺制が鬼虎川59次地周辺にみられることがわかる。すなわち、周辺地は原始古代の集落景観が色濃く残存している地域といえよう。

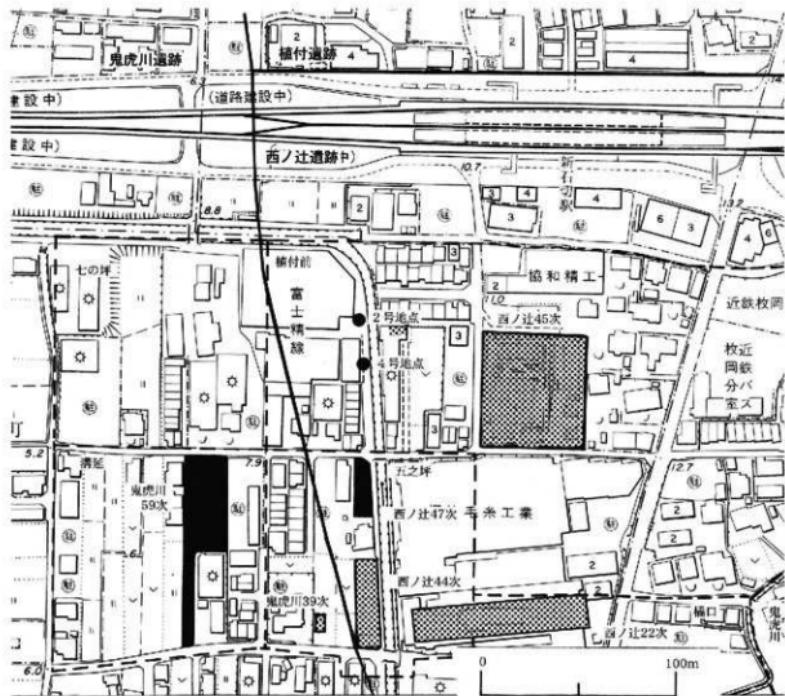
3) 地区割と調査方法

前記したように、調査地では弥生時代中期の集落遺構が広がることが予想された。いっぽう、試掘データから、弥生時代遺構面と現代の地表面の比高差が小さく、近代から現代にかけての耕作や工事により搅乱された結果、遺物包含層の層厚は薄いと判断された。つまり、地山層上面での遺構面確認が調査上必須の課題となつた。この見地から、調査トレントは遺構面追及に応じた形状が望まれた。本体工事箇所で工事実施により埋蔵文化財が破壊されるのは、基礎杭と地中梁の打設の通り部分になることから、東大阪市教育委員会は大阪府教育委員会の指導を仰ぎ、東西方向の地中梁通りを北側に集約した形を探った。このため、調査地の中央では平面的に広く遺構面精査を行なえる地帯を確保できた。調査の進行に応じて、西側の基礎杭通りをA地区、東側の基礎杭通りをB地区、中央部をC地区と仮称した。調査対象は、賃貸共同住宅の本体箇所のほかに、貯留槽の埋設箇所があった(D地区)。当初は本体箇所と貯留槽埋設箇所との間は1mほど隔離していたが、調査機関の関係から、むしろ一体的に調査したほうが短縮すると判断し、原作者の諒解を得てC地区と接続した。

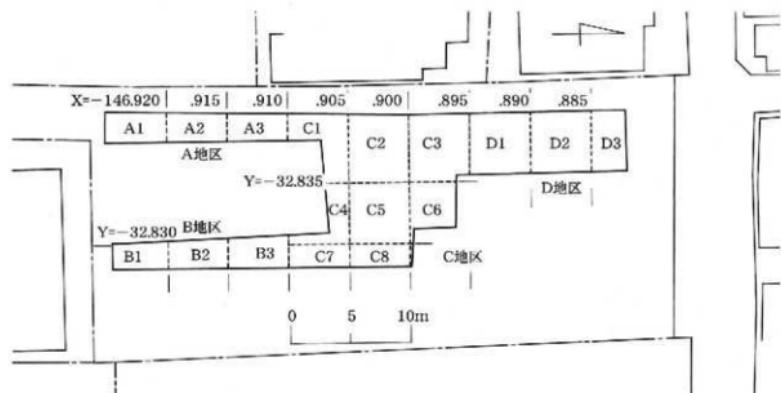
次に、調査トレントの形状から、遺構の把握や、現地での記録作成、土器等の遺物採集に国家座標系に基づく基準杭が必要となった。これらの基準点・調査点測量は、当該年度の単価契約業者である株式会社イシヤマエンジニアリングに委託の上、実施した。その結果、測量値は調査の北端においてX=-146.880、南端はX=-146.930、東端はY=-32.825、西端はY=-32.840、のそれぞれ付近に求められた。地区割は、仮称地区のほか、長大な遺構検出に備えて、小地区を設定する必要があった。そこで、国家座標系の小数点第3位が0または5を示す値を基軸に、地区割を行なつた。この結果、A地区はA1・A2・A3の3地区に、B地区はB1・B2・B3の3地区、C地区はC1・C2・C3・C4・C5・C6・C7・C8の8地区、D地区はD1・D2・D3の3地区に細分された。

調査地は、着手前まで耕作地として利用されていたため、調査は、試掘データに基づき、耕土層、床土層、および土質や観察から近代ごろの堆積と考えられる灰オリーブ色砂質粘土層までを重機で除去し、その層以下の黒色砂泥粘土層(弥生時代遺物包含層)を人力にて掘削した。遺物包含層の下面は地山層となっており、その上面で遺構面の把握・追及に努めた。

*荻田昭次「東大阪市遺跡発見シリーズ 西ノ辻遺跡」(『東大阪市文化財協会ニュース』21、1986年)



第1図 鬼虎川遺跡第59次調査地とその周辺



第2図 調査地現況・地区割図

4) 層位

確認した履歴は下記のとおりである。

第1層 鋤土層。

第2層 床土層または客土層と考えられる。

第3層 2層に分層したが、耕作土である。須恵器、弥生土器が出土した。試掘調査によりこの層まで機械掘削をおこなった。

第3A層 7.5Y6/2灰オリーブ粗粒砂混じりシルトに第2層が混入する層。

第3B層 7.5Y4/3黒オリーブ粗粒砂混じりシルト、上部にマンガン粒の沈着がある。

第4層 10YR3/3暗褐色中粒砂混じり土。上面は遺構面Iを形成する。上師器・須恵器・瓦器が出土しており、中世期の遺物包含層である。

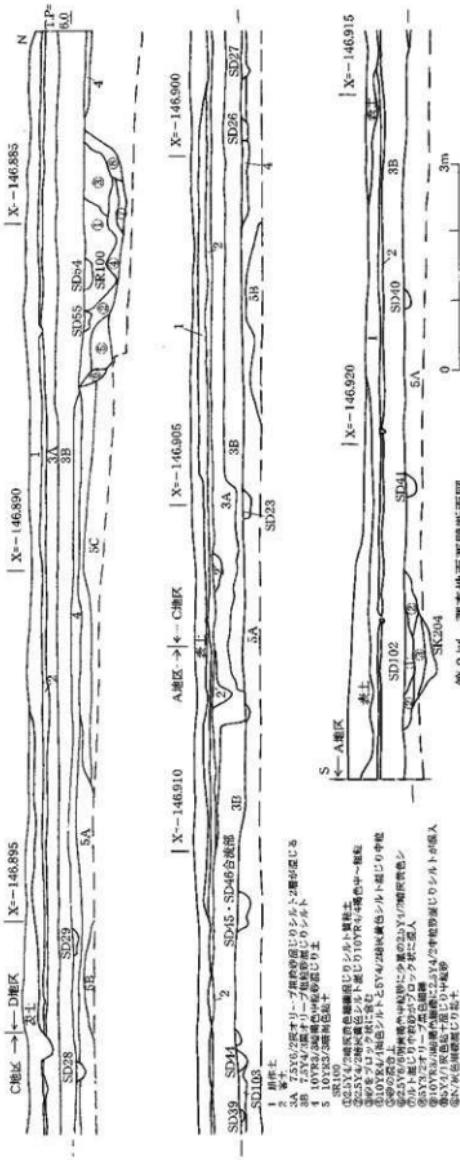
第5層 地山層。10YR3/3暗褐色粘土。上面は造構面Ⅱを形成し、弥生時代中期後半の造構を検出した。

5) 遺構

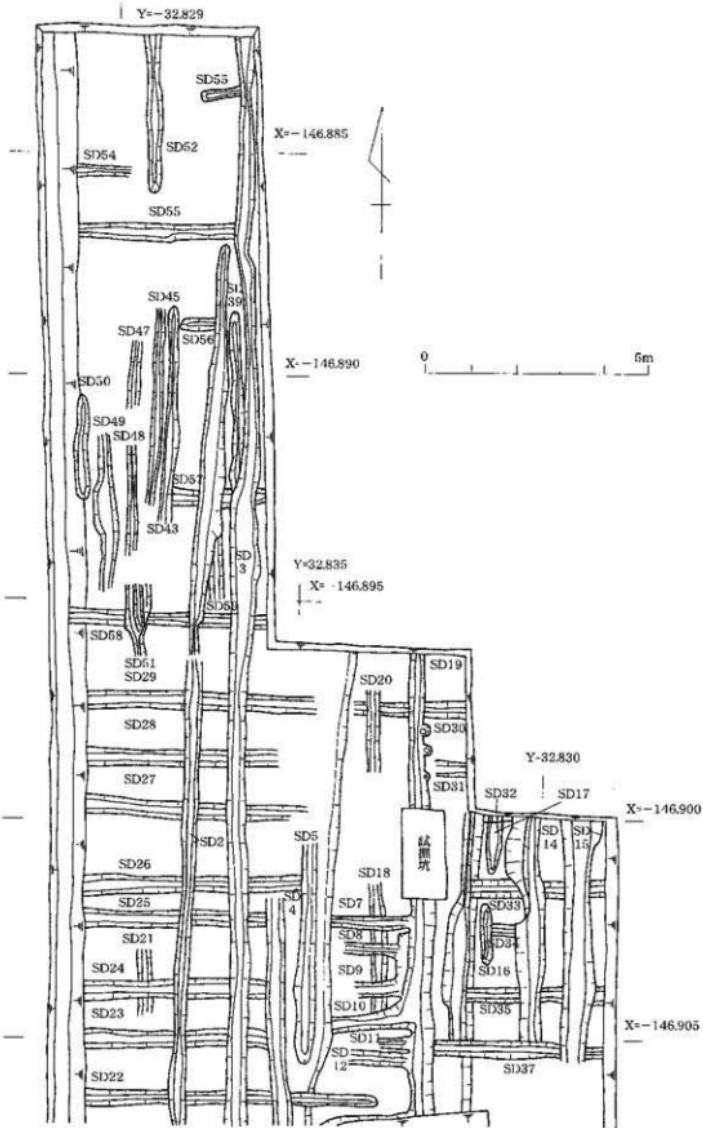
遺構は、第4・5層上面で検出した。後世の削平などにより、異なる時期のものを同一遺構面で検出した。以下、第4層（遺構面I）、第5層（遺構面II）の主な遺構について順に述べる。

遺構面Ⅰ 東西方向、南北方向に延びる計58条の溝を検出した。耕作に伴う鋤溝と考えられる。東西方向の溝の大半が幅約30cm、深さ5~15cmを測る。埋土は10Y3/2オリーブ黒色細緻混じり粘土。南北方向の溝の幅は25~50cmで深さは3~10cmを測る浅いものであった。

埋土は、5GY5/1オリーブ灰色粗～細礫混じり細粒砂。東西方向の溝を



第3図 薙査地面西壁断面図



第4図 造構面I平面図 (C地区・D地区)

南北方向の溝が切っており、SD6~12とSD19~20は3層上面からの切り込みがみられることから3時期考えられる。南北方向の溝は南部ではみられなかったが、これは調査地南端から北端にかけて約30cmの比高差があり、削平によるものと考えられる。また、東から西に向かつてA地区では、2つの段差がみられ、西端部においては、第4層の堆積がなかつた。C地区においては、2つの棚田状の段差がみられた。遺物は、弥生土器、上師器、須恵器、瓦器の細片が出土した。これらの溝の所属時期は、中世期以降であると考えられる。

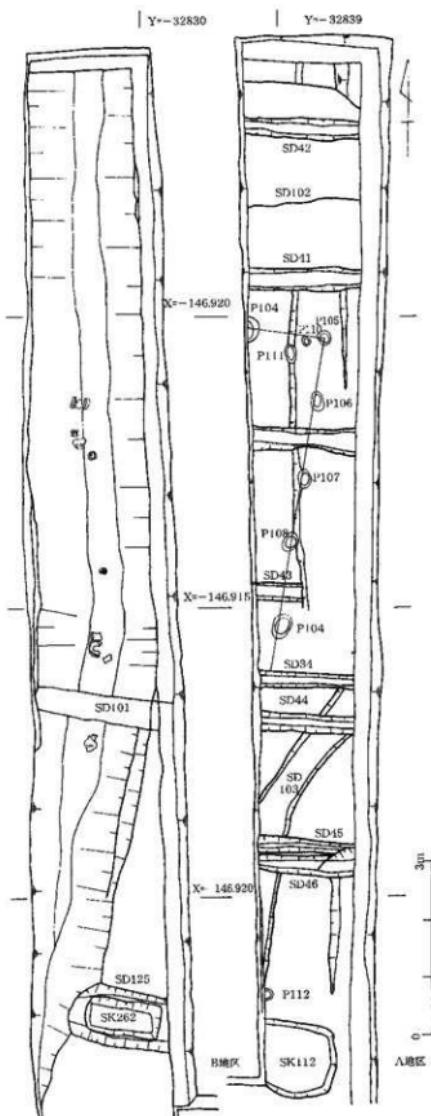
遺構面II ピット16個、土坑9基、溝3条、土坑墓1基、自然河川を検出した。また、この遺構の大半が調査地南部に集中していた。ピット、土坑の規模については別表に掲げたい。以下、各地区ごとに主な遺構について述べる。

A地区では中世期の溝と共に弥生時代の溝(SD103)と大溝(SD102)、ピット(SP104~109)、上坑(SK203・204)、土坑墓(SK201)を検出した。

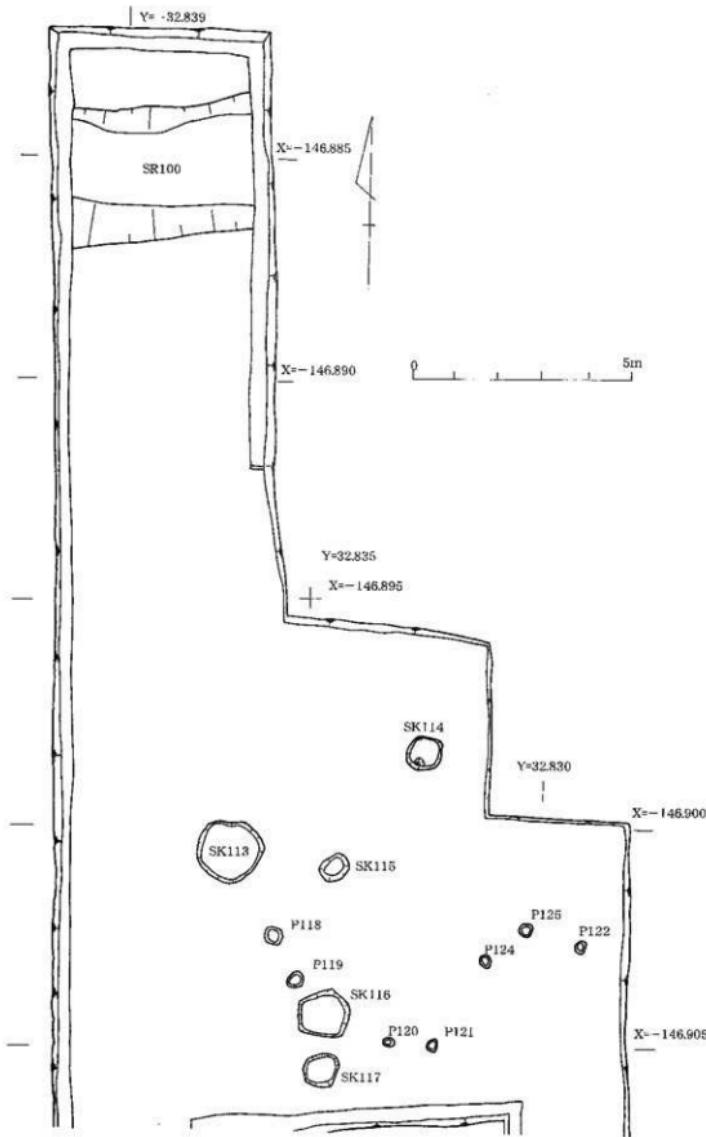
ピット SP104~109は径20~40cmを測り、SP104~SP105の東西軸とSP105~SP109の南北軸がともに約1.2m間隔で直交していることから東西1間以上、南北4間の建物の存在が考えられる。

溝 SD103はピット北側で検出した。幅60cm、深さ10cmを測り北東から南西に延びている。B・C地区において、これに続くものがみつかっておらず全長は不明である。

大溝 SD102は南端で検出した東西方向の溝である。断面はゆるやかな逆台形を呈し最大幅2.4m、最深46cmを測る。全長・形態を確認するために東部へ若干の拡張を行なったところ大きく南方へ屈曲しており、周溝墓の溝の一部であ



第5図 遺構面II平面図 (A地区・B地区)



第6図 造構面II平面図(C地区・D地区)

る可能性が考えられる。縄文時代後~晚期の土器、弥生時代前~中期の土器が出た。埋没時期は中期である。

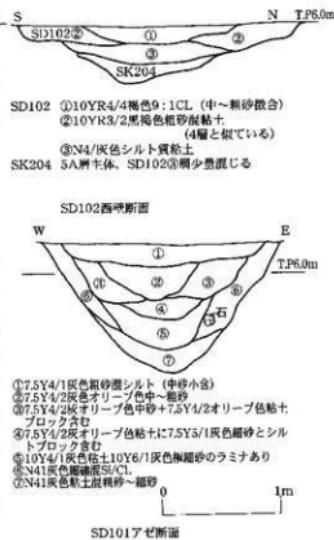
土坑・土坑墓 SD102底部より上坑2基(SK203、SK204)と土坑墓1基(SK201)を検出した。SK203は東西1.2m、南北0.7mを測る梢円形で埋土は10Y4/1灰色粘土であった。SK204は南北1.2mを測る梢円形を呈するを考えられ、埋土はN3/暗灰色粗粒砂～細礫混じりシルトであった。ともに溝底面からの深さは約7cmほどである。各造構内より弥生土器の小・細片が出土した。

SK201は長辺1.8m、短辺0.8mの木棺状の長方形を呈する土坑である。木棺の痕跡は確認できなかった。埋土はN3/暗灰色粘土である。この土坑より頭位を東に向けた、うつ伏せの状態の人骨が出土した。頭部は下向きで、右腕は右肩上方に折り曲げ、左腕は腹部を押さえるように内側に向ってゆるく曲げられていた。大腿骨は散在しており明確な形状は不明であるが、下肢をやや折り曲げた状態であった可能性がある。墓坑内から弥生土器の細片が出土した。

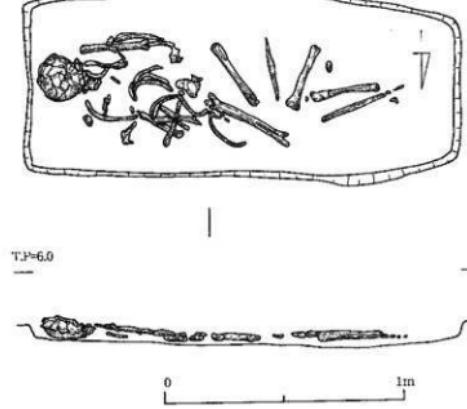
これらの土坑は、断面状況によりSD102掘削以前に造られたと考えられる。

B地区では大溝(SD101)、溝(SD125)、土坑1基(SK202)を検出した。

大溝 SD101は、南北方向に延びる溝で、断面はU字形を呈し、最大幅2m、最深1mを測る。埋土は大きく3層に分層できる。上層(①層)は7.5Y4/1灰色粗粒砂混じりシルト層。中層(②~④層)



第7図 SD101・SD102断面図



第8図 SK201出土人骨



第9図 SK201・203・204平面図

は7.5Y4/2灰オリーブ色中～粗粒砂と7.5Y4/2灰オリーブ色粘土をブロック状に含む層。下層（⑤～⑦層）はN4/灰色粘土と細～粗粒砂が混合する層である。上層は埋土であり、中層と下層は堆積層である。底面は北に向かって20cmのゆるやかな傾斜がみられた。遺物は、縄文上器、弥生時代前期から中期後半の土器が出土した。巣内第Ⅲ～Ⅳ様式の壺、甕、鉢、高杯などは、溝底部からやや上（④・⑤層）で多くみつかっており、同層から出土したほぼ完形の壺には底部と体部中央に穿孔が施されていた（第11図34）。また、上層と下層から出土した土器が接合できたことから、SD101は弥生時代中期後葉に短期間にうちに埋没したと考えられる。

溝 SD125は、幅1m、深さ35cmを測る東西方向の溝である。SD101との切り合いはみられなかったが、SD101に向けての傾斜を確認した。

また、底部で土坑SK202を検出した。長辺1.2m、短辺60cmの長方形を呈する。埋土は、N3/暗灰色粗～細礫混じりシルトである。遺物は出土していない。

C地区では、ピット（P118～124）、土坑（SK112～113）を検出した。

ピット・土坑 P118～124は径が約30cm、深さ約10cmを測り、SK112～123は深さ約20cmを測り、断面は皿状を呈していた。ピット、土坑ともに埋土は7.5Y3/3暗褐色中粒砂混じり粘質シルトのものが大半である。遺物は弥生土器の細片が少量出土した。また、南部側に遺構が集中する傾向がみられた。

D地区においては、ピット、土坑といった遺構はなかったが、北端部で落ち込み状のSR100を検出した。最大幅3.1m、最深60cmを測り、断面は、平たい逆台形状を呈する。断面状況から自然河川の一部であると考えられる。遺物は、摩滅した弥生土器の細片が出土した。

第1表 ピット・土坑一覧表

遺構名	平面形態	長軸	短軸	深さ	埋土	遺構名	平面形態	長軸	短軸	深さ	埋土
S P110	円形	17	7	7	A	S P121	円形	26		7	C
S P111	梢円形	34	20	10	B	S P122	梢円形	28	23	6	A
S P112	円形	20		5	A	S P123	円形	28		11	A
S P104	梢円形	40+	12+	8	A	S P124	梢円形	28	22	7	A
S P105	円形	24		17	A	S K112	梢円形	128+	124	16	A
S P106	梢円形	33	21	7	A	S K113	円形	148	136	12	A
S P107	梢円形	32	24	14	A	S K114	円形	88	80	18	A
S P108	梢円形	33	24	11	A	S K115	梢円形	66	56	17	A
S P109	梢円形	40+	30	12	A	S K116	五角形	124	116	15	C
S P118	梢円形	44	40	11	A	S K117	円形	86	80	12	B
S P119	円形	34		13	A						
S P120	梢円形	26	22	12	A						

【凡例】A:7.5YR3/3暗褐色中粒砂混じり粘質シルト
B:7.5YR4/1褐色中粒砂混じり粘土
C:5Y4/4暗オリーブ色細礫混じりシルト

6) 出土遺物

今回の調査では縄文時代～中世期の土器・石器が出土した。

(1) 土器

縄文土器、弥生土器、瓦器、土師器、須恵器などが出土した。各時代の遺構及び遺物包含層などに分けて記す。縄文土器と弥生土器は、胎土中に角閃石・石英・長石・雲母を含むものを生駒西麓産とする。それ以外は非河内産で記す。

① 繩文土器（第10図1～7）

少量のため、一括してこの項で取り扱う。浅鉢（1）と深鉢（2～7）がある。口縁端部が丸く終わるもの（2～4・7）、口縁端部が面を持つもの（1・6）がある。1は口縁部が内寄しながら立ち上がる。2は口縁部が外上方へまっすぐ伸びる。3・4・5は磨消繩文を施す土器である。3・4は口縁部が外反する。内面の口縁端部近くに沈線を廻らし、その上部に繩文を施す。5は外面に沈線を廻らし、下部に繩文を施す。6・7は口縁部が外上方へまっすぐ伸びる。外面に1条の刻み目凸帯文を貼り付ける。いわゆる、船橋式土器である。すべて内外面をナデ調整する。1は第4層、2・5・7はSD101、3・4・6はSD102より出土。1・2は後期～晩期、3～5は後期中葉、6・7は晩期後半。生駒西麓産。

② 弥生土器

弥生土器はI～V様式に分類する。V様式のものは出土していない。III様式とIV様式は明確に分類できないのでIII～IV様式として扱う。II様式の中にはI様式の可能性がある壺や鉢も含まれる。また、口縁部や裾端部のヨコナデ調整は普遍的なのであえて記さない。

I様式の土器（第10図8～23）

繩文土器と同じく、一括してこの項で取り扱う。8～23は壺である。8・9は外面に刻み目凸帯文を貼り付ける。8は刻み目凸帯文が2条みられる。外面は8本/cmのハケメ調整、内面はナデ調整する。9は刻み目凸帯文が3条みられる。外面はヘラミガキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。10～13は外面にヘラ描沈線文が2条みられる。10は外面に10本/cmのハケメ調整、内面をナデ調整する。11は内外面をナデ調整する。12は外面を5本/cm、13は7本/cmのハケメ調整する。14はヘラ描沈線文が1条みられる。外面をヨコナデ調整の後、ハケメ調整する。15はヘラ描沈線文が9条、16は6条みられる。外面はナデ調整する。17はヘラ描沈線文が7条みられる。外面はヘラミガキ調整する。12～17の内面は板状工具によるナデ調整する。18はヘラ描沈線文が9条みられる。内面はヘラミガキ調整する。19はヘラ描沈線文が5条みられる。内面は風化により調整は不明である。20はヘラ描沈線文が8条、21・22は4条、23は5条みられる。内面はナデ調整する。9はSD101、16は第4層、20はSD1、21はSD18、22はSK203、他はSD102より出土。10は非河内産、他は生駒西麓産。いずれもI様式新段階に属する。

遺構内出土上上器

SD1（第11図24）

24は壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。III～IV様式。生駒西麓産。

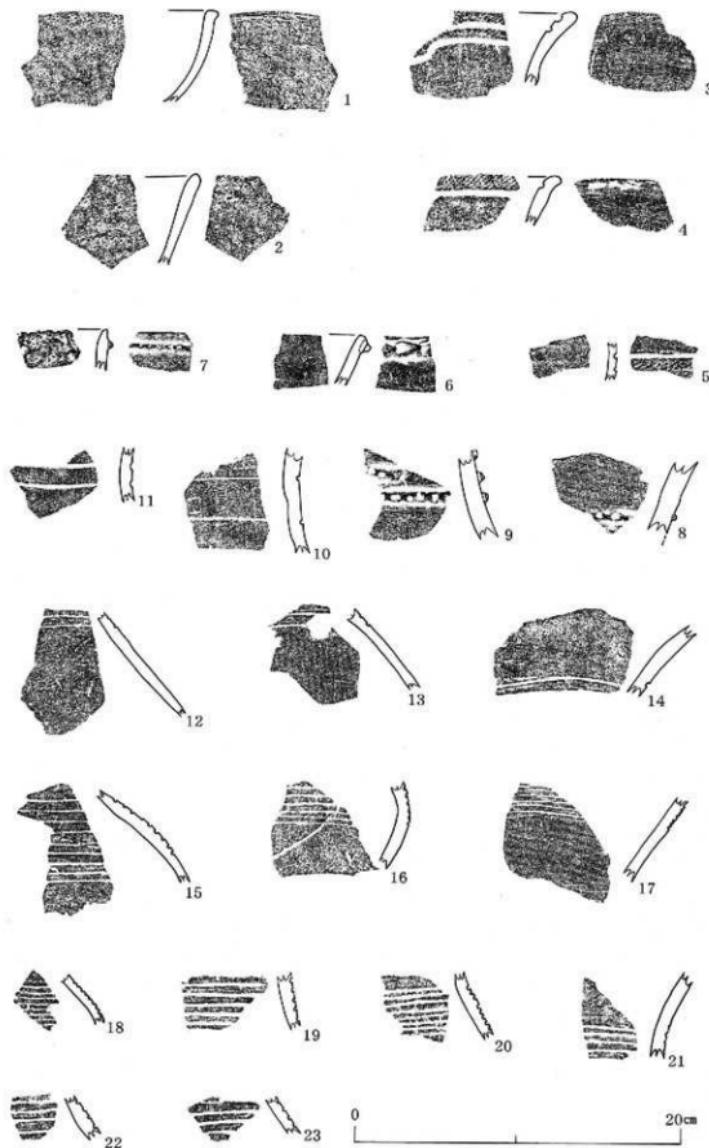
SD26（第11図25）

25は脚部である。器種は不明である。裾部は直立する。裾端部は面を持つ。円孔を穿ち、外面に竹管文を施す。外面に板状工具によるナデ調整する。外面裾端部に黒斑がある。III～IV様式。生駒西麓産。

SD101（第11～15図26～117）

壺・無頸壺・細頸壺・水差形土器・高杯・鉢・壺・底部がある。

26～55・63は壺である。26は口頭部が外反し、口縁端部は丸く終わる。内面は8本/cmのハケメ調整する。27・28は口頭部が筒状を呈し、ゆるやかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は上方へ大きく拡張し、幅広の面を持つ。27は口頭部外面に6本/cmのハケメ調整とヘラミガキ調整する。28は頸部と体部の境に刻み目凸帯文を貼り付ける。口縁端部に2条の円線文と下方に刻み目を施し、円形浮文を貼り付ける。7個の円形浮文のうち1個だけ中央を凹ませる。口頭部外面を7～8本/cmのハ



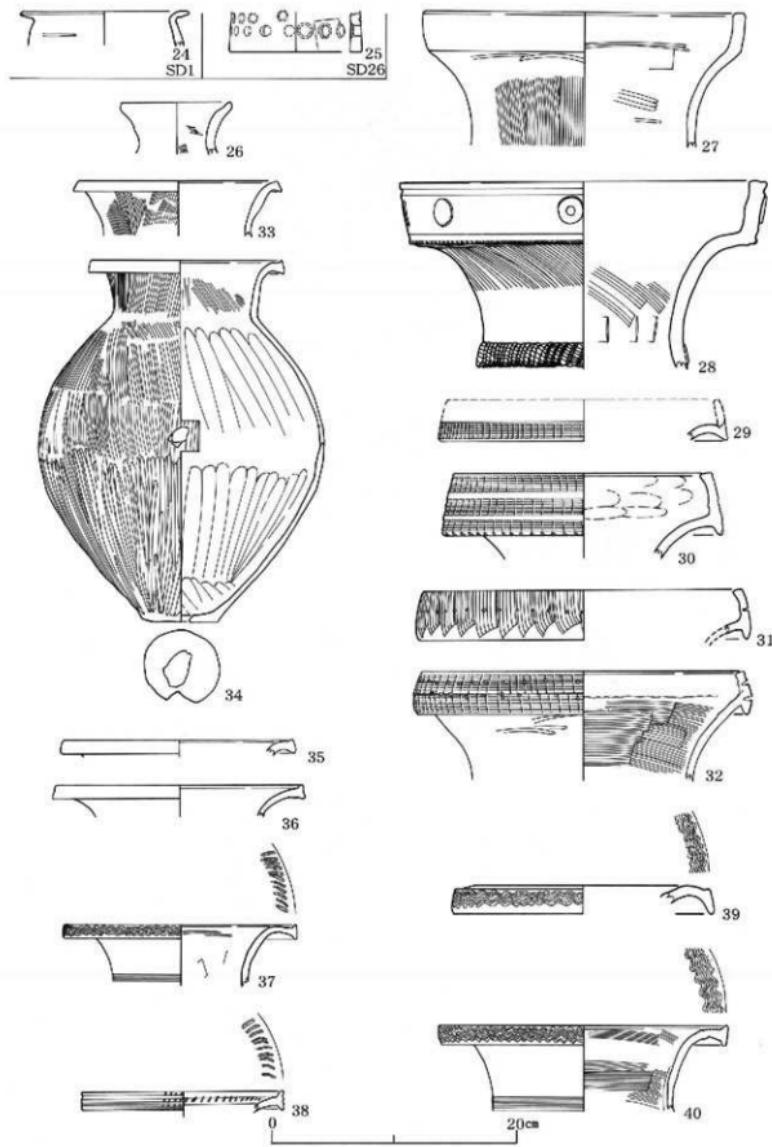
第10図 純文土器・弥生土器実測図

ケメ調整の後、ナデ調整する。内面は口頸部上半を4本/cmのハケメ調整、下半を板状工具によるナデ調整する。29~32は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上下へ大きく拡張する。29は口縁上端部が欠損する。口縁端部に櫛描箋状文を施す。外面をユビナデ調整する。口縁端部外面に黒斑がある。30は口縁端部に櫛描箋状文を3帯と下方に刻み目を施す。口縁端部内面をユビナデ調整する。31は口縁端部に櫛描崩形文と縦方向の直線文を施す。その後、U形刺突文を施す。風化により調整は不明である。32は口縁端部に櫛描箋状文を2帯施した後、U形刺突文を施す。口頸部外面をヘラミガキ調整、内面を7本/cmのハケメ調整する。外面の風化が激しい。33~40は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。33は口縁部外面を8本/cmのハケメ調整する。34は底部が平底である。体部が中位で大きく張り、縦長の球形を呈する。頸部は上方へ立ち上がる。底部と体部中央に焼成後に穿られた孔がある。体部上半と口頸部内外面を5~6本/cmのハケメ調整、体部下半をヘラミガキ調整する。体部内面をユビナデ調整する。外面に煤が付着する。37は頸部外面に櫛描直線文、口縁端部に波状文を施す。頸部外面をナデ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。口縁部内外面をヘラミガキ調整する。38は口縁端部に3条の凹線文を施した後、部分的に刻み目を施す。37・38とも口縁部内面に櫛描列点文を施す。39・40は口縁端部と口縁部内面に櫛描波状文を施す。39は外面をヘラミガキ調整する。40は頸部外面に櫛描直線文を施し、内面を7本/cmのハケメ調整する。口縁部内外面に赤色顔料が付着している。41~55は口頸部が外反気味に立ち上がる。口縁端部は面を持ち、下方へ拡張する。口縁端部に櫛描箋状文を施すもの(41・45・47・53)、口頸部外側と口縁端部に箋状文を施すもの(46・48~52)、櫛描文様を施さないもの(42~44・54・55)がある。41・42は口縁端部に刻み目を施す。外面はヘラミガキ調整、またはハケメ調整するものが多い。内面はハケメ調整、または板状工具によるナデ調整する。43は内面をユビナデ調整、53はヘラミガキ調整する。63は口頸部を欠損する。底部は平底で、体部が中位で大きく張る。体部上半に櫛描直線文と波状文を施す。櫛原体は中央が幅広く空いており、その両端に上が3本、下が2本の条溝を施す。原体の条溝は5本である。体部下半を縦方向と横方向のヘラミガキ調整する。内面は板状工具によるナデ調整する。26はII様式、他はIII~IV様式。31・35・38~40は非河内産、他は牛駒西麓産。

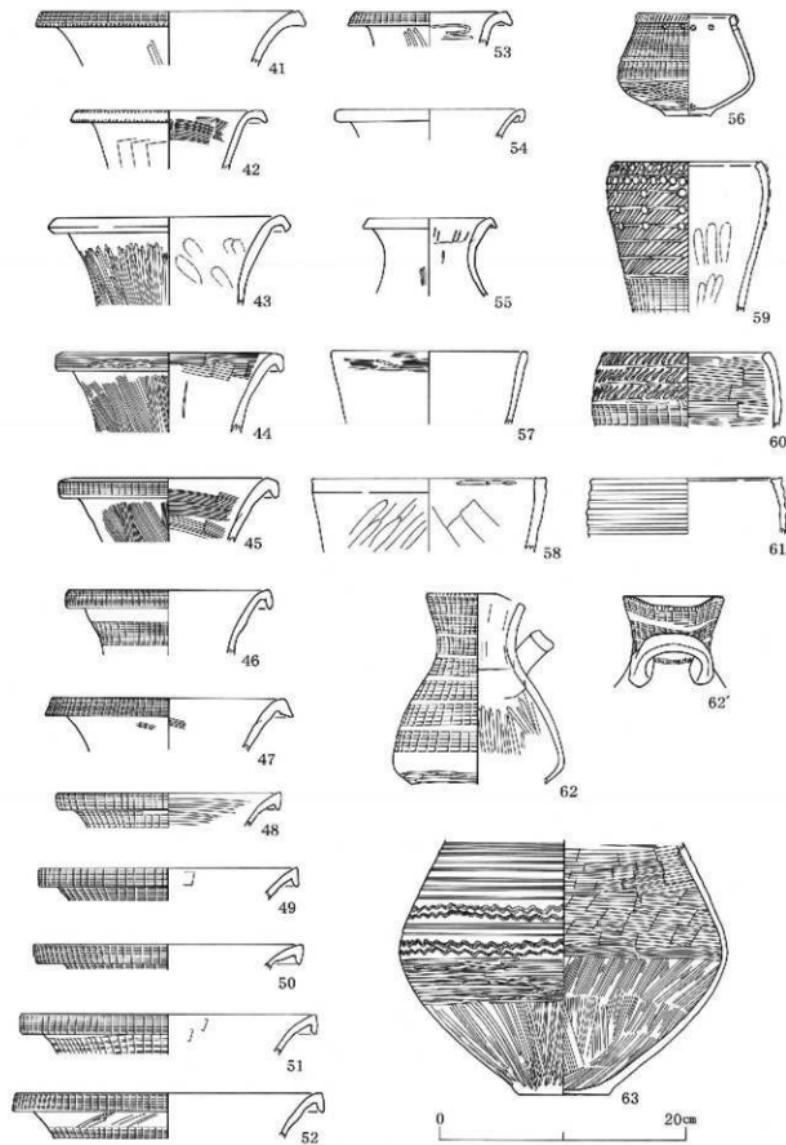
56は無頸壺である。底部が平底である。体部は下方で張り、口縁部にかけて内傾する。口縁端部は段を持つ。体部上半に2ヶ1対の紐穴を穿つ。体部外面に櫛描箋状文を3帯、口縁端部に刻み目を施す。体部外側をヘラミガキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。内面全体に黒斑がある。III~IV様式。牛駒西麓産。

57~61は細頸壺である。頸部が外上方へ伸びるもの(57・58)と頸部が上方へ伸びた後、口縁部がやや内傾するもの(59~61)がある。口縁端部は面を持つ。57は外面をハケメ調整の後、ヘラミガキ調整する。58は外面と口縁端部内面をヘラミガキ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。59は外面下半に櫛描箋状文を施す。外面上半は刻み目を施した後、横方向にヘラミガキ調整する。その後、円形浮文を貼り付ける。内面をユビナデ調整する。60は外面に3帯の櫛描列点文と箋状文を施す。内面は6本/cmのハケメ調整する。61は6条の凹線文を施す。外面の一部に黒斑がある。III~IV様式。61は非河内産、他は牛駒西麓産。

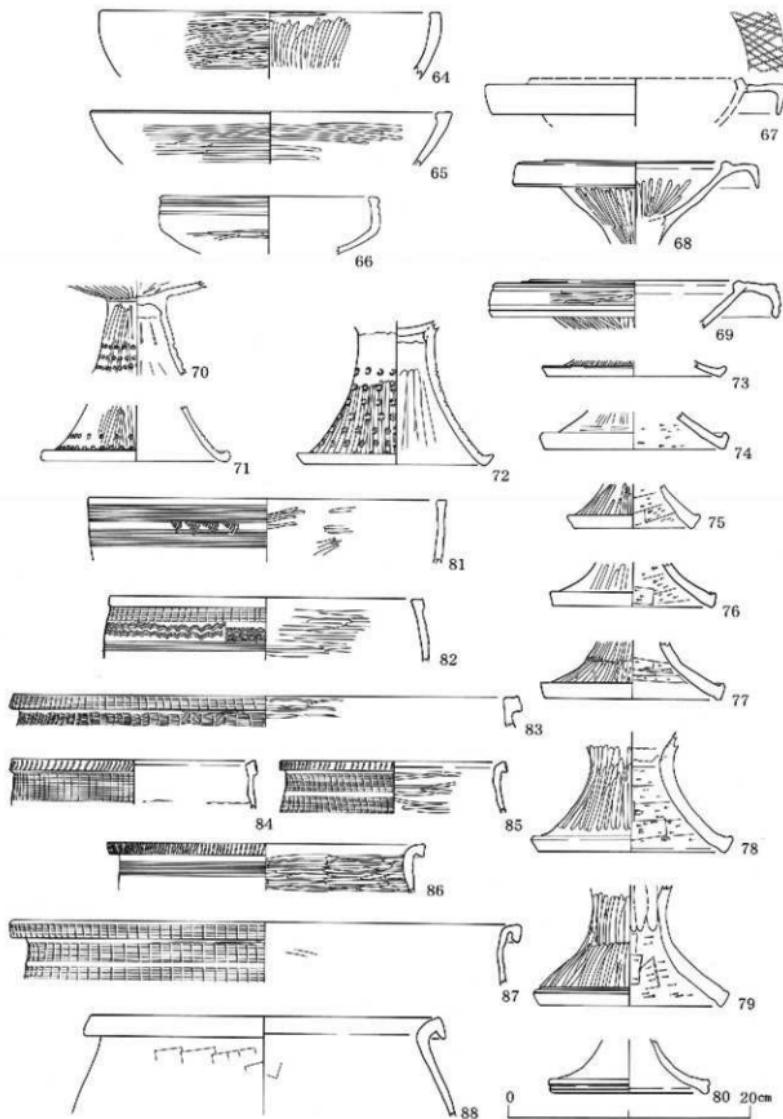
62は水差形土器である。体部は下方で張り、口縁部がやや外反する。口縁端部は丸く終わる。把手を頸部に貼り付ける。把手側の口縁部にはゆるいU字形の切り込みを入れる。体部外面に櫛描箋状文を4帯、口縁部外面に列点文を3帯施す。また、口縁端部に刻み目を施す。体部内外面をヘラミガキ調整、口頸部内面を板状工具によるナデ調整する。頸部と体部の境の内面に接合痕が残る。外面に煤が付着する。IV様式。牛駒西麓産。



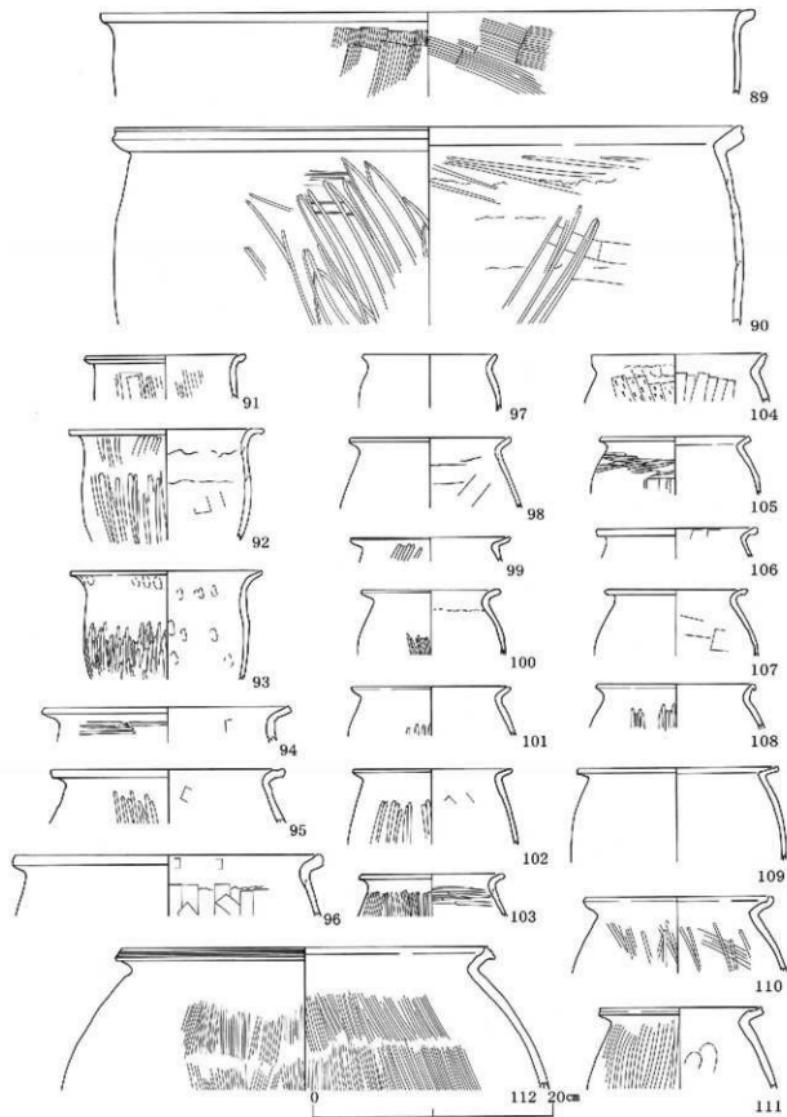
第11図 SD101出土土器実測図(1)



第12図 SD101出土土器実測図(2)



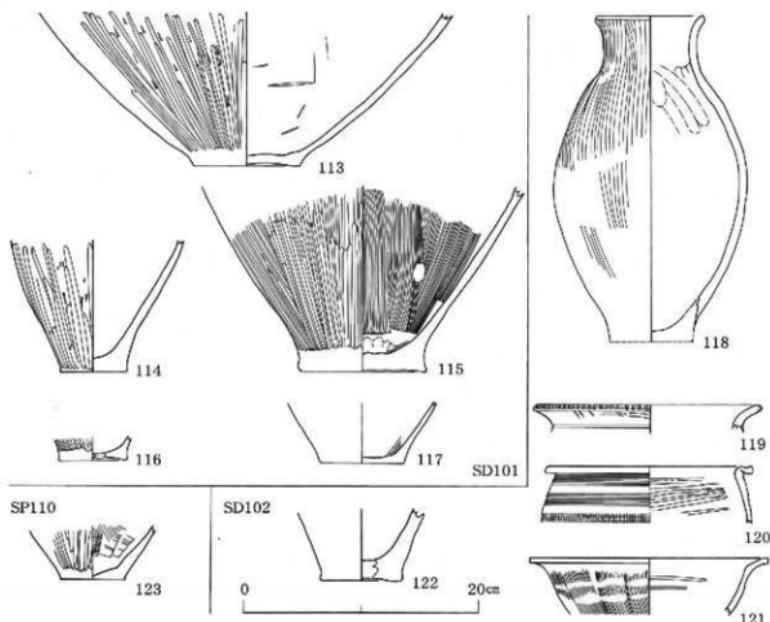
第13図 SD101出土土器実測図(3)



第14図 SD101出土土器実測図(4)

64~80は高杯である。64~69は杯部である。64は鉢の可能性もある。体部から口縁部にかけてわずかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部は水平方向へ面を持つもの（64・65）、中位でやや内傾気味に立ち上がるるもの（66）、口縁部が水平方向へ伸びた後、長く垂下するもの（67~69）がある。65は口縁端部が内側へやや肥厚する。66は外面上半に3条の凹線文を施す。67~69は内面に1条の凸帶を廻らし、断面がコの字形を呈する。69は口縁水平部上面に斜格子の暗文を施す。69は口縁部外面に2条の凹線文を施す。内外面をヘラミガキ調整するものが多い。64は外面をヘラケズリ調整した後、ヘラミガキ調整する。66は内面が風化により調整は不明である。70は裾部、口縁部を欠損する。柱状部がゆるやかに立ち上がり、中空である。外面をヘラミガキ調整し、竹管文を施す。脚部内面を板状工具によるナデ調整する。内面上半にしづり痕がみられる。71~80は脚部である。裾部がゆるやかに立ち上がり、柱状部が中空である。裾端部が上方へ拡張するもの（71~77）と面を持つもの（78~80）がある。71・72は外面に竹管文を施す。79は裾端部近く、80は裾端部に1条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整する。71~73・80は内面をナデ調整またはユビナデ調整する。74~79はヘラケズリ調整する。77・79はその後、ヘラミガキ調整する。79は内面上半にしづり痕がみられる。80は外面が風化により調整は不明である。75・78は裾端部内面にリング状の煤が付着することから費蓋に転用されたと考えられる。Ⅲ~Ⅳ様式。68・72・73は非河内産、他は生駒西麓産。

81~88は鉢である。81は口縁部が上方へ立ち上がり、口縁端部が水平方向へ面を持つ。外面に横描直線文を2帯と扇形文を施す。内外面をヘラミガキ調整する。82~88は口縁部が内傾する。口縁端



第15図 SD101・SD102・SP110出土土器実測図

部に段を持つもの（82～84）と口縁部が大きく外反し、口縁端部が下方へ拡張するもの（85～88）がある。82は体部に櫛描簾状文・波状文・直線文を施す。83・87は体部外面と口縁端部に櫛描簾状文を施す。84・85は体部外面に櫛描簾状文、86は直線文を施す。84～86は口縁端部に刻み目を施す。82・83・85・86は内面をヘラミガキ調整する。84は内面が風化により調整は不明である。87は内面、88は内外面を板状工具によるナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。83は非河内産、他は生駒西麓産。

89～112は壺である。口縁部は大きく外反する。体部の張りが少ないもの（89～94）と体部の張りが大きいもの（95～112）がある。89・91～93・98～104・106～108は口縁端部が丸く終わる。90・94～97・105・111は口縁端部が面を持つ。90は口縁部が大きく外折する。109～110・112は口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。93は内外面に指頭圧痕が残る。112は口縁端部に3条の凹線文を施す。体部外面はハケメ調整（89・111・112）やヘラミガキ調整（90～95・99～103・105・108）するものが多い。体部内面は板状工具によるナデ調整するものが多いが、ハケメ調整（91・112）やヘラミガキ調整（103）するものもある。104は体部外面をヘラケズリ調整、頸部外面をユビナデ調整する。110は内外面をハケメ調整の後、ヘラミガキ調整する。90・92・96・98・100は内面に接合痕が残る。外面に煤が付着しているものが多い。89・91～94はⅡ様式、他はⅢ～Ⅳ様式。111は非河内産、他は生駒西麓産。

113～117は壺もしくは甕の底部である。底部は平底である。体部が大きく張るもの（113）と体部の張りが少ないもの（114～117）がある。底部外面はナデ調整する。体部外面をヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整する。113・114は内面を板状工具によるナデ調整する。115は内面を8本/cmのハケメ調整する。底部内面に指頭圧痕が残る。116は内面をナデ調整する。底部に穿孔が1ヶ所確認できる。117は内面の一部をハケメ調整しているが風化により大部分の調整は不明である。113の内面に炭化物、115の外面に煤が付着する。Ⅲ～Ⅳ様式。113は非河内産、他は生駒西麓産。

S D 102 (第15図118～122)

壺・甕・鉢・底部がある。

118は壺である。118は体部の張りが少なく、細長い。口縁部はやや外反し、口縁端部は面を持つ。外面の風化が激しい。外面は4本/cmのハケメ調整、内面をユビナデ調整する。体部中央に黒斑がある。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

119は甕の口縁部である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁端部に刻み目、頸部外面に1条のヘラ描沈線文を施す。口縁部外面を板状工具によるナデ調整する。Ⅰ様式。生駒西麓産。

120・121は鉢である。120は体部が内湾しながら内傾し、口縁部は大きく外折する。口縁端部は上方に肥厚し、尖り気味に終わる。体部外面に櫛描直線文と簾状文を施す。内面はヘラミガキ調整する。121は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面を8本/cmのハケメ調整する。内面はナデ調整の後、ヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

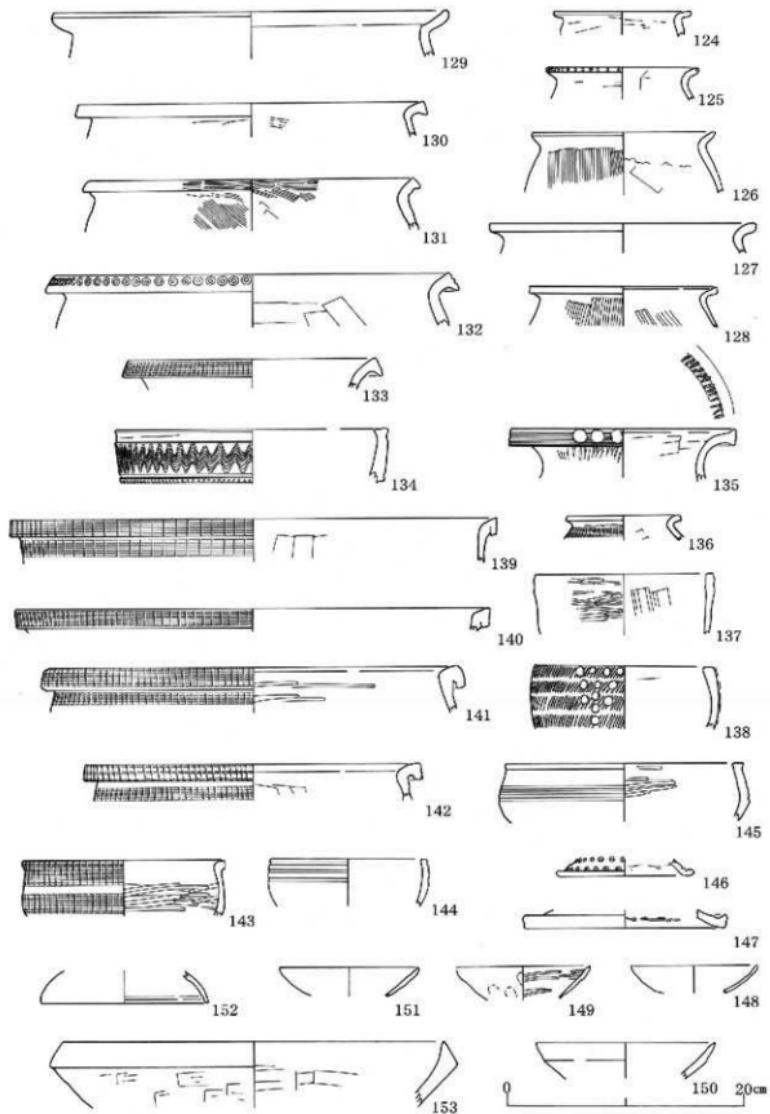
122は壺もしくは甕の底部である。底部は平底である。器壁が厚い。底部からやや外反しながら外上方へ伸びる。外面は風化により調整は不明である。内面は板状工具によるナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

S P 110 (第15図123)

123は壺もしくは甕の底部である。底部は平底である。底部からやや外反しながら外上方へ伸びる。底部外面と内面は板状工具によるナデ調整、体部外面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

遺物包含層出土土器

第4層 (第16図124～147)



第16図 遺物包含層・遺構内出土土器実測図

甕・壺・無頸甕・細頸甕・鉢・高杯がある。

124～132は甕の口縁部である。口縁部は大きく外反する。内面を板状工具によるナデ調整する。124・125は体部の張りが少なく、126～132は体部の張りが大きい。口縁端部が丸く終わるもの（124～126・129）と面を持つもの（127・128・130～132）がある。128は口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。130～132は口縁端部が下方へ拡張する。125は口縁端部に刻み目、132は竹管文を施す。124・125・130は体部外面に板状工具の痕がみられる。126・128・131は体部外面に5～6本/cmのハケメ調整する。131は口縁部内外面もハケメ調整する。126・128は外面と口縁端部に煤が付着する。Ⅲ～IV様式。132は非河内産、他は生駒西麓産。

133～135は壺の口縁部である。133は口頸部が外反気味に立ち上がる。口縁端部は面を持ち、下方へ拡張する。口縁端部に櫛描簾状文を施す。134は口縁端部を上方へ大きく拡張し、幅広の面を持つ。櫛描波状文と1条の凹線文、下方に刻み目を施す。135は口頸部が大きく外反し、口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。口縁端部に3条の凹線文を施し、円形浮文を貼り付ける。口縁部内面に櫛描列点文を施す。口縁部外面をハケメ調整の後、ナデ調整する。内面は板状工具によるナデ調整する。Ⅲ～IV様式。134は非河内産、他は生駒西麓産。

136は無頸壺の口縁部である。口縁部が大きく外反する。口縁端部は面を持つ。外面に櫛描簾状文を施す。体部内面は板状工具によるナデ調整する。2ヶ1対の紐穴があると考えられる。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

137・138は細頸甕である。口縁部が上方へ伸びるもの（137）と口縁部がやや内傾するもの（138）がある。口縁端部は面を持つ。内面を板状工具によるナデ調整する。137は外面をヘラミガキ調整する。138は外面に刻み目を施し、円形浮文を貼り付ける。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

139～144は鉢である。口縁端部に段を持つもの（139・140・143）、口縁端部が大きく外反し、下方へ拡張するもの（141・142）、内湾しながら立ち上がり、口縁端部が水平方向へ面を持つもの（144）がある。139～143は口縁端部と体部外面に櫛描簾状文を施す。体部内面を板状工具によるナデ調整するもの（139・142）とヘラミガキ調整するもの（141・143）がある。142は口縁端部下方に刻み目を施す。144は口縁部に3条の凹線文を施す。Ⅲ～IV様式。144は非河内産、他は生駒西麓産。

145～147は高杯である。145は杯部である。口縁部が内湾しながら立ち上がる。口縁端部はやや肥厚し、水平方向へ面を持つ。外面に3条の凹線文を施す。内面はヘラミガキ調整する。146・147は脚部である。146は裾端部が水平方向へ伸び、丸く終わる。外面に竹管文を施し、内面を板状工具によるナデ調整する。裾端部内面にリング状の煤が付着していることから甕蓋に転用されたと考えられる。147は裾端部を上方へ拡張する。内面を10木/cmのハケメ調整する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

③ 古墳時代以降の土器

古墳時代～中世期の土器がある。須恵器、上師器、瓦器などが出土した。

遺構出土土器

S D 13（第16図148）

148は瓦器の椀である。器高が低く、口径は小さい。底部から口縁部にかけてやや内湾しながら外へ開き気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる、いわゆる和泉型である。（以下省略）口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整する。体部内面は風化により調整が不明である。いぶしは悪い。14世紀代。

遺物包含層川土土器

第4層（第16図149～153）

瓦器、上師器、須恵器がある。

149・150・153は瓦器である。椀・摺鉢がある。149・150は椀である。器高は低い。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる。149は口径が小さく、体部外面には指頭圧痕が残る。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。内面は粗いヘラミガキ調整する。150は口縁部外面をヨコナデ調整、他は風化により調整が不明である。いぶしは悪い。13~14世紀代。153は摺鉢である。口縁部である。口縁端部は上方にやや拡張し、面を持つ。口縁端部外面はヨコナデ調整する。口縁部外面はヘラケズリ調整する。内面に14本/1.5cmの摺目がみられる。15世紀代。

151は土師器の中皿である。口径11.6cmを測る。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。15世紀代。

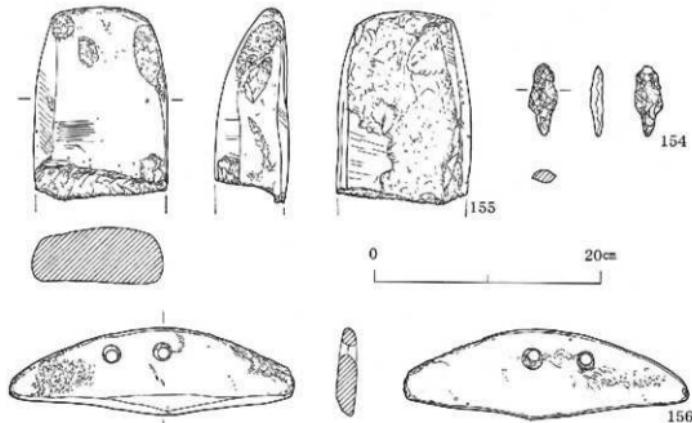
152は須恵器である。蓋杯である。口縁部はなだらかに内湾し、口縁端部が丸く終わる。口縁端部内面に1条の沈線を廻らす。内外面を回転ナデ調整する。古墳時代後期。

(2) 石器 (第17図154~156)

打製石器と磨製石器がある。

打製石器には石鏃がある。154は茎を有する石鏃である。細部を押圧剥離で整える。断面は丸みを帯びた菱形を呈する。最大長3.1cm、最大幅1.2cm、最大厚0.6cm、重さ2.1gである。SD19より出土した。

磨製石器には扁平片刃石斧・石庖丁がある。155は扁平片刃石斧である。裏面は剥離している。刃部を欠損し、基部が残る。全体を研磨する。形状は長方形を呈する。最大長8.4cm、最大幅5.9cm、最大厚3.2cm、重さ224.8gである。156は石庖丁である。背は半月形で反対側に刃を施す。刃部は直線的な片刃で終わる。背に2孔の紐穴を穿つ。最大長3.9cm、最大幅12.5cm、最大厚0.9cm、重さ58.7gである。155・156はSD101より出土した。



第17図 石器実測図

7)まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後半の大溝2条と土坑墓1基、土坑、溝、ピットなどを検出したほか、繩文時代後期中葉から室町時代までの遺物が出土するなど、大きな成果を得た。ここでは、箇条書きで成果をまとめておきたい。

(1) 繩文時代後期～晩期の西ノ辻・鬼虎川遺跡

今回の調査で、わずか3片ながら後期中葉の磨消繩文が施された土器が出土した。詳細な時期決定は躊躇されるが、土器の形態から後期後半に下る要素は見出しがたく、後期前半までに押さえられる資料である。前記した西ノ辻遺跡第42次調査^{*}では、後期後半の滋賀里IV式土器に混じって、中期末から後期初頭にかけての土器が出土している。調査地周辺では、弥生時代造構面と地山面のレベルが近接しているため、繩文時代後期から晩期に属する造構の検出はかなり困難であろうが、西ノ辻遺跡第42次調査では、無遺物ながら造構面の関係で繩文時代以前と推定される谷筋が検出されており、谷などの造構の埋積過程で一括遺物が見られる可能性がある。

(2) SD101とその出土土器

造構面Ⅱの造構は弥生時代中期に属する。ここでは質量ともに豊富なSD101を素材に所属時期を絞ってみたい。SD101の断面形はU字状を呈し、ほぼB地区のトレンチ形状と併走している。現地では、上層・中層・下層の3段階で遺物の取り上げを行なったが、前記のように上層と下層の出土土器片が接合できることから、溝の機能時と廃絶時は近接した時系列であることが知られた。出土土器は、溝底面から少し上位、すなわち中層で多く認められた。胴部中位の最大径附近と底部に穿孔をもつ無文の広口壺(第11図34)は、横位で溝の流向と併行して出土した。口縁部外面に凹線文は認められず、胴部最大径は器形の中位にあり、肩部もなだらかなプロボーションをなしている。口縁部外側から胴部上半まではハケメ、下半をヘラミガキ調整する。これらの特徴から34はⅢ様式の範囲で捉えられる。いっぽう、水平口縁を持ち、口縁端部が垂下するIV様式高杯は、垂下が直線的な67(第13図)から、ややシャープさに欠ける69まで見られる。台付鉢の脚台は円錐形を呈し、多数の円孔が穿たれている(70ほか)。これらの高杯、台付鉢は河内IV-2~3様式^{**}に位置づけられよう。また広口壺の簾状文の施文原体は幅広のものが優勢である。これらのことから、少數のⅡ様式壺を混入品として除外すると、出土土器の主体はIV様式、とくにその後半期資料で占めることが窺われる。したがって、SD101の埋没時期の1点は中期後半後葉に捉えることができる。

(3) 上坑墓SK201

上坑墓SK201は、SD102の底面で検出したものである。SD102自体が出土遺物が僅少で、所属時期は明確にしがたいが、出土した鉢(120)の口縁部形態はIV様式に位置づけられる。このため、その下面のSK201はそれ以前の所産と考えられる。具体的には中期中葉を測らない時期に推定できよう。上坑墓内の人身は付論の安部・高志氏の鑑定結果によれば、30歳以上の男性に推定されている。また埋葬姿勢は少しく変則的で伏臥屈位を採る。また屈位といつても下肢は緩く屈曲しており、土坑の長軸が1.8mを測ることから、むしろ伸展位に近い。伏臥位の埋葬姿勢については、今後の資料の増加を俟つて考えてみたい。

(4) 弥生時代造構面の広がりと西ノ辻・鬼虎川遺跡の境界

(2)で検証したように、今回の弥生時代の造構の大半は中期後半に属すると思われる。これらの造構はトレンチ設定のA地区・B地区で濃密に分布し、C地区・D地区は稀薄である。とくにD地区では自然流路以外造構は認められない。これらの造構分布から、弥生時代の造構面は調査地の南東側に中心を持ち、北西に行くに従い漸移的に減ずる。周辺の調査に期待するが、この造構の空白ないし稀薄な箇所の延長線は、繩文時代海蝕崖のラインにはほぼ相当する。西ノ辻遺跡と鬼虎川遺跡の考古学上の境界線がこのラインに求められるのではないだろうか。試案として提出したい。

* 東大阪市教育委員会『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』、2001年。

** 弥生土器の様式と時期観は、寺沢薰・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』〔近畿編1〕、木耳社、1989年。に準拠。

付論 鬼虎川遺跡第59次調査出土の人骨・動物遺体について

I 鬼虎川遺跡59次調査の人骨について

高志 こころ
安部 みき子

鬼虎川遺跡の弥生時代の土坑SK201から出土した人骨の保存状態は比較的良好で、埋葬状態は頭位を東に、頭部は後頭部を上に顎面を下に向かた伏臥位であった。上肢は右肘関節が屈曲しており、左上腕骨と左尺骨が肋骨の下から出土していることから左腕は腹部の下に向けてゆるやかに屈曲していたと考えられる。下肢は大腿骨と脛骨の位置から軽く屈曲していたものが土圧で移動したともわれる。

出土状況

SK201号人骨は顎面頭蓋の破損が大きく復元できなかった。また、肋骨、環椎と軸椎以外の椎骨、指骨の同定も困難であった。

頭蓋骨：上頸骨、頸骨、側頭骨、前頭骨、頂頭骨、後頭骨が遺存しており、後頭骨にはインカ骨がみられた(図版22)。上顎骨は左の大臼歯周辺が遺存している。側頭骨は左右の錐体と頬骨弓、左の乳様突起が破損しており、後頭骨は後頭頸を含む人後頭孔の前半部が破損している。下顎骨は、左側の第1切歯から第3大臼歯前半分の下顎体と後臼三角、および筋突起が遺存し、第1大臼歯が釘植し、第2または第3大臼歯が遊離している。右側は第1切歯から第2大臼歯部の下顎体が遺存し、第1小臼歯、第2小臼歯と第3大臼歯が釘植している。オトガイ棘が発達しており、第1切歯は左右ともに歯槽閉鎖している。

上肢：左右の肩甲骨、上腕骨、尺骨、橈骨、右の鎖骨、左の第2基節骨が出土しているが、長骨はいずれも骨端が破損している(図版21)。また、肋骨と指骨が遺存しているが部位の同定はできなかった。鎖骨は右の円錐靭帯結節周辺と胸骨端が遺存している。左の肩甲骨は肩甲頭周辺の外側縁と肩峰が遺存しており、右の肩甲骨は肩峰の基部のみ遺存している。上腕骨は左右ともに小結節稜から骨幹の遠位部までが遺存し、三角筋粗面の発達は悪い。橈骨は左右ともに橈骨粗面から骨幹の遠位部までが、尺骨は左右とも尺骨粗面から骨幹の遠位部までが遺存している。

下肢：左右の大腿骨、脛骨、腓骨と、基節骨が遺存している(図版21)。左大腿骨は大腿骨頭、大転子、小転子、遠位端が破損し、右大腿骨は筋筋粗面から骨幹約29cmが遺存している。恥骨筋粗線は発達していない。左脛骨は栄養孔周辺の骨幹約25cmが遺存しており、右脛骨は骨幹のみ約

表1 四肢骨の計測値

		計測部位	左	右
上 肢 骨	5	骨体中央最大幅	20.35	20.75
	6	骨体中央最小径	17.51	17.72
	7	骨体中央周	60.40	60.70
	7a	骨体横径	17.52	17.65
	小数	骨体横径示数	86	85
	4	骨体横径	12.15	14.45
	4a	骨体矢状径	14.58	-
	11	骨体横径	12.29	12.77
	12	骨体矢状径	16.58	16.57
	示数	骨体横径示数	74	77
大 腿 骨	6	中央矢状徑	27.04	27.24
	7	中央横径	28.72	28.93
	8	中央周	89.00	90.00
	9	上部横径	33.70	-
	10	上部矢状径	27.68	-
	示数	骨体中央断面示数(柱状示数)	94	94
		骨体上部断面示数(扁平示数)	82	-
	8	中央最大幅	34.36	33.45
	9	中央横径	19.94	18.76
	10	中央周	87.00	86.00
胫 骨	8a	栄養孔位最大幅	34.88	-
	9a	栄養孔位横径	20.88	-
	10a	栄養孔位周	94.00	-
	示数	中央横断面示数	58	56
		脛(扁平)示数	60	-
	2	中央最大径	16.36	16.10
	3	中央最小径	11.46	11.18
	4	中央周	53.00	50.00
	示数	中央断面示数	79	69

単位はmm

21cm遺存している。左右の腓骨と基節骨は骨幹が遺存しているのみである。

性および年齢の推定

性の判定は頭骨の外後頭隆起と乳突起の発達の程度でおこない、男性と判定された。

年齢の推測は歯の咬耗度を用い、30才以上と推測された。

骨計測の結果

骨計測が可能な四肢骨について計測をおこない、示数を算出した（表1）。大腿骨の骨体中央断面示数（柱状示数）は左右ともに94、骨体上断面示数（扁平示数）は82で、扁平大腿骨の範囲内である。脛骨の中央横断示数は左が58、右が56で、脛（扁平）示数は60と扁平脛骨であった。

まとめ

- 埋葬状況は頭位が東向きで、伏臥位であった。
- 性は外後頭隆起と乳様突起の発達がよいことから男性、年齢は大臼歯の咬耗状態から30歳以上と推測された。
- 後頭骨にインカ骨がみられた。
- 長骨の筋の付着部は比較的発達が悪かった。
- いずれの長骨も骨端が遺存していないため身長を推定することはできなかった。
- 骨計測ができた大腿骨は、骨体中央は円形に近いが近位部は扁平である。
- 脛骨は、扁平脛骨であった。

参考文献

- martin,r.& saller,k. (1928) lehrbuch der anthropologie,band I, 429-518,fischer,jena
- 馬場悠男(1991) 人体計測法II 173-336 同成社

II 鬼虎川遺跡第59次調査の動物遺体について

高志 こころ
安部 みき子

鬼虎川遺跡の弥生時代の遺構から出土した動物遺存体は22片で、種の同定ができたものはイノシシの橈骨とシカの距骨の2点のみであった（表1）。

表1 動物遺存体の出土表

地区と層位	資料番号	出土部位		詳細	備考
		左右	部位名		
SD101下層	B-1-1	シカorイノシシ	一	胸椎	椎体のみ遺存、椎体板未癒合
SD101下層	B-1-2	哺乳類	左	腰骨	骨幹近位部のみ遺存
SD101下層	B-1-3	哺乳類		長骨片	
SD101下層	B-1-4	不明		骨片	
SD101下層	B-3	不明		骨片	
SD101下層	D-3 (鰐歯) 1	大型哺乳類	不明	肋骨	4
SD101下層	B-3 (鰐歯) 2	シカ	左	距骨	距骨頭と距骨滑車の下面が被覆している
SD101下層	B-3 (鰐歯) 3	イノシシ	右	橈骨	遠位端未癒合、骨幹遠位部のみ遺存
SD101下層	B-3 (鰐歯) 4	不明		骨片	5
SD101下層	B-2-1	大型哺乳類	不明	肋骨	2
SD101下層	B-2-2	小鳥		長骨片	3
△区-1SD102		不明		骨片	

図版1
鬼虎川遺跡第59次調査

遺構



調査前の状況
(北より)



A地区遺構面I
(北より)



B地区遺構面I
(南より)

図版2
鬼虎川遺跡第59次調査

遺構



C地区遺構面I
(南より)



D地区遺構面I
(南より)



SD39・44・103西壁断面

図版3 鬼虎川遺跡第59次調査 遺構



A地区遺構面ⅡSD101
検出状況（南より）



A地区遺構面ⅡSD101
上層掘削後状況（南より）



A地区遺構面ⅡSD101
中層掘削後状況（南より）



A地区遺構面ⅡSD101
掘削後状況（南より）

図版 4

鬼虎川遺跡第59次調査

遺構



SD101アゼ断面（南より）



SD101内石包丁出土状況



SD101内土器出土状況

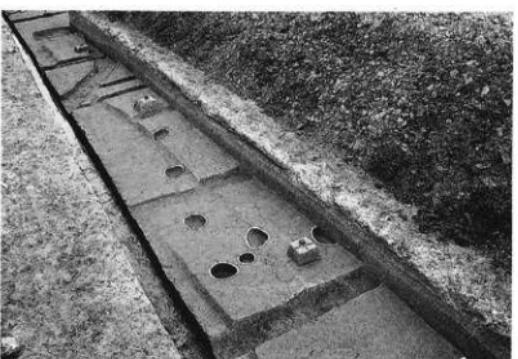
図版 5
鬼虎川遺跡第59次調査
遺構



SD101内土器出土状況

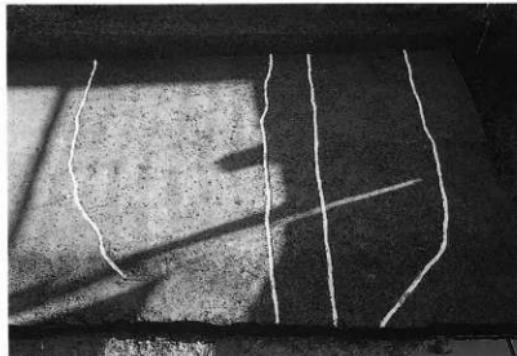


B地区遺構面II遺構検出状況
(南より)

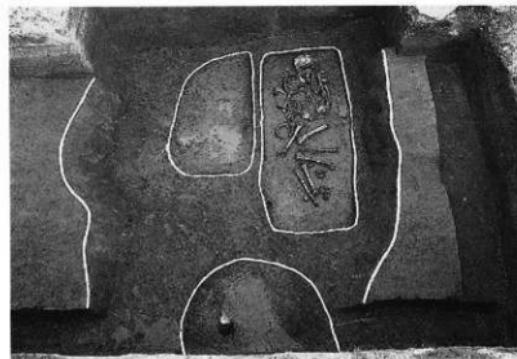


B地区遺構面II掘削後状況
(南より)

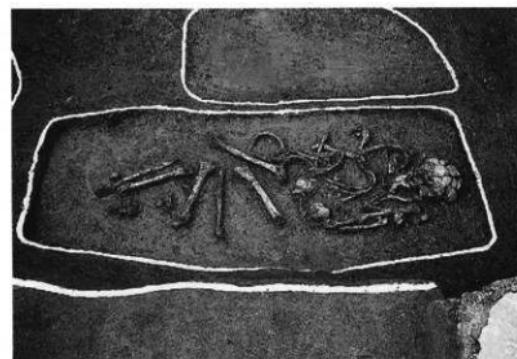
図版 6
鬼虎川遺跡第59次調査
遺構



B地区遺構面 II SD102検出状況
(西より)



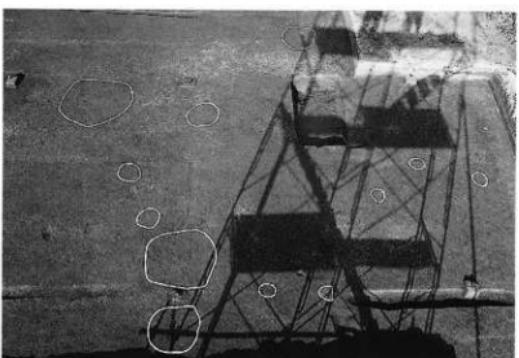
B地区遺構面 II SD102掘削後状況
(西より)



SK201内出土人骨
(南より)



SD102・SK204西壁断面



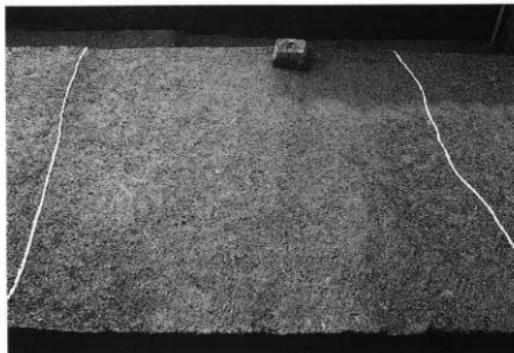
C地区遺構面II遺構検出状況
(南より)



C地区遺構面II掘削後状況
(南より)

図版 8
鬼虎川遺跡第59次調査

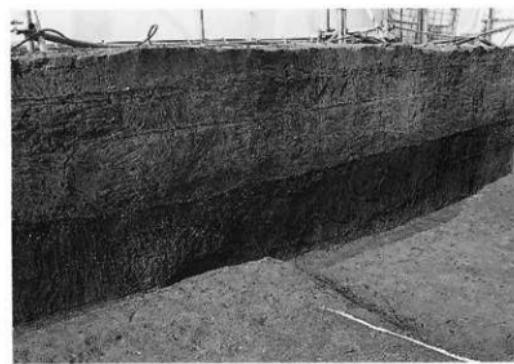
遺構



D地区遺構面ⅡSR100検出状況
(東より)



D地区遺構面ⅡSR100掘削後状況
(東より)



SR100西壁断面



34



28



32



56



63



55



78

SD101出土
弥生土器壺・無頸壺・高杯



115



114



113



121



79



72



118

SD101出土弥生土器高杯・底部 SD102出土弥生土器壺・鉢



62



62'

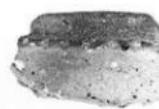
SD101出土
赤生土器水差形土器



1



2



7



3



4



6

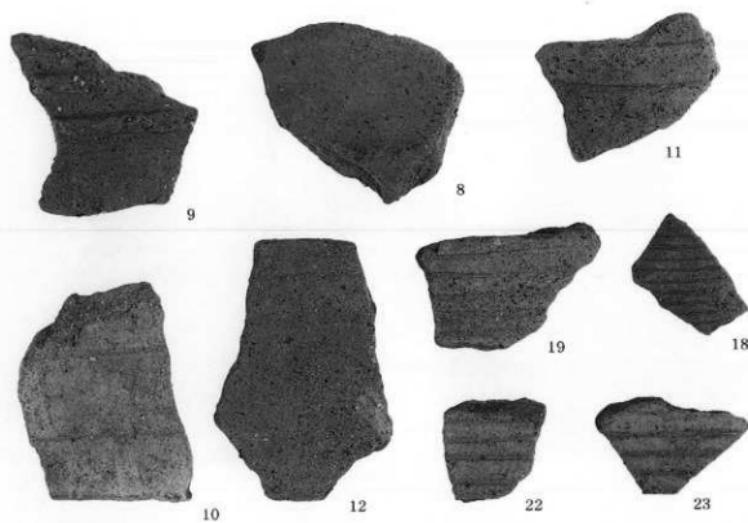


5

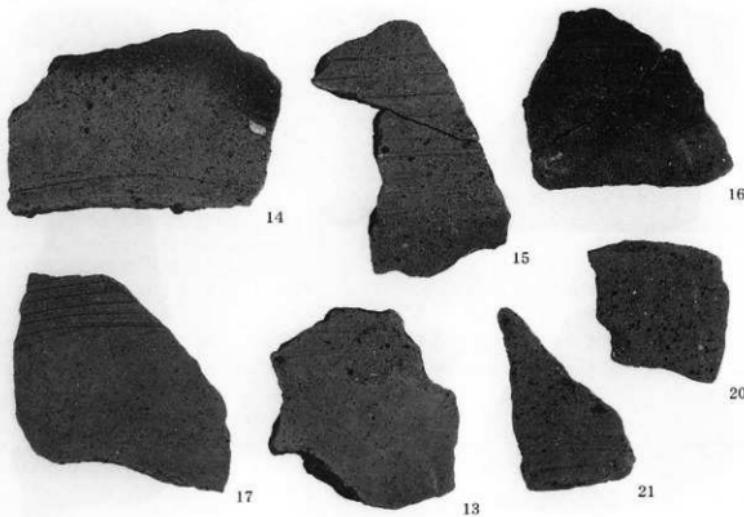
縄文土器

図版 12

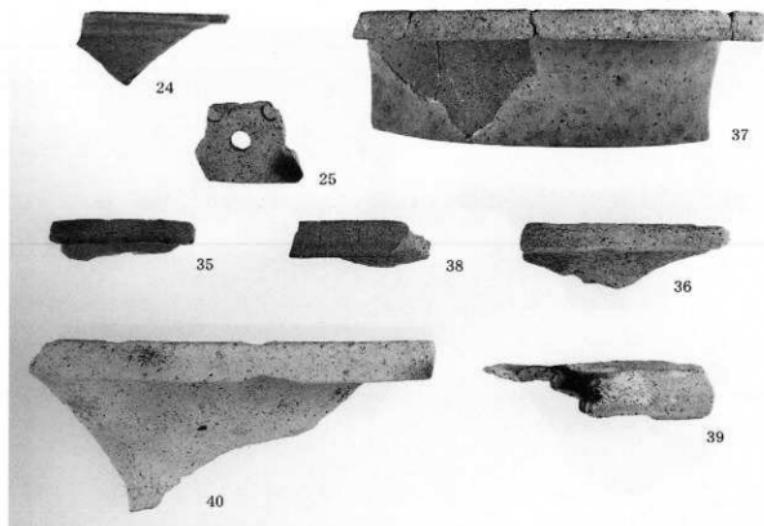
鬼虎川遺跡第59次調査
遺物



I様式の弥生土器



I様式の弥生土器

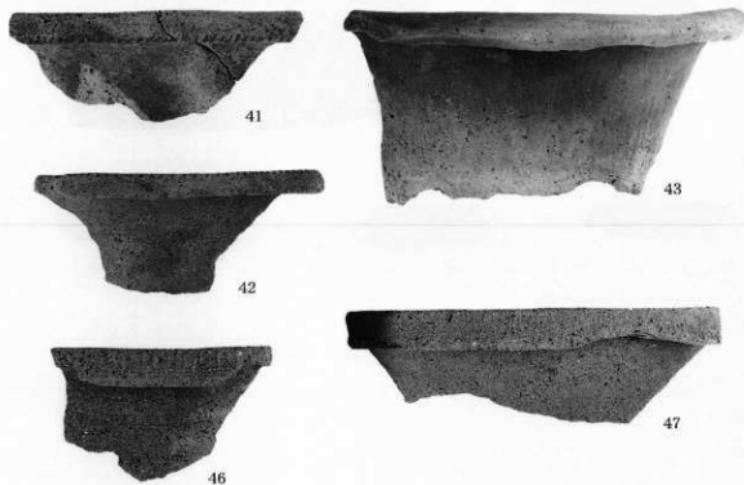


SD1出土弥生土器甕 SD26出土弥生土器脚部 SD101出土弥生土器壺

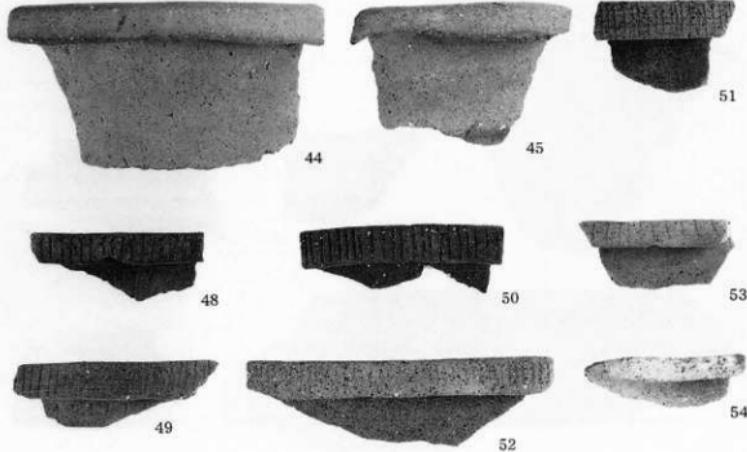


SD101出土弥生土器壺

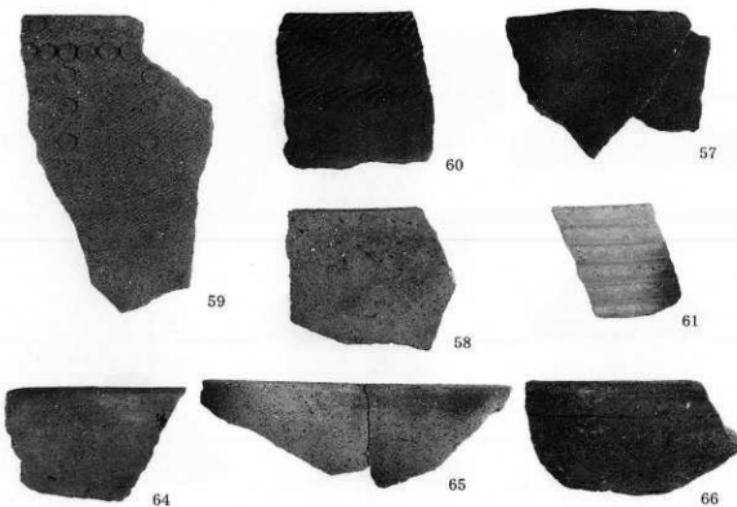
圖版 14
鬼虎川遺跡第59次調查
遺物



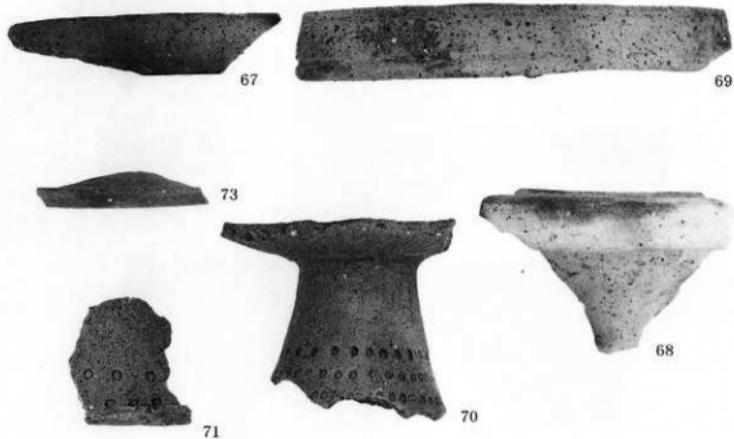
SD101出土弥生土器壺



SD101出土弥生土器壺



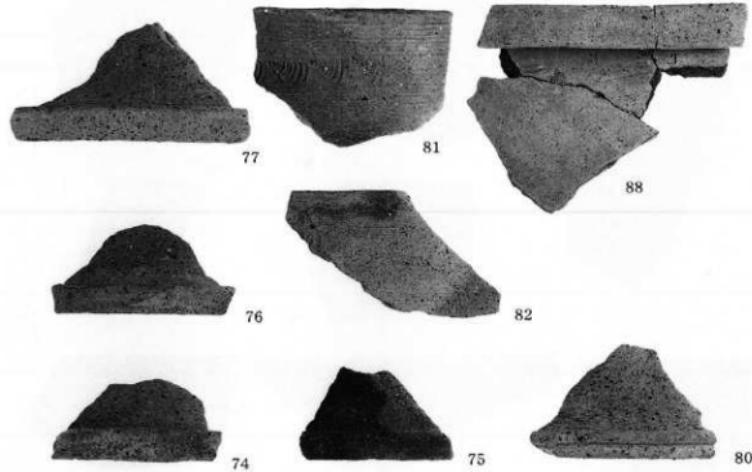
SD101出土弥生土器細頸壺・高杯



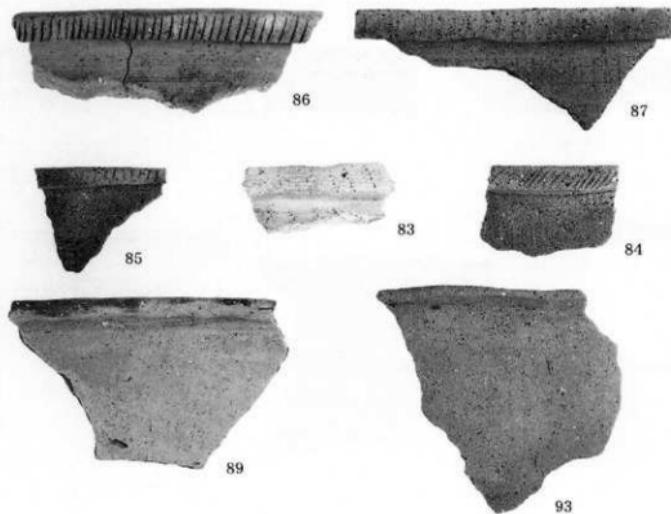
SD101出土弥生土器高杯

圖版
16

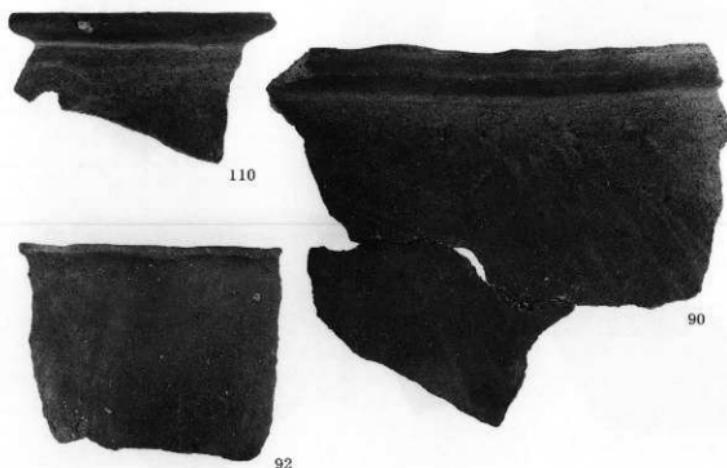
鬼虎川遺跡第59次調查
遺物



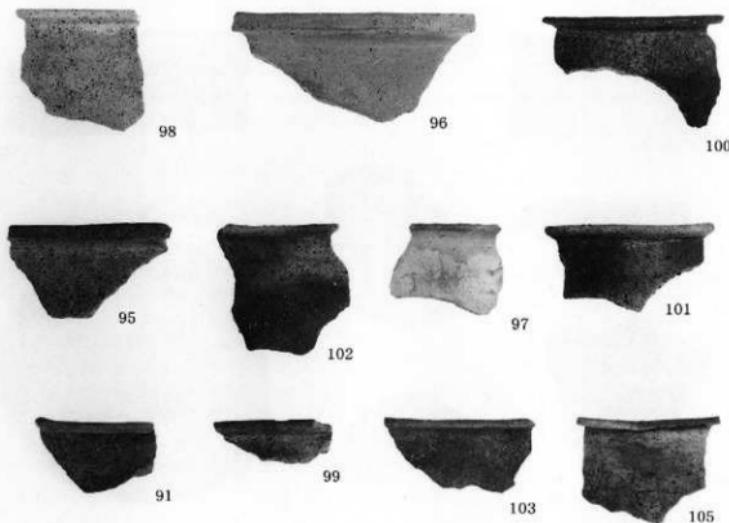
SD101出土弥生土器高杯・鉢



SD101出土弥生土器鉢・甕



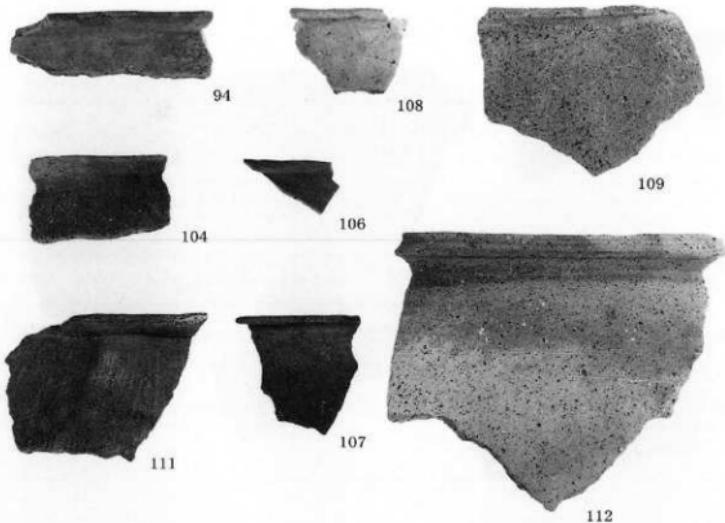
SD101出土弥生土器裏



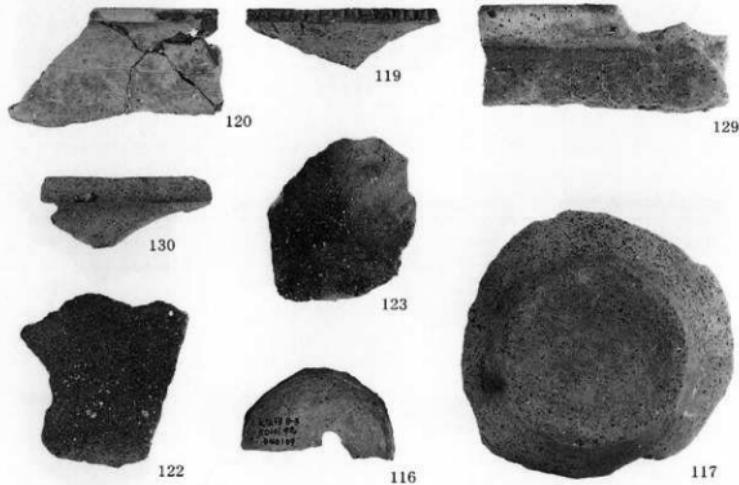
SD101出土弥生土器裏

圖版 18

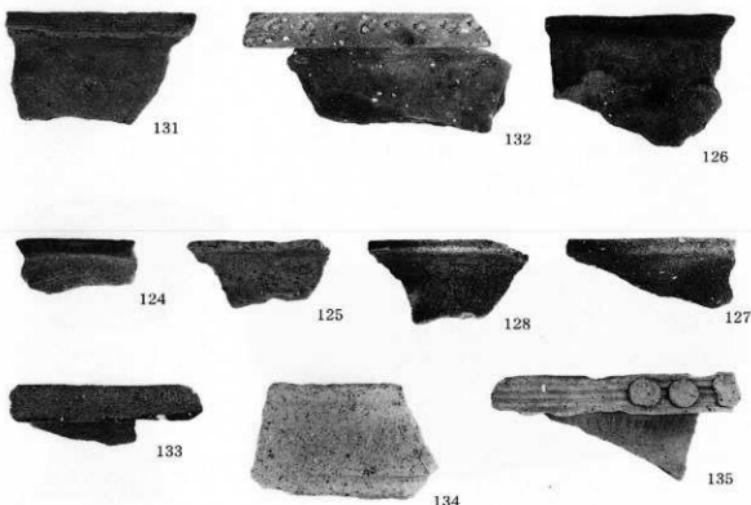
鬼虎川遺跡第59次調查
遺物



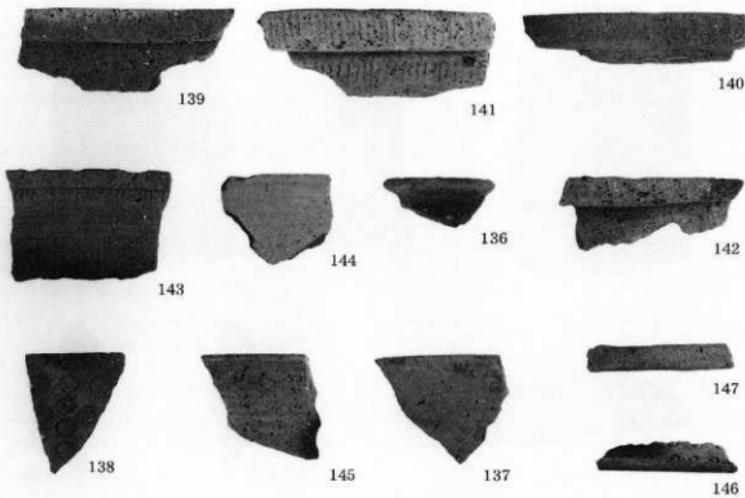
SD101出土弥生土器裏



SD101出土弥生土器底部 SD102出土弥生土器裏・鉢・底部 SP110出土弥生土器底部
第4層出土弥生土器裏



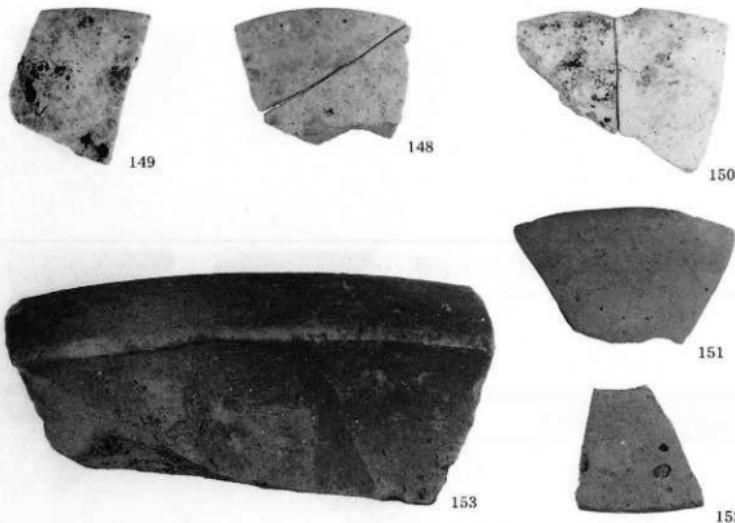
第4層出土弥生土器壺・蓋



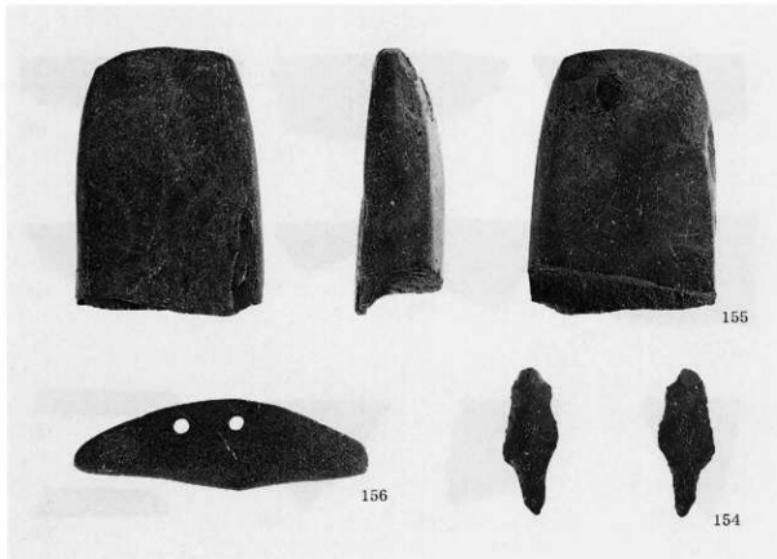
第4層出土弥生土器無頸壺・細頸壺・鉢・高杯

圖版
20

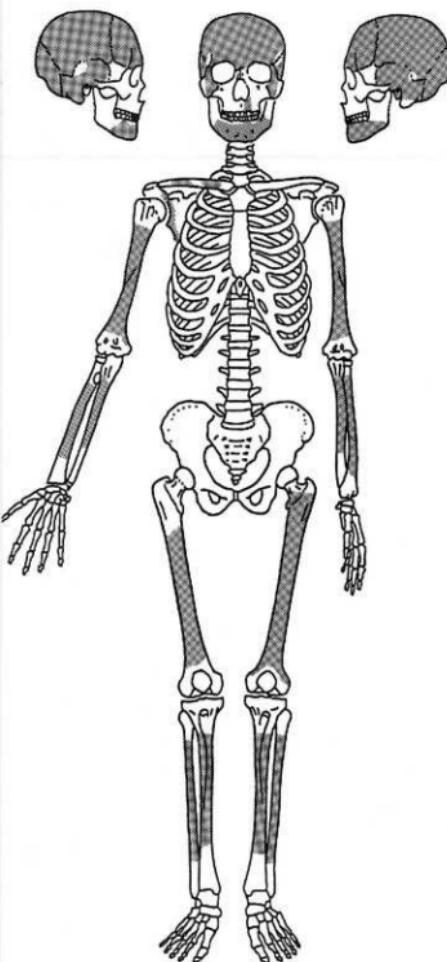
鬼虎川遺跡第59次調查
遺物



SD13出土瓦器椀 第4層出土瓦器椀、摺鉢、土師器中皿、須恵器蓋杯



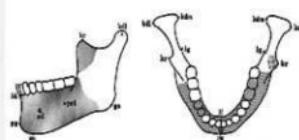
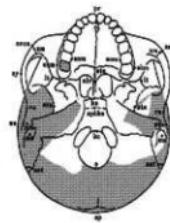
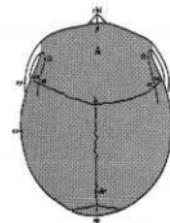
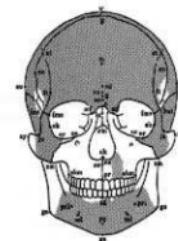
石器



SK201内出土人骨

圖版 22

鬼虎川遺跡第59次調查
遺物



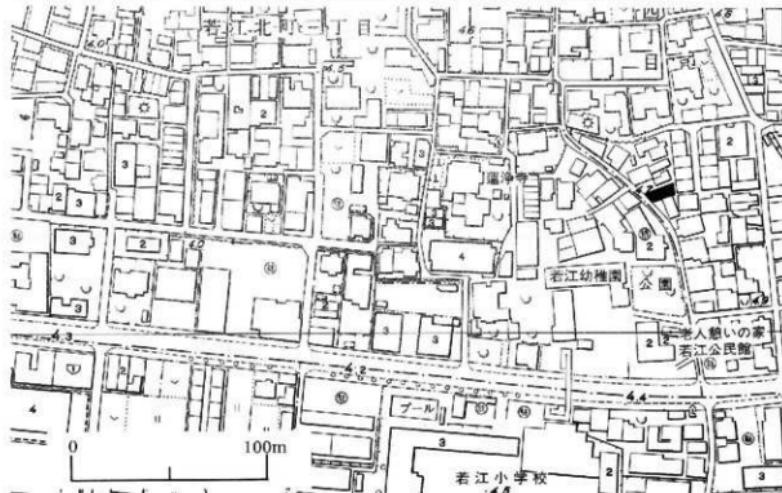
SK201内出土人骨頭部

第3章 若江遺跡第81次発掘調査

1) はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江本町・若江北町・若江南町一帯に広がる弥生時代から中世末期にいたる複合遺跡である。昭和9年(1934)旧楠根川改修工事の際に、弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が採集され、遺跡の認識が始まった。現在東西約750m、南北約1000mの範囲に推定されている。昭和47年(1972)、市立若江小学校校舎増築工事に伴い第1次調査が開始されて以降、今回の調査で81次を数える。本遺跡が現今の中河川・楠根川ないしその前身河川が形成する自然堤防や微高地に立地し、先史以来改変・累重されてきた経緯から、東大阪市の中部域にあって、各時期の遺構面が現地表面から浅いレベルで検出されることになり、多くの調査例が蓄積してきた。

既往の調査成果のうち、中世期の若江遺跡を摘記してみたい。室町時代に若江城が築造される。これまでの研究により、若江城は第1期若江城・第2期若江城に区分されることが判明している。第1期若江城は、室町時代中期、畠山氏が河内国支配の拠点とした守護所が設置された城館である。第2期若江城は、三好長慶の養嗣子義繼によって築かれ、その後義繼を滅ぼした織田信長が石山本願寺攻めの中心地として使用された城郭である。織田信長が石山本願寺と和睦したのち、ほどなく若江城は廃絶したようで、城の建物・施設は破却された。さらに若江庄の存在も見逃しがたい。国史上には、醍醐寺領、石清水八幡宮領、興福寺領若江莊と見える。龍禪寺領は10世紀末から12世紀にかけて国役雜事賦課の免除申請を行なう。石清水八幡宮領は11世紀後半に若江北条に田地を有している。興福寺領は12世紀後半から維摩会料所としてしばしば現れ、とくに永正から大永の16世紀初頭には、興福寺権僧正経尋が莊園の回復を企て、河内守護代遊佐順盛・三条西実隆に依頼したことが知られる。三つの若江莊は郡内に領有した散在莊田を郡名で呼称したとされ、その範囲は推定であるが、遊佐氏は若江城に詰めることがあり、興福寺領若江莊は若江遺跡周辺に位置した可能性が考えられる。



第1図 調査位置図

平成15年12月、東大阪市若江本町4丁目536-8番地において、個人住宅建設の計画があり、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。基礎掘削深度がやや深く、建築予定地が若江城の主郭内部に位置することから、事前の確認調査が必要な旨通知した。調査は翌2月に行なった。調査の結果、0.2mの表土直下で2層にわたる戦国時代の遺物包含層と造構面2面を検出し、完形に復元可能な土師器皿が出土(第6図1~5)するなど、埋蔵文化財の遺存状態は頗る良好であった。発掘調査に向けての協議を行ない、平成16年2月12日から2月18日まで事前調査を実施した。

2) 調査の概要

建築工事の基礎掘削は地表面から0.9mの右掘りであり、北面・南面の家屋が近接していたため、掘削幅が1m未満の箇所については、遺物採集を中心とした調査、1m以上の箇所は造構面精査を目的とした調査を行なった。さらに排土置場を確保する必要があり、東から調査を進め、それぞれA地区、B地区と仮称の地区名を与え、調査の掘削と埋戻しを順次行なった。以下、地区ごとに見ていく。

① A地区

東端のトレンチである。重機を併用しながら調査を行なったが、近現代の搅乱が激しく、地表下0.9mまでの層準では、中世以前の造構・遺物は検出されなかった。層位は次のとおりである。

第1層 表土層。

第2層 10YR5/4にぶい黄褐色粘土混じり細粒砂。

第3層 5Y4/1灰褐色粘土混じりシルト。この下部にブロック土があり、3L層とした。

第3L層 5Y4/2灰オリーブ色粘土混じり粗粒砂。第3層に第5層がブロック状に混入する層。

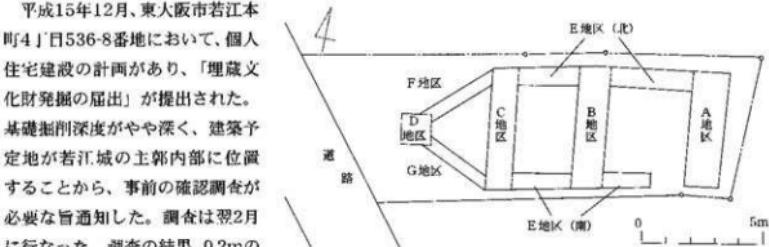
第5層 2.5Y6/4にぶい黄褐色粗粒砂。なお、調査着手の時点から第4層は中世期の遺物包含層と認識しており、その層がA地区では欠如することから、ここでは空番とした。また第5層は他の地区のそれと共に通する。

② B地区・C地区

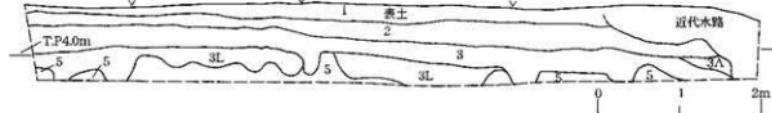
南北のトレンチで、造構面精査を行なった。2枚の造構面を確認した。まず層位は次ぎのとおりである。

第1層 旧耕土層。この上面に盛土・表土層が堆積する。

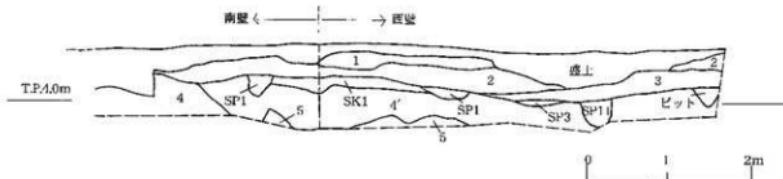
第2層 10YR5/4にぶい黄褐色粘土混じり細粒砂。



第2図 調査地トレンチ位置図



第3図 A地区西壁断面図



第4図 C地区南壁・西壁断面図

第3層 5Y4/1灰色粘土混じりシルト。上面は遺構面Ⅰをなす。中世期の遺物包含層である。

第4層 N4/灰色中粒砂混じり粘土に第5層が少量混入する層。上面は遺構面Ⅱを形成する。B地区では、この層を切り込んで同質の層が堆積していた。これを第4'層とした。

第4'層 第3層を主体に第5層がブロック状に混入する層。

第5層 2.5Y6/4にぶい黄褐色粗粒砂。A地区ほか他の地区と共通し、中世期遺構面の基盤となる層である。

遺構面Ⅰ(第5図)

SD1 B地区からC地区へ流下する溝。B地区東端で幅1.0m、C地区西端で幅0.78mを測る。深さは10cm。埋土は7.5Y4/1灰色中粒砂混じり粘質シルト。瓦器碗が出土した(第6図9)。

SK1 SD1に南接しその築造以前の土坑。全形は不明だが、輪郭が直線状であることから、方形を呈したものと思われる。現存長で東西0.8m、南北1.0m、深さ13cmを測る。埋土は7.5Y4/1灰色中粒砂混じり粘質シルトで第5層を少量含む。弥生土器・土師器・瓦器などが出土した(第6図6~8)。

遺構面Ⅱ(第5図)

SD2 B地区的南端で検出。北東から南西へ流下する溝。幅0.45m、深さ9cmを測る。埋土は第4層であった。土師器などが少量出土。

SD3 C地区の中央で検出。南東から北西へ流下する溝。幅0.35~0.45m、深さ11cmを測る。埋土は第4'層に第5層を少量含む層であった。土師器などが少量出土。

ピット B地区で多く検出した。

SD2の流向に沿って北から南へ連なる。SP7以外は長径で20~30cm前後、円形を呈するものが主体である。SP7は方形で大型、他と比べて深い。小土坑状態を呈する。規模等の詳細は別表参照。

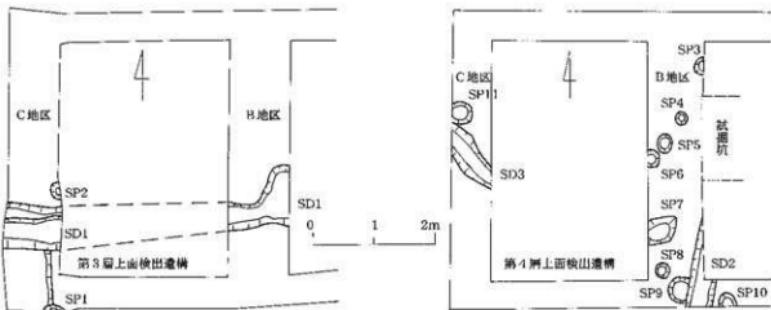
③ D地区・E地区・F地区・G地区

これらの地区については、建築工事の掘削の幅が狭いこと、周辺の家屋が林立し拡張できないことなどから、遺構面の把握より遺物包含層での遺物探

第1表 若江遺跡第81次調査ピット一覧表

遺構名	遺構面	地区	平面形態	規模(cm)			埋土	備考
				長軸	短軸	深さ		
SP 1	I	C地区	円形	32+	11+	7	a	
SP 2	I	C地区	円形	28-	20+	7	a	
SP 3	II	B地区K	円形	25+	15+	12	b	
SP 4	II	B地区	円形	18	18	10	b	
SP 5	II	B地区	円形	31	26	13	b	
SP 6	II	B地区	円形	29+	21+	10	b	
SP 7	II	B地区	方形	63+	43	46	c	小土坑状
SP 8	II	B地区	円形	23	23	9	c	
SP 9	II	B地区	円形	44+	31+	11	c	
SP 10	II	B地区	円形	29	21+	7	c	
SP 11	II	C地区K	円形	35	29+	13	c	

埋土: a; 第3層土体で第5層少量含む
b; 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト
c; 第4層土体で第5層少量含む



第5図 B地区・C地区検出遺構平面図

集に努めた。層準はほぼB地区・C地区と同一で、第3層、第4層から遺物が出土した。また、E地区南部の東端とA地区が接する箇所については、古井戸が現存し、中世期の遺構・遺物が既破壊を受けていることから調査対象から外した。

3) 出土遺物

弥生時代～中世期の遺物がある。弥生土器、土師器、瓦器、須恵器などが出土した。以下、試掘、遺構及び遺物包含層などに分けて記す。

試掘出土土器（第6図1～5）

1～5は上師器の皿である。中世期の上師器皿については口径10cm未満を小皿、10cm以上12cm未満を中皿、12cm以上を大皿とする。1は小皿である。2～5は大皿である。体部から口縁部にかけて外へ大きく開き、口縁端部は丸く終わる。1は外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はユビナデ調整する。見込み部にナデ上げ痕がみられる。2は口縁部がやや肥厚する。2・3は口縁部内外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。4・5は外面をユビナデ調整、内面をヨコナデ調整する。15世紀代。

遺構出土上器

S K 1 （第6図6～8）

6は弥生土器の底部である。中央に孔を穿つ。外面をヘラミガキ調整、他をナデ調整する。詳細な時期は不明である。生駒西麓産。7は土師器の椀である。体部から口縁部にかけてわざかに内寄しながら立ち上がる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。奈良時代。8は瓦器である。椀の底部である。底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。体部外面と内面をヘラミガキ調整、他をユビナデ調整する。いぶしは悪い。11世紀代。

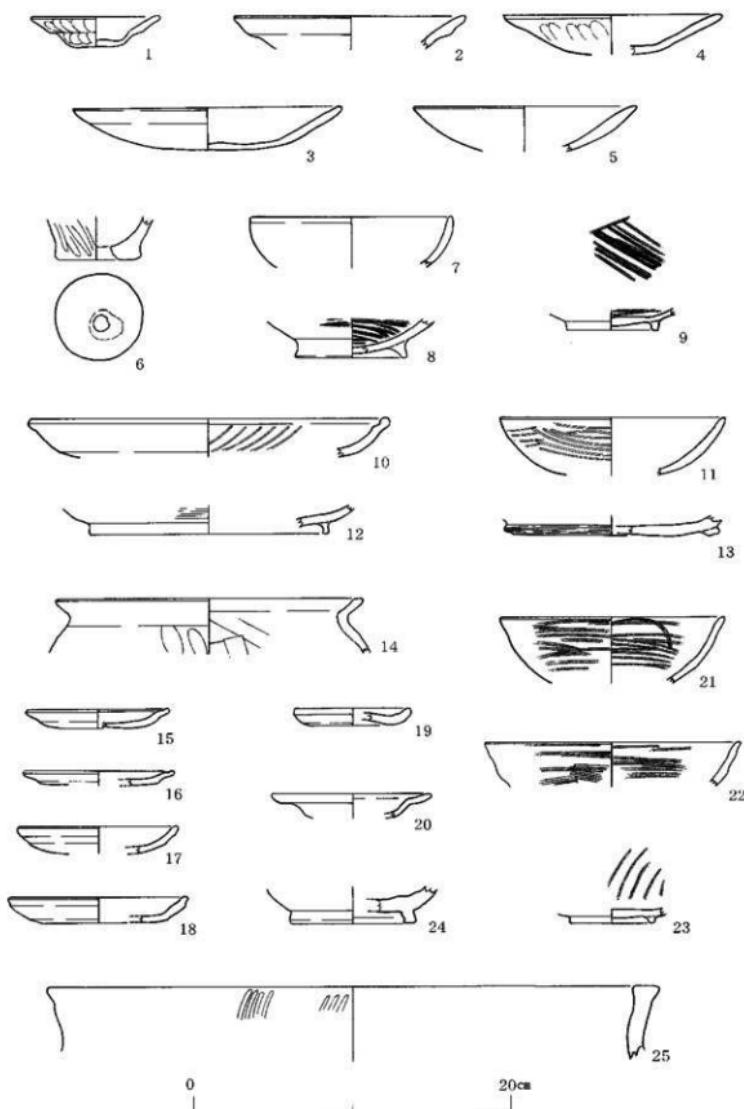
S D 1 （第6図9）

9は瓦器である。椀の底部である。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。内面をヘラミガキ調整、他をユビナデ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施す。いぶしは悪い。12世紀代。

遺物包含層出土土器

第1層（第6図10～13）

10～13は土師器である。皿・椀・底部がある。10は皿である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は内側へ肥厚し、丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整する。内面



第6図 造構、第1層・第2層出土上器実測図

に放射線状の暗文を施す。11は椀である。体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上がる。外面向はナデ調整の後、粗いヘラミガキ調整する。内面はヨコナデ調整する。12・13は底部である。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。12は体部外面、13は高台部外面をヘラミガキ調整する。他はナデ調整する。10～13は奈良時代。

第2層（第6図14～25）

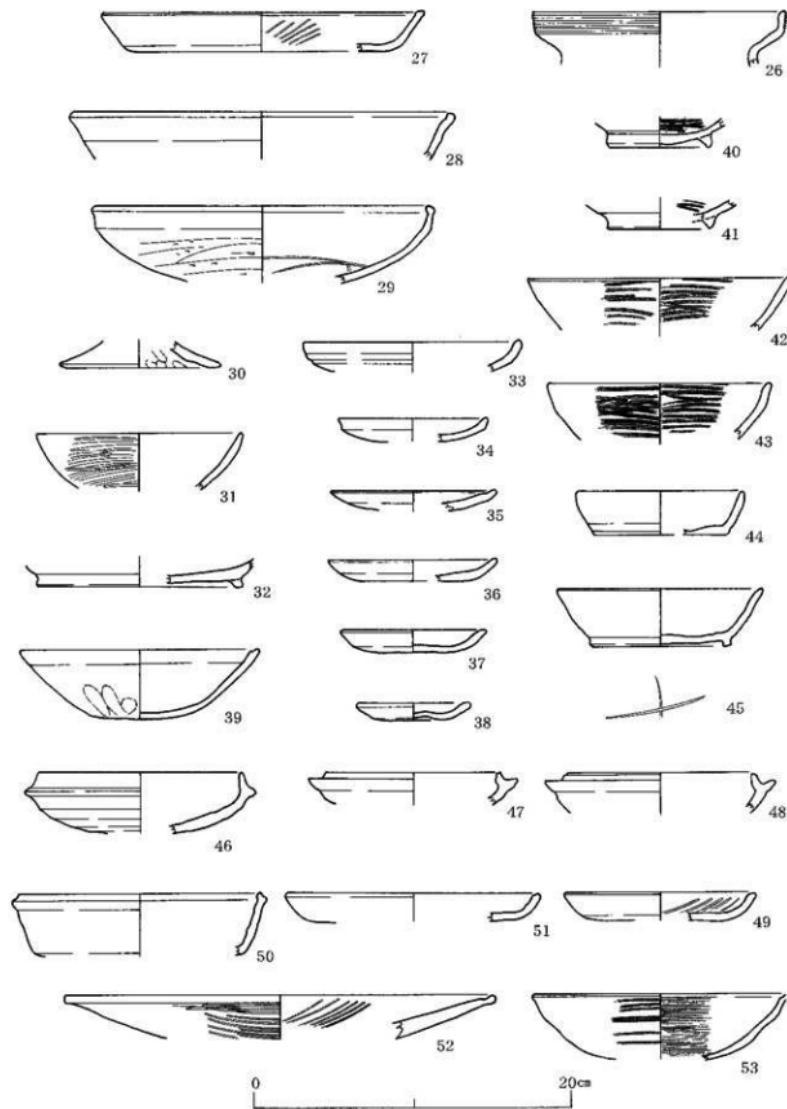
14～20は土師器である。甕・皿がある。14は甕の口縁部である。口縁部は外折し、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面をヨコナデ調整、体部内面を板状工具によるナデ調整する。平安時代。15～20は小皿である。口縁部がやや外反し、口縁端部は内側へ肥厚するもの（15・16）、体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がるるもの（17～19）、体部から口縁部にかけて外反し、口縁部が外へ大きく聞くもの（20）がある。17～20は口縁端部が丸く終わる。19の底部は上げ底である。15～18は口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。19は口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。20は口縁部外面をヨコナデ調整、他をユビナデ調整する。15～18は11世紀代、19は12世紀代、20は16世紀代。

21～23は瓦器の椀である。21・22は底部を欠損。器高は深めである。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。いわゆる和泉型である。（以下省略）外面とも粗いヘラミガキ調整する。22は外面をハケメ調整の後、ヘラミガキ調整する。23は底部である。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。高台部をヨコナデ調整、他をナデ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施す。いぶしは悪い。21・22は11～12世紀代、23は13世紀代。

24・25は須恵器である。底部・甕がある。24は底部である。杯の底部と考えられる。底部は断面が台形の高台を削りだす。外面とも回転ナデ調整する。奈良時代。25は甕の口縁部である。口縁部が上方へ伸び、口縁端部は水平方向へ面を持つ。外向はタタキ調整の後、回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。

第3層（第7図26～48）

26～39は土師器である。甕・皿・杯・高杯・椀がある。26は甕である。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部を上方へ拡張する。口縁部内外面ともヨコナデ調整する。口縁端部外面に擬円線文を施す。いわゆる酒津式の甕である。庄内式期。27・28は皿である。口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は内側へ肥厚し、丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。27は内面に放射線状の暗文を施す。奈良時代。29は杯である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。口縁端部は内側へやや肥厚し、面を持つ。体部外面をヘラケズリ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整する。他はナデ調整する。底部内面に連結輪状の暗文を施す。奈良時代。30は高杯の脚部である。楕部は大きく聞く。外向はナデ調整、内面はユビナデ調整する。古墳時代。31・39は椀である。口縁端部は丸く終わる。31は体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上がる。外向はナデ調整の後、密なヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。39は体部から口縁部にかけて外へ開き気味に伸びる。口縁端部の内面に段を持つ。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。31は奈良時代、39は平安時代。32は底部である。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。外向はナデ調整、内面は風化により調整が不明である。奈良時代。33～38は皿である。33は大皿、35・36は中皿、34・37・38は小皿である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる（33）、体部がやや内湾し、口縁部がわずかに外反する（34）、底部から口縁部にかけて外へ大きく聞くながら伸びる（35）、体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がる（36～38）がある。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他はナデ調整する。33は口縁



第7図 第3～5層出土上器実測図

部外面に2段のヨコナデ調整する。38は底部がやや上げ底である。33～35は11世紀代、36～38は12～13世紀代。

40～43は瓦器の椀である。40・41は底部である。底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。高台部をヨコナデ調整、他をナデ調整する。その後、内面に粗いヘラミガキ調整する。42・43は底部を欠損する。器高は深めである。外面ともヘラミガキ調整する。いぶしは悪い。12世紀代。

44～48は須恵器の杯である。44・45は底部が平底である。底部から口縁部にかけて内折し、外上方へ伸びる。45は底部に高台が付き、口縁部がわずかに外反する。底部外面に十字のヘラ記号がみられる。46～48は底部から受部にかけて内弯する。受部は比較的短く水平方向へ伸びるもの（46）と外上方へ伸びるもの（47・48）がある。立ち上がり部は内傾気味にやや外反しながら上方へ伸びる。底部外面は回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。すべて口縁端部は丸く終わる。44・45は奈良時代、46～48は古墳時代後期。

第4層（第7図49）

49は土器の皿である。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。内面に放射線状の暗文を施す。奈良時代。

第5層（第7図50～53）

50・51は須恵器の杯である。50は底部から口縁部にかけて内折し、外上方へ伸びる。受部は外側へ肥厚気味に付く。立ち上がり部は内傾気味に短く伸び、端部は丸く終わる。51は体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外面を回転ナデ調整する。50は奈良時代、51は奈良～平安時代。

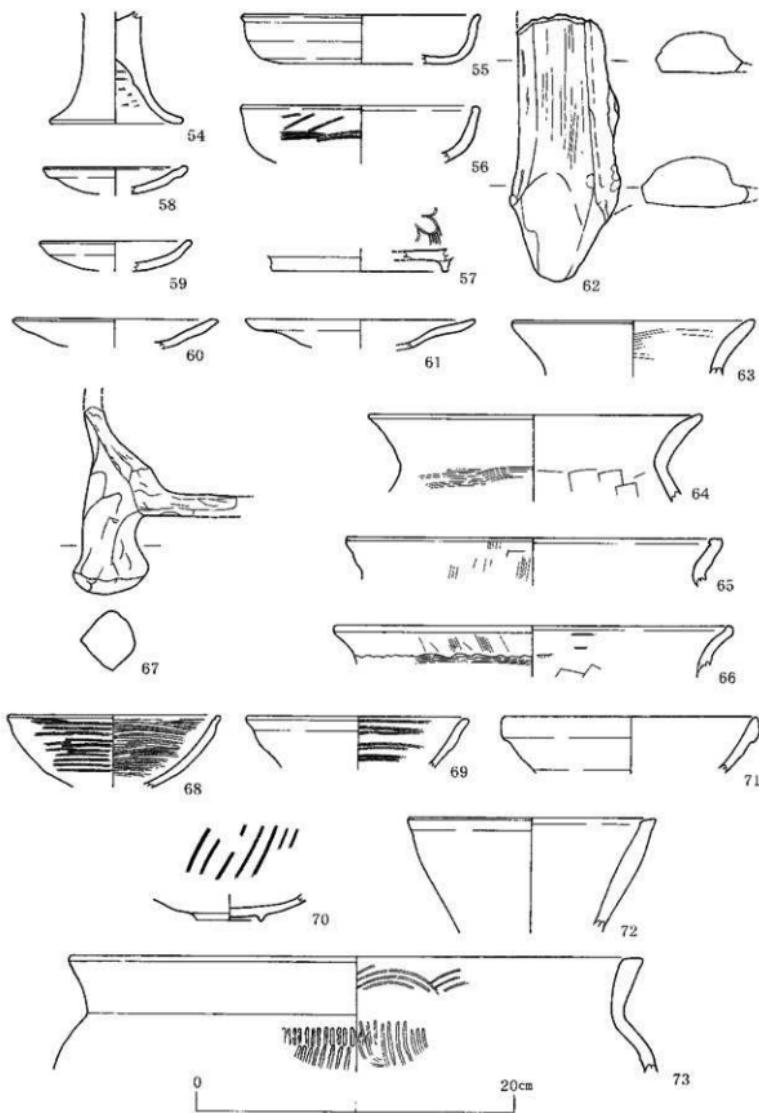
52は土器器の高杯である。器高は低く、外へ大きく開く。口縁端部はやや内側に肥厚し、丸く終わる。体部外面をヘラミガキ調整、口縁部外面をヨコナデ調整する。内面に放射線状の暗文を施す。口縁部内面に炭化物が付着する。奈良時代。

53は瓦器の椀である。体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がる。口縁端部内面に沈線を廻らす。いわゆる大和型である。（以下省略）外面は粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。いぶしはやや悪い。12世紀代。

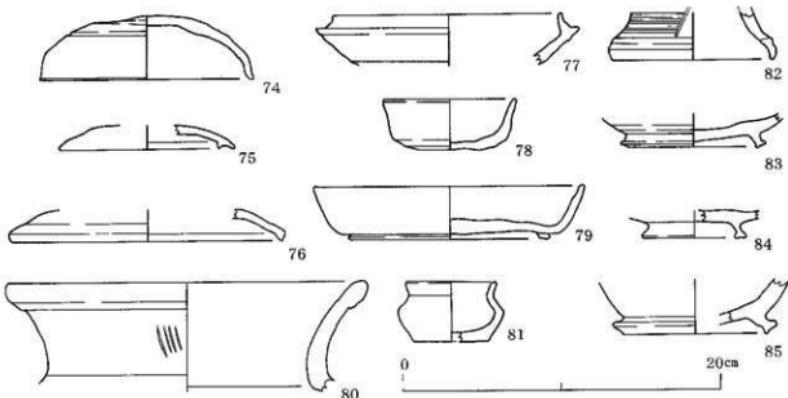
第1～5層（第8・9図54～85）

54は弥生土器の高杯である。脚部である。柱状部は比較的短く、中位からゆるやかに外反する。脚端部は丸く終わる。外面は風化により調整が不明である。内面上半をヘラケズリ調整、下半をナデ調整する。弥生時代後期。生駒西麓産。

55～66は土器器である。杯・皿・壺・壺・羽釜がある。55・56は杯である。体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がる。55は口縁端部が外反し、丸く終わる。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。56は口縁端部が内側に肥厚し、丸く終わる。外面をナデ調整の後、ヘラミガキ調整する。内面はヨコナデ調整する。奈良時代。57は底部である。底面に断面が台形の高台を貼り付ける。高台部はヨコナデ調整、他をナデ調整する。見込み部に連続輪状の暗文を施す。奈良時代。58・59は小皿である。底部から口縁部にかけてわずかに内弯しながら外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。58は口縁部が外反し、段を持つ。口縁部外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。58は11世紀代、59は12世紀代。60・61は大皿である。体部から口縁部にかけて外へ大きく開き、口縁端部は丸く終わる。61は口縁部が外反し、外上方へ伸びる。外面をユビナデ調整、内面をヨコナデ調整する。16世紀代。60は口縁端部に焼が付着していることから燈明皿として使用したと考えられる。15世紀代。62は壺の炊口部である。壺端部は丸く終わる。外面を5本/cmのハケメ調整、側面と壺



第8図 第1～5層出土上上器実測図(1)



第9図 第1～5層出土土器実測図(2)

部外面はナデ調整する。奈良時代。63～65は甕の口縁部である。口縁部は外上方へわずかに外反する。口縁端部が丸く終わるもの(63・64)と内側へ肥厚し、丸く終わるもの(65)がある。63は口縁部外面をヨコナデ調整、内面を5本/cmのハケメ調整する。64は体部外面を8本/cmのハケメ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整する。体部内面は板状工具によるナデ調整する。65は口縁部外面を7～8本/cmのハケメ調整の後、ナデ調整する。口縁部内面はナデ調整する。奈良時代。66は羽釜である。鉢部が剥離する。口縁部は外反する。口縁端部がやや内側へ肥厚し、丸く終わる。口縁部外面を8本/cmのハケメ調整する。口縁部内面はハケメ調整の後、ナデ調整する。体部は板状工具によるナデ調整する。奈良時代。

67～70は瓦器である。火舎・椀がある。67は火舎の脚部である。底部は平底で、脚部は直立に付く。胸部断面は四角形を呈し、鋸端部は丸く終わる。内外面をナデ調整する。15世紀代。68～70は椀である。68・69は底部を欠損する。器高は深い。体部はわずかに内寄しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。68は口縁端部内面に沈線を廻らす。内外面とも密なヘラミガキ調整する。69は口縁端部が丸く終わる。体部外面をユビナデ調整、口縁部外面をヨコナデ調整する。内面に粗いヘラミガキ調整する。70は底部である。底部に断面が三角形の高台を貼り付ける。高台部をヨコナデ調整、他をナデ調整する。見込み部に平行線状の暗文を施す。いぶしは悪い。68は11～12世紀代、69・70は13世紀代。

71は陶磁器である。白磁の碗である。体部が外へ開き気味に伸び、口縁端部は大きく肥厚する。いわゆる玉縁状の口縁である。体部外面の上半と内面を施釉する。色調は灰白色を呈する。12世紀代。

72～83は須恵器である。鉢・甕・蓋杯・杯・壺・高杯・底部がある。72は鉢である。体部から口縁部にかけて外上方へ伸びる。口縁端部は水平方向へ面を持つ。内外面とも回転ナデ調整する。古墳時代後期。73・80は甕である。73は口縁部がやや外折し、口縁端部は水平方向へ面を持つ。体部外面にタキキ調整する。内外面を回転ナデ調整する。内面に当て具痕による青海波文がみられる。80は口縁部が外反する。口縁端部が外側へ肥厚し、丸く終わる。口縁部内外面を回転ナデ調整する。口縁部外面に平行線状のヘラ記号がみられる。73は奈良時代、80は古墳時代。74～76は蓋杯である。天

井部から口縁部にかけて稜はみられず、なだらかに下がる。口縁端部は丸く終わる。天井部外面を回転ヘラケズリ調整する。口縁部外面と内面を回転ナデ調整の後、天井部内面をナデ調整する。75・76は天井部を欠損する。器高が低く、口縁部にかけて下方へ開き気味に伸びる。75は内面に短いかえりを施す。76は口縁端部が内折し、尖り気味に終わる。内外面を回転ナデ調整する。74は古墳時代、75は飛鳥時代、76は奈良時代。77～79は杯である。77は底部から受部にかけて外へ開き気味に伸び、受部は水平に付く。立ち上がり部は比較的短く、わずかに内傾して立ち上がる。立ち上がり端部は丸く終わる。78・79は底部から口縁部にかけて内寄しながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。79は底部に断面が台形の高台を貼り付ける。77・78は底部を回転ヘラケズリ調整、他を回転ナデ調整する。79は内外面を回転ナデ調整する。底部外面と見込み部はナデ調整する。口縁部外面に自然釉が付着している。77は古墳時代後期、78・79は奈良時代。81は壺である。底部が平底である。体部は中位で張り、大きく内寄する。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。底部に糸切りの痕がある。奈良時代、82は高杯の脚部である。脚部は短く、ハの字形に広がる。裾端部近くで内傾し、丸く終わる。脚部外面をカキメ調整、他を回転ナデ調整する。裾端部近くに凹線を廻らす。透かし孔を1段施す。古墳時代中期～後期。83～85は底部である。杯あるいは壺の底部と考えられる。底部は端部が左右に肥厚した高台を削りだす。内外面を回転ナデ調整する。83は高台部より上方を回転ヘラケズリ調整する。奈良時代。

4)まとめ

今回の調査地は、現在推定の若江城主郭の内部にあたり、各時期の若江城の遺構検出、遺構面把握が期待されたところである。調査区は口の字状にトレーニングを設定したため、遺構の性格認識は困難であるが、上下2枚の遺構面を確認することができた。出土遺物は、遺構所産の時期のものよりは古相を示すものが多い。その中で、本調査に先立つ試掘(確認)調査で出土した土師器皿(第6図1～5)一括と、各層から出土した上師器皿(第6図20、第7図38、第8図61)から遺構の時期観を探ってみることとする。土師器皿(1～5)は、上げ底ないし上げ底を指向する器形で、口縁部ないし体部に指頭圧痕を明瞭にとどめる。とくに1は口縁部から体部にかけての指頭圧痕が顕著である。15世紀中葉から後半に位置づけられる。いっぽう、4は指頭圧痕を残し、口縁部と体部との境は不明瞭ながら、大きく外上方に聞く。この傾向は上師器皿(20・61)に至り顕著である。20は小皿、61は大皿と法量は異なるものの、ともに口縁部は屈曲して水平に近く伸びる。16世紀前半に下る資料である。20は第2層から出土しているため、以上の土器の時期観を踏まえ、遺構面Ⅰの時期を戦国時代ごろに推定できる。遺構面Ⅱの時期は、ベース面となる第4層以下の層から古相を示す遺物が多いことから所属時期の特定は困難である。ただし第5層から12世紀後半の瓦器(53)が出土していることから、該期以降の所産と考えられる。具体的には遺構面Ⅰからさほど遡らない時期に指定できるように思われる。

また、上層から下層まで、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物を中量含んでいる点が注目される。今回の調査では、工事掘削の底面(現地表から0.9m)までの調査であったため、下部の遺跡様相は不明であるが、調査地周辺に古墳時代から奈良時代にかけての集落が存在し、遺構面Ⅰや遺構面Ⅱに属する構造は該期の集落を擾乱して營造されたことが知られる。古代集落の存否については、周辺地の調査に期待するところ大といわねばなるまい。

* 土師器皿の年代観は、千喜良津「中・南河内における土師器皿の変遷」(『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』、2002年。)に従った。

図版 1
若江遺跡第81次調査
遺構



調査前の状況



A地区完掘後状況



B地区遺構面Ⅰ 遺構掘削後状況
(北より)

C地区遺構面I 遺構掘削後状況
(北より)



B地区遺構面II 遺構掘削後状況
(西より)



C地区遺構面II 遺構掘削後状況
(北より)



図版
3

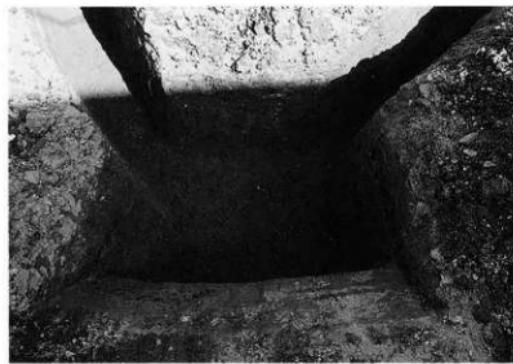
若江遺跡第81次調査
遺構



C地区西壁断面



A～C地区埋戻し後
D・F・G地区調査前状況
(西より)



D・F・G地区掘削後状況
(西より)



1



3



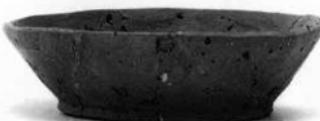
81



74



79



45



78



45'

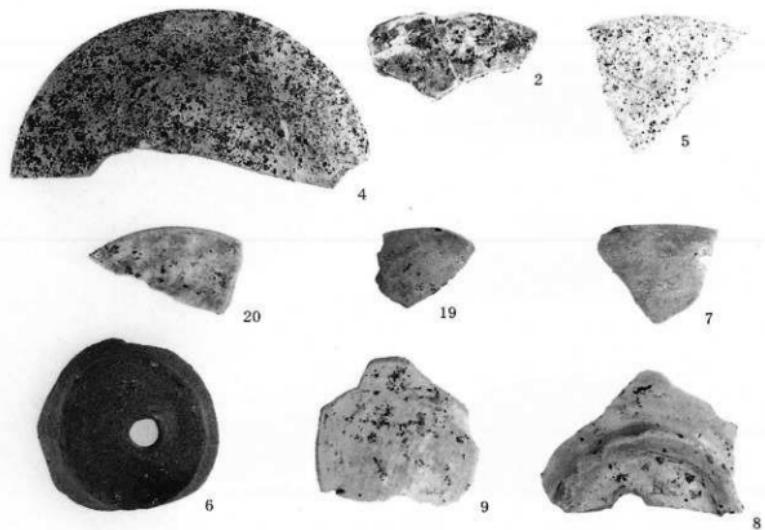


54

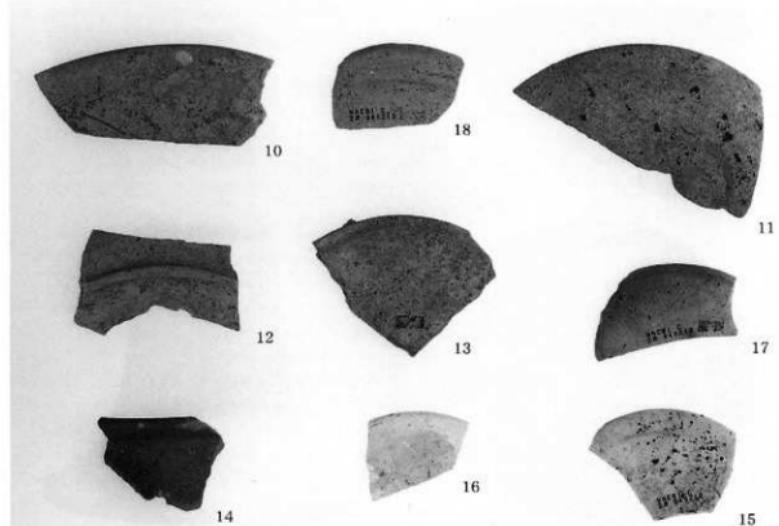
試掘出土土師器小皿・大皿 第3層出土須恵器杯 第1～5層出土弥生土器高杯・須恵器蓋杯・杯・壺

圖版 5

若江遺跡第81次調查
遺物



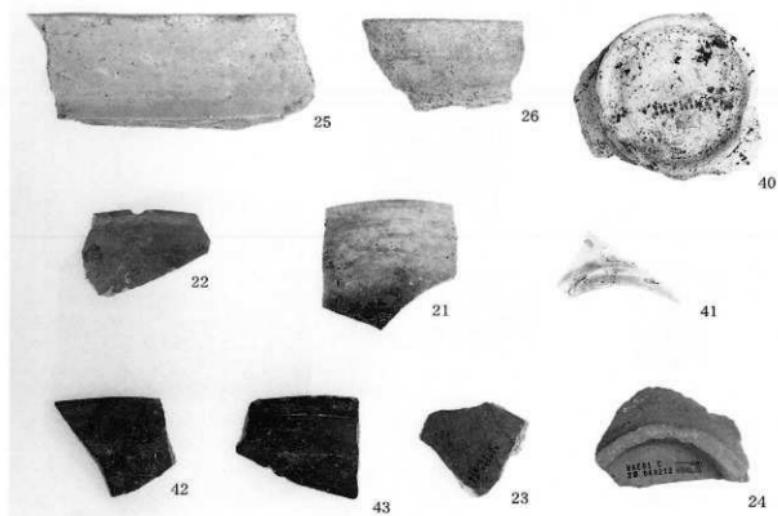
試掘出土土師器皿 SK1出土弥生土器底部、土師器碗、瓦器碗 SD1出土瓦器碗 第2層出土土師器小皿



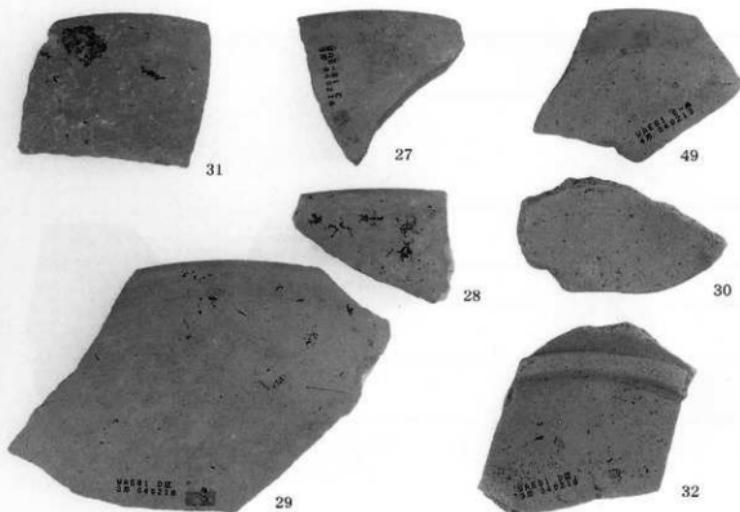
第1層出土土師器皿・碗・底部 第2層出土土師器甕・小皿

図版 6

若江遺跡第81次調査
遺物



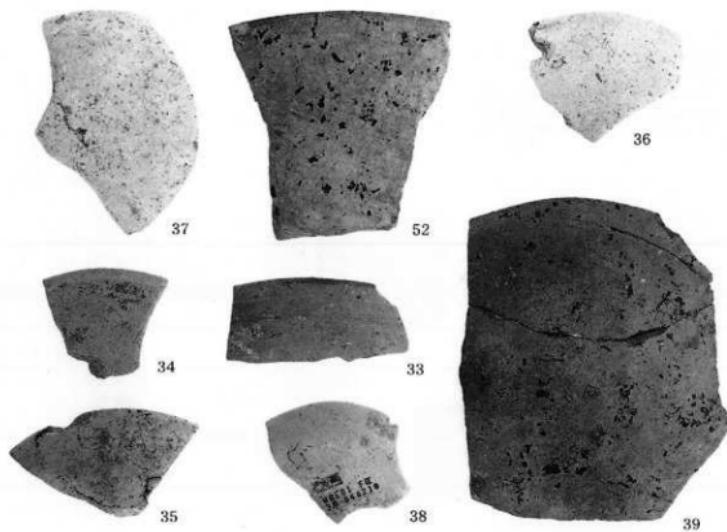
第2層出土瓦器椀、須恵器底部・甕 第3層出土土師器甕、瓦器椀



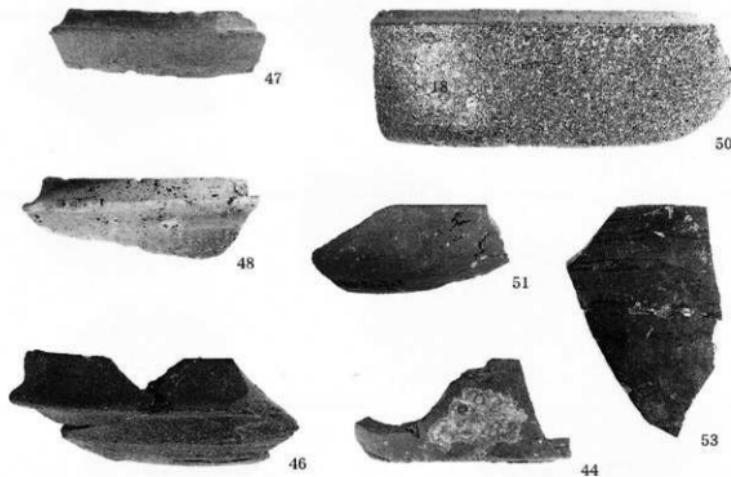
第3層出土土師器皿・杯・高杯・椀・底部 第4層出土土師器皿

圖版 7

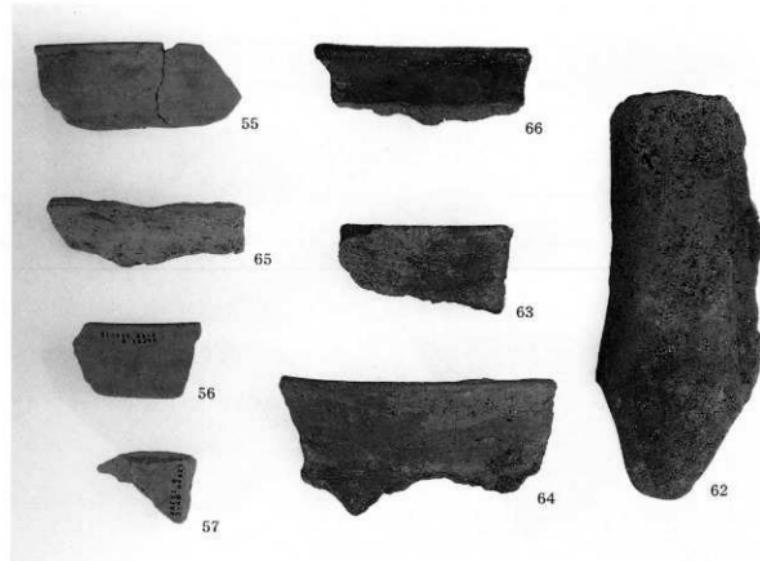
若江遺跡第81次調查
遺物



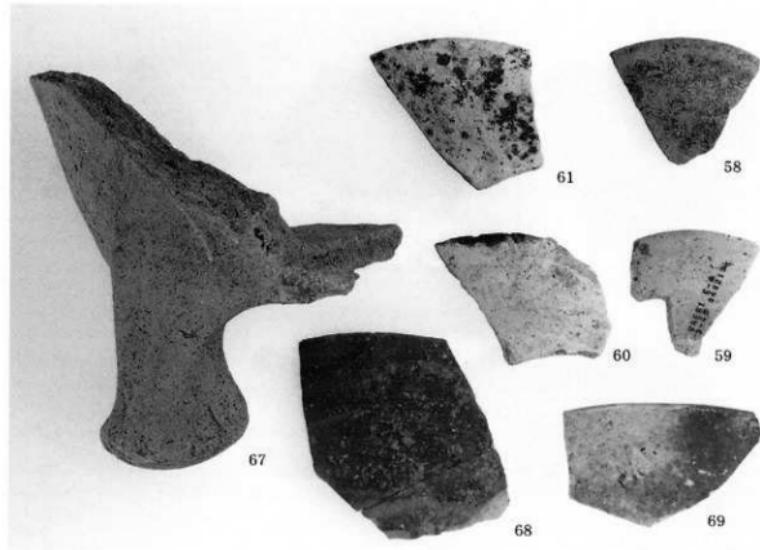
第3層出土土師器大皿・中皿・小皿・椀 第5層出土土師器高杯



第3層出土須惠器杯 第5層出土須惠器杯、瓦器椀



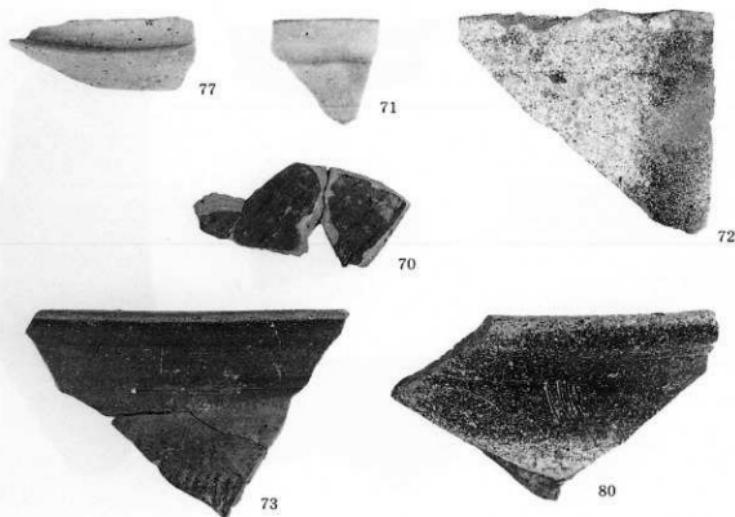
第1～5層出土土師器杯・底部・壺・甕・羽釜



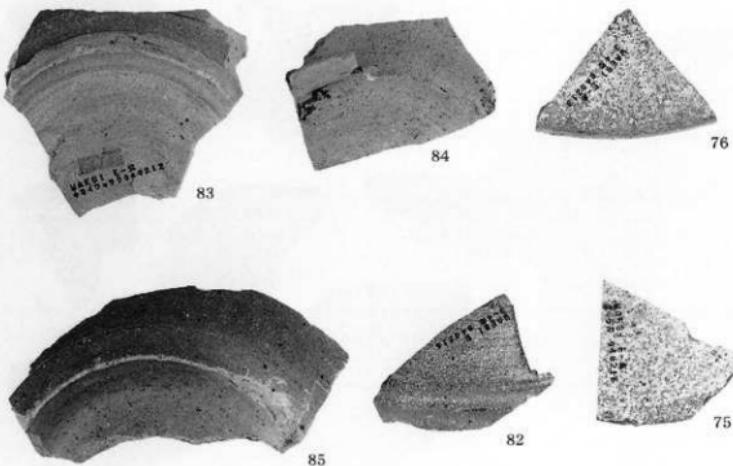
第1～5層出土土師器小皿・大皿、瓦器火舍・桷

圖版
9

若江遺跡第81次調查
遺物



第1～5層出土瓦器椀、白磁碗、須恵器鉢・甌・杯



第1～5層出土須恵器蓋杯・高杯・底部

第4章 若江北遺跡第9次発掘調査

1) はじめに

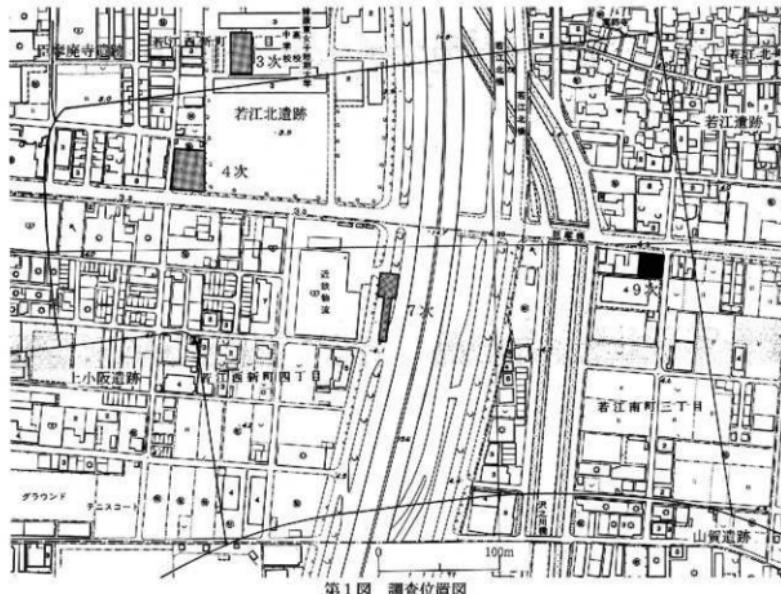
若江北遺跡は、東大阪市若江北町3丁目・若江南町3丁目、若江西新町3～4丁目にかけて広がる、縄文時代晚期から江戸時代にかけての複合遺跡である。本遺跡は、旧大和川分流路の堆積作用で形成された微高地上に立地すると考えられる。南北約400m、東西約550mの範囲に広がる。遺跡の発見は昭和9年の旧楠根川改修工事に遡る。排土中に多量の弥生土器、上器、中世の遺物が含まれていた。さらに昭和46年の改修工事でも多量の遺物が発見され遺跡の所在が再認識されることになった。

若江北遺跡では、これまで8次にわたる発掘調査が実施してきた。ただし、そのうち6次分については、ガス管・下水管・電気ケーブル等埋設工事(7次ほか)ものであり、遺構面の検討に耐えうるような面的調査は、3次・4次の2回に過ぎない。さらに第3次調査は現在の遺跡区分に従うと、北に連なる巨摩庵寺遺跡の範囲に包摂される。第3次調査では中世後半から末期の溝・井戸・土坑、弥生時代中期木～古墳時代初頭の自然流路、弥生時代中期末の水田址が検出されている。第4次調査では主な遺構として、弥生時代後期～古墳時代初頭の溝・土坑・井戸・掘立柱建物が密に検出された。また中央環状線内の近畿自動車道関連工事に伴い、(財)大阪府文化財センターによる数次の調査が実施されている。一例のみ紹介すると、高架橋建設に伴う大阪府第5次調査^{*}では、縄文時代晚期から近世にいたる各時期の遺構面が11面確認された。詳細は報告書に掲られたいが、調査成果を2項目のみ指摘したい。一つは、義繼～信長期に属する若江城外郭堀が検出されたことである。推定若江城主郭からは北西へ約400m隔たっており、往時の若江城の規模を推測しうるデータである。もう一つは、河内潟周辺で最末期の凸帯文土器が出土していることである。量的には僅少で主体は弥生前期の遠賀川系土器が占めるが、遠賀川系土器の影響を受けた土器といえ、注目される。概して言えば、若江北遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭の集落遺跡であり、かつ地点によれば、東に隣接する若江城の関連遺構が検出される可能性があることが指摘できる。因みに、現在の遺跡範囲で見ると、第4次調査地が遺跡の西侧、今回の第9次調査地が東端付近にあたる。

2) 調査に至る経過

平成16年5月、若江南町3丁目33-2番地において、個人兼用住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。北側に接する府道大阪東大阪線の天塀からみて、敷地は幾分下がっているとの説明があり、建物基礎も設定地表面から35cmのベタ基礎工法であったため、埋蔵文化財への影響はない判断し、「慎重に工事実施」と指示した。ところが、7月に別件で偶々当該の敷地の前を通りかかったところ、明らかに杭打ち工事が行なわれており、工事は終了した状態であった。このため、原因者(代理者)にこの間の説明を求めるとともに、取扱いについて協議に入った。協議には大阪府教育委員会の指導を仰いだ。まず、杭打ち工事による「埋蔵文化財発掘の届出」の提出があり、それに基づいて確認(試掘)調査を実施した。調査に必要な重機等は原因者側で用意された。その結果、若江城期の遺物包含層が検出された。このため、遺構の存否を確認することが必要となった。前記したように、すでに建築工事箇所には杭打ちが完了していたので、調査は建物の外周部で行なうこととした。平成16年8月17日に実施した。遺構の確認のためには、一定の面積が必要であるが、建築資材の置場の関係から、調査トレンチは敷地北西部に2m×4mの規模を設定した。

*若江北遺跡では、東大阪市と大阪府で個別の調査次数をとっている。本報告では從前の呼称に従う。なお、財團法人大阪府文化財調査研究センター『平成・若江北遺跡発掘調査報告 第5次』(1996)を参照。



第1図 調査位置図

3) 調査の概要

調査は、遺構確認とそのレベル把握を主眼としたため、基本的に重機と人力を併用した掘削を行なった。後記の漆状遺構の面付近まで重機にて掘削し、遺構内の埋土は人力で掘り下げる。

まず、確認した層位は次のとおりである(盛土層を除く)。

第1層 旧耕土層。

第2層 5BG5/1青灰色シルト質細粒砂。

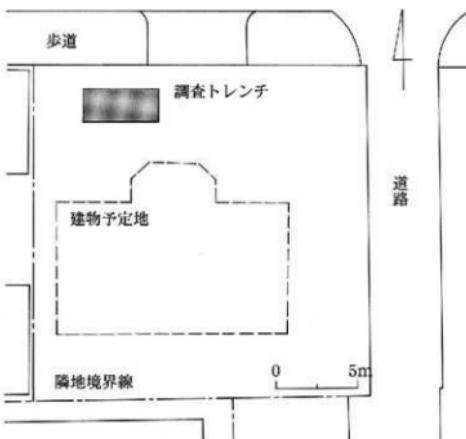
第3層 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質細粒砂。

第4層 10YR6/3にぶい黄橙色粘土。

第5層 10YR4/1褐灰色シルト混じり粘土。

第6層 10YR4/1褐灰色細粒砂混じり粘土。

第7層 後記の第8層を主体に第6



第2図 調査トレンチ位置図

層がブロック状に混入する層。

第8層 10YR6/6明黄褐色粗粒砂。

第9層 10YR5/1褐灰色砂混じり粘土。

上記層位のうち、第2層は第3層上面を造構面とする溝・落ち込みの埋土である。これらの溝・落ち込みは埋土の状態からみて、近代以降の所産と考えられる。第8層は粗粒砂層で、若江城など中世期の造構形成にかかわる基盤層である。

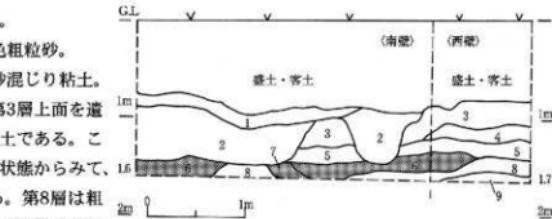
今回の調査では、この層上面で、若江城期の漆状造構を確認した(第3図)。漆状造構は一部を検出したに過ぎない。現況では小溝状を呈する箇所と落ち込み状の箇所の2箇所に区分できる。小溝部は幅20~28cm、深さ9cmを測り、断面形は緩やかなU字形を呈する。溝底面のレベル差から北から南へ流下することが知られた。落ち込み部に取り付き、排水の機能を持っていたと推察される。落ち込み部は東西1.6m、南北1.0m、現状での最大深度12cmを測る。形状と規模からみて、調査地の東隣の市立若江小学校敷地内を調査した第38次調査検出の小堀に相当すると考えられる。

4) 出土遺物

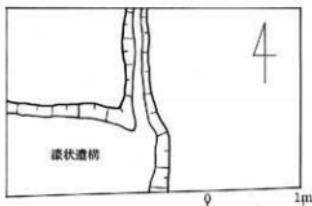
第6~7層出土土器

(第5図1~4)

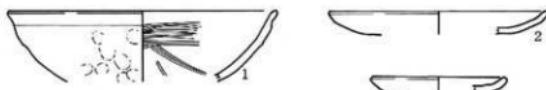
1は瓦器の楕である。底部を欠損する。器高は深めである。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上



第3図 層位断面図



第4図 造構平面図



第5図 出土土器実測図



がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。いわゆる和泉型である。体部外面に指頭圧痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面をヘラミガキ調整する。見込み部に平行線状と思われる暗文を施す。いぶしは悪い。2・3は土器師の皿である。2は大皿である。口径13.2cmを測る。体部から口縁部にかけて外へ大きく開きながら立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整、他はナデ調整する。3は小皿である。口径8.0cmを測る。体部から口縁部にかけて外へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面をナデ調整する。4は須恵器束縄系の探鉢である。体部から口縁部にかけて外へ大きく伸びる。口縁端部は面を持つ。体部外面は回転ナデ調整する。いずれも12~13世紀に属する。

5) まとめ

きわめて小規模な調査であったため、詳細は不明であるが、今回の調査で漆状を呈する落ち込みを検出した。造構上面の堆積層の年代観から、鎌倉時代の所産である。若江遺跡の調査成果と考え併せるべきであろう。周辺の調査が望まれる。

圖版

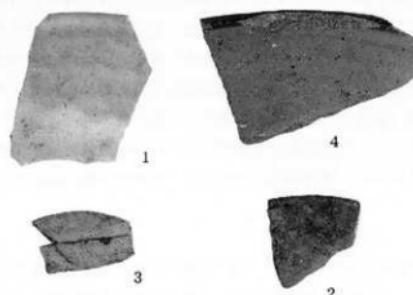
若江北遺跡第9次調查



遺構掘削後狀況



號面



出土遺物

第5章 西ノ辻遺跡第47次発掘調査

1) はじめに(第1図)

西ノ辻遺跡は、東大阪市東山町・弥生町・宝町・南莊町・西石切町1丁目・同3丁目にわたる縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。本遺跡は牛駒山地西麓部に発達した、標高7~20mの沖積扇状地の扇尖部から扇端部にかけて立地する。南北約600m、東西約400mの範囲に広がっている。遺跡は昭和16年に発見され、その後16~17年の京都大学の調査により、弥生時代後期の標式遺跡として全国的に著名となった。現在まで47次に及ぶ発掘調査が実施されている。

既往の調査については、若松博恵、吉田綾子両氏によって42次までの成果が総括されている^{*}。同書に拠ると、第47次調査地周辺では、弥生時代中期、古墳時代、鎌倉時代以降の3時期の集落が推定されている。後述する今回の調査成果からみると、当を得た指摘といえる。また付言すると第2章^{**}で論述したように、第47次調査地の周縁では、縄文時代晚期凸帯文土器が中量出土しており該期集落の存在が暗示されよう。

平成15年9月、弥生町1414-1番地の一部において、賃貸共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が個人より提出された。建物基礎の形状は杭打工事で埋蔵文化財への影響が懸念された。そこで確認(試掘)調査が必要な旨届出者宛て通知した。その後時日が経過し、平成16年6月に確認調査を実施した。調査の結果、弥生時代の遺物包含層が検出された。取扱いについて、協議を重ねた結果、工事に先立って発掘調査を実施することで双方合意した。調査面積は137m²となった。調査は平成16年7月30日から8月30日まで実施した。

2) 調査方法と層位(第2図)

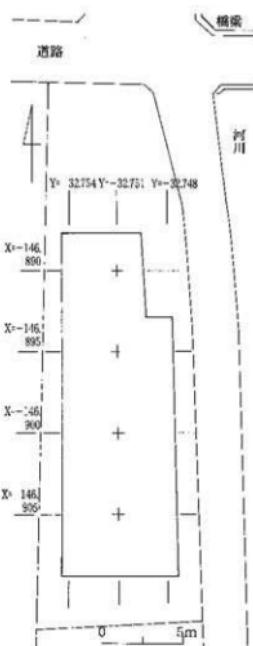
調査は確認調査の結果に従い、表上層・旧耕土層・床土層は重機で掘削した。床土層下面の灰オリーブ色細織混じりシルトは中世期以降の再堆積層であることが判明したため、重機を併用しながら掘削した。次に調査トレンチの形状から、遺構の把握や、現地での記録作成等に国家座標系に基づく基準杭が必要となった。これらの基準点・調査点測量は、当該年度の単価契約業者である株式会社アスカに委託の上、実施した。地中梁を含む予定の掘削工事は地表面から約1.2mにわたるため、その層準の範囲で地山層が検出されれば地山層上面まで、深い遺構など地山層が検出されない箇所は、概ね1.2mの掘削にとどめた。地区割は、第1図に示したようになつた。

検出した層位は次のとおりである(盛土層は除く、第2図)。

第1層 7.5GY4/1暗緑灰色粗粒砂混じりシルト。旧耕土層。

^{*}若松博恵・吉田綾子「西ノ辻遺跡における歴史的景観の変遷概略」(『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』、東大阪市教育委員会、2001年。)

^{**}西ノ辻遺跡第47次調査地の位置は、P7の第1図参照のこと。



第1図 調査トレンチ位置図

第2層 5YR5/6明赤褐色粗粒砂混じりシルト。床土層。
第3層 10Y4/1灰色粗粒砂混じりシルト。

第4層 7.5YR3/1黒褐色細礫混じりシルト質粘土。この層は調査地の南西端から中央部を経て北東側にかけて広がる。從つて南東側では、本来の堆積土が削平されて第3層の直下に地山層である第5層が見られた。弥生土器を主体とするが、古墳時代の須恵器を少量包含する。調査地の北側では第4層を切り込んで第4A層が、またその下部に第4L層が堆積していた。

第4A層 7.5YR3/1黒褐色細礫混じりシルト質粘土と7.5Y3/2オリーブ黒色細礫の混合土。

第4L層 7.5Y3/2オリーブ黒色細礫を主体に7.5YR4/3褐色シルト質粘土が混入する層。

第4A層、第4L層とも弥生土器主体で須恵器を少量包含することは第4層と共通する。ただし、第4L層の遺物出土は微量であった。

第5層 7.5YR4/3褐色シルト質粘土。地山層。中央部のみ細礫層が分布。これを第5'層とした。

第5'層 7.5Y3/2オリーブ黒色細礫。

遺構面について略述する。まず第4層～第4A層上面で耕作用の鋤溝群を検出した(遺構面Ⅰ)。次に第5層・第5'層・第4L層上面で井戸・ピットを検出した(遺構面Ⅱ)。北側では第4L層を除去後、その下面、第5層上面で自然流路・ピットを検出した(遺構面Ⅲ)。遺構面の時期決定の詳細は後述するが、面の上層に包含する遺物の所属時期により、遺構面Ⅱは弥生時代または古墳時代、遺構面Ⅲは弥生時代と指定することができる。

3) 遺構

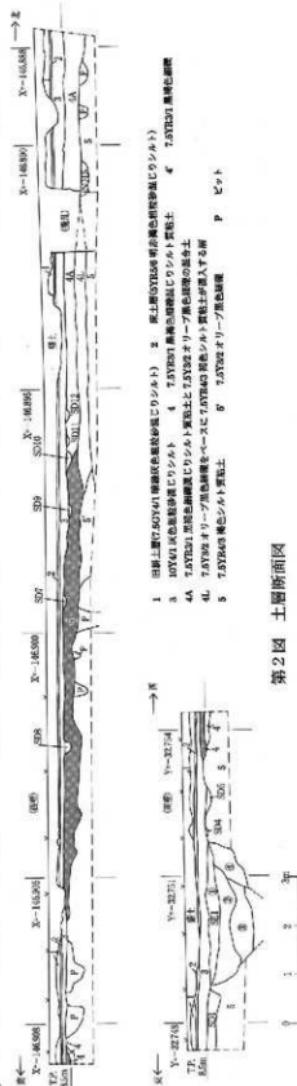
遺構面ごとに主要な遺構について見ていく。ピットの規模等については、第1表にまとめているのでそれに拠られたい。

遺構面Ⅰ(第3図)

耕作に関連する溝状遺構14条と耕作痕跡とみられる土坑状落ち込み3箇所を検出した。溝内から中世期の瓦器焼が出土しており、いずれも該期以降の所産と考えられる。

SD8は調査地中央やや南側で検出された。東から西へ流下する。幅0.24m、深さ8cmを測る。埋土は7.5Y4/3暗オリーブ色細礫～粗粒砂混じりのシルト層で、旧耕土層状を呈する。他の南北溝が埋没後に流下し、また埋土の室から遺構面Ⅰの中では最も新相に属する。

SD1は東側で検出。南端で幅1.6m以上、北端で0.72mを測る。深さは9～10cm。埋土は第5層に



第2図 土層断面図

5Y4/2灰オーリーブ色細礫～粗粒砂混じりのシルト質の細粒砂が混入する層であった。SD1の南端と北端では、その底面にレベル差は認められない。溝の南側では肩部付近に小溝が掘られていた。いずれも幅0.25m、深さ2cmであった。とくに南側では底面が堅くしまっており耕作面を形成するものと思われる。北側ではSD1の東に落ち込みが認められた(SX1～3)。約2.5mのピッチで並んでおり耕作痕跡であろう。

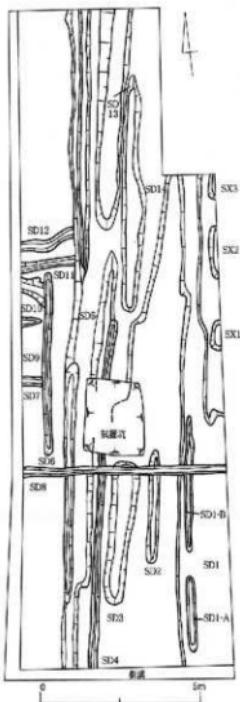
SD5は南北溝で、南端で幅0.51m、深さ5cm、北端で幅1.43m、深さ20cmを測る。埋土は5Y4/2灰オーリーブ色細礫～粗粒砂混じりのシルト質の細粒砂であった。南側と北側で溝の規模が極端に変化するのは、前記したように南側では近世ないし近代に削平を受けているためと考えられる。したがってSD5本来の規模は北側が実相を反映していると見られる。また南端と北端では、その底面にレベル差は認められなかった。北側では2段の畠が明瞭に遺存していた(図版2)。

遺構面II(第6図)

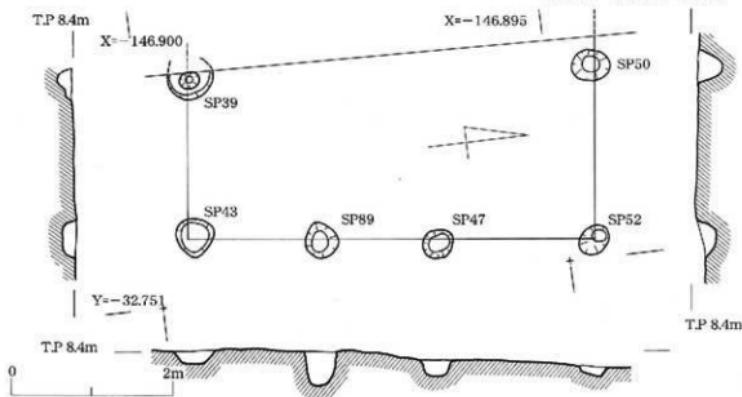
調査地の全域でピット68個・土坑3基・井戸1基を検出した。ピットの配置や埋土を検討した結果、掘立柱建物2棟が復元できた。調査地中央から北側では、第4L層埋没後の浅い凹地が見られ、南から北へ緩い傾斜面をなしていた。凹地内部では上面と下面の2面の遺構面が形成されていた。ここでは前者を遺構面II、後者を遺構面IIIとして説明を加えることとする。各遺構面の時期についてはピットの項で詳述する。

井戸・土坑(第5図)

SE1は調査地の南端で検出した井戸である。平面は円形を呈し、



第3図 遺構面 I 平面図



第4図 掘立柱建物 1 実測図

素掘りである。現存長で東西2.95m、南北1.23mを測る。埋土・堆積土は4層に区分された。^①層は10YR2/2黒褐色粘土・細礫混じりのシルト層である。^②層は5Y2/1黒色細礫混じり粘土層である。^③層は5Y2/1黒色粘土層である。^④層は5Y2/1黒色粘土層に第5層が混入する層であった。これら堆積土の土質観察から、^④層は井戸掘削の直後に堆積した層、^②～^③層は井戸機能時の堆積層、^①層は井戸廃絶時の埋土と見られる。土器の取り上げは^①層を上層、^②～^④層を下層として行なった。井戸の各層から多量の弥生土器が出土した。その年代観から、SE1は弥生時代中期後半ごろに埋没したことが知られた。

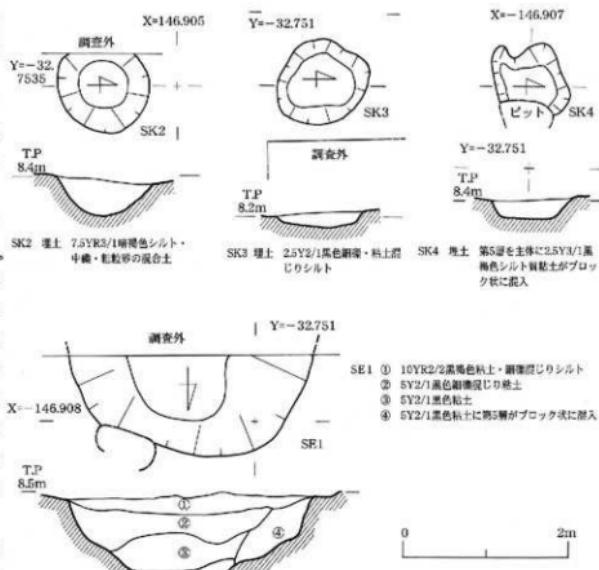
土坑は3基検出した。SK2は整円形を呈する。径1.10m、深さ48cmを測る。断面形は桶鉢状を呈する。埋土は7.5YR3/1暗褐色のシルト・中礫・粗粒砂の混合土であった。埋土の土質は他の造構と隔離し、また全く遺物を包含していないことから、土取り穴などの機能を考えられる。所属時期も古墳時代以降と推定される。

SK3は円形を呈する。径1.06m、深さ18cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は2.5Y2/1黒色細礫・粘土混じりのシルト層であった。弥生土器の細片が出土した。凹地内部で検出したため、古墳時代の所産である可能性が高い。

SK4は不整形を呈する。東側はSP9と切りあうため全形は不明。現存長で径0.92m、深さ27cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は第5層を主体に2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土がブロック状に混じる層である。弥生土器のほか、須恵器杯蓋が出土した(第75図)。土器の年代観から、古墳時代後期の所産と考えられる。

掘立柱建物・ピット

ピットの規模・埋土は別表のとおりである。埋土と出土遺物の組み合わせにより、その所属時期を考えてみたい。因みに、ピット内出土遺物の大半は中期の弥生土器であるが、造構面の検出面の状況からこれをそのまま該期の所産とみることはできない。造構面IIのピットをみると、まず埋土はA、B、C、D、E、Hの6種に区分される。このうち埋土Aのピットには確実に古墳時代の須恵器・土師器が



第5図 SE1・SK2～SK4実測図

伴っており、該期の所産と考えることができる。また埋土Dは凹地内部または周辺でのみ検出されており、これも古墳時代の蓋然性が高い。いっぽう、埋土Bは凹地の南側に分布し、確実に地山層である第5層上面で検出したものであるが、このピットと埋土と同じくするSK4から須恵器杯蓋の細片が出土している。従って埋土Bのピットを弥生時代の所産とすることも躊躇される。これらの検討を踏まえると、遺構面IIにあって弥生時代の所産と推定されるピットは埋土C、E、Hとなる。なお、SP25の底面には3cm大の礫が敷かれているのが認められた(図版3)。根固めの一種と思われる。

掘立柱建物(第4図)

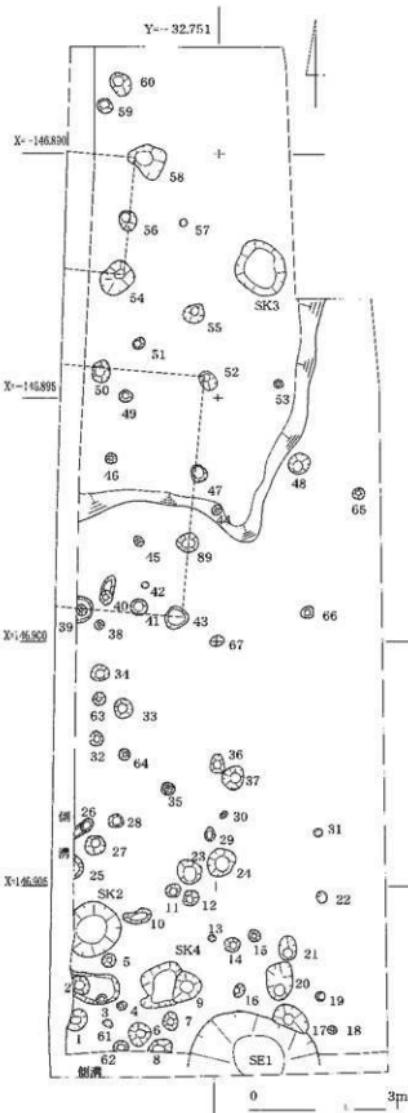
確実に古墳時代の所産である埋土Bのピットから掘立柱建物を2棟復元した。

掘立柱建物1は調査地中央に位置する。南北3間、東西1間以上の規模である。南北の柱間は、SP43-SP89-SP47は等間で1.5m、SP47-SP52は2.0mを測る。東西の柱間はSP50-SP52、SP39-SP43とも2.0mである。建物南北軸は、座標軸から東へ6°振る。柱掘形は円形が主体で、径40~50cm前後を測る。

掘立柱建物2は建物1の北約2.0mに位置する。東側2間の柱通りのみ検出した。柱間は等間で1.2mを測る。建物南北軸は建物1と共に通し、座標軸から東へ6°振る。柱掘形は隅の2箇所が大型で径70~80cmを測る。建物2は西側に延長すると考えられ全形は不明だが、建物1と比べて柱穴が大きいこと、柱間は短いことなどから、総柱建物で倉庫であった可能性が考えられる。

遺構面III(第7図)

調査地の北側、凹地内部で第4L層除去後、ピット21個、自然流路1条、落ち込み1箇所を検出した。これらは、検出面や出土遺物の点から、すべて弥生時代中期の所産と考えられる。



ピット

埋土は3種認められた。切り合うピットについては、埋土Hが旧、Fが新と2時期見られた。埋土Fのピットは、Gを埋土とする大型のSP80を中心に弧状を描くように分布するが、ピット深度の遺存状態が悪く、数cmのものが多くを占める。また東側にはピットが見られないため、豊穴住居址等の復元はできなかつた。ピットの中には、SP81のように内部に弥生土器の壺や甕が充填したものがあった(図版4)。柱穴以外の用途が窺われる。

自然流路

SD15は、東西方向の深い自然流路である。東端と西端で底面のレベル差は顕著ではない。西端で幅0.72m、深さ7cm、東端で幅1.25m、深さ11cmを測る。埋土は第4L層に砂屑が多く混入する層であった。遺物は出土しなかつた。



第7図 遺構面Ⅲ平面図
(数字のみはSP)

4) 出土遺物

弥生時代～中世期の上器がある。弥生土器、須恵器、真器、上師器などが出土した。各時代

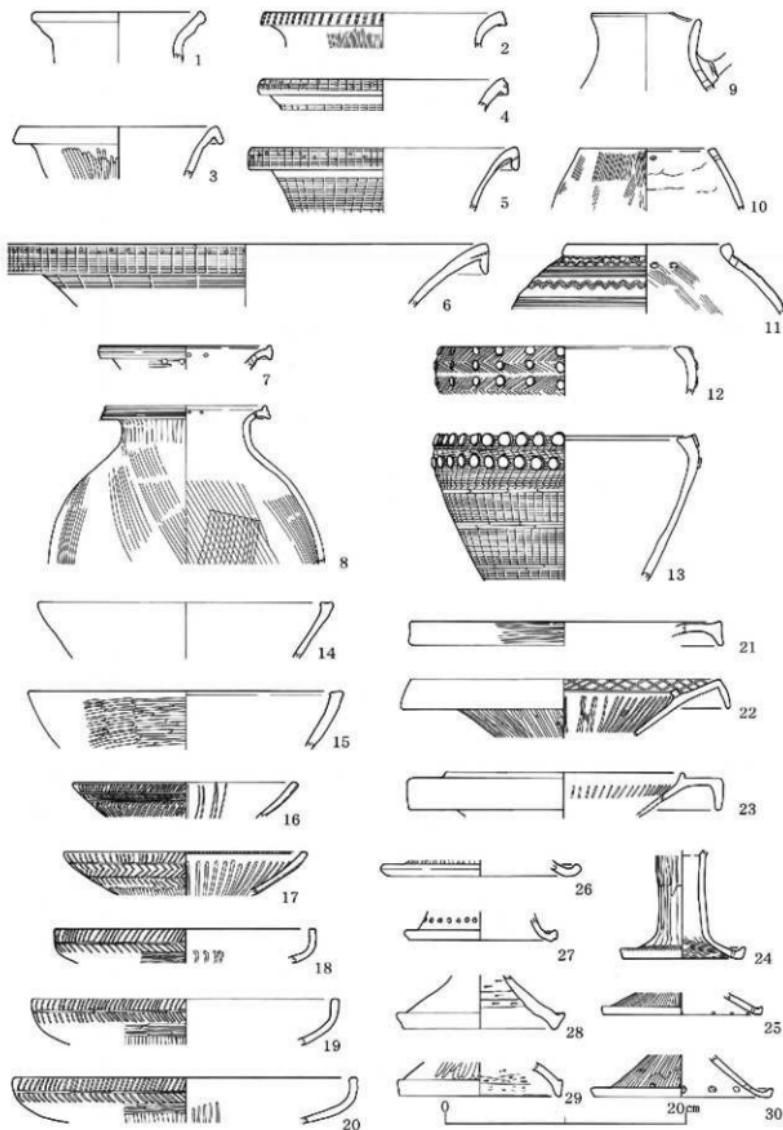
の遺構及び遺物包含層などに分けて記す。弥生土器は、胎土中に角閃石・石英・長石・雲母を含むものを生駒西麓産とする。それ以外は非河内産で記す。また、口縁部、裾端部のヨコナデ調整は普遍的なのであえて記さない。

(1) 遺構出土土器

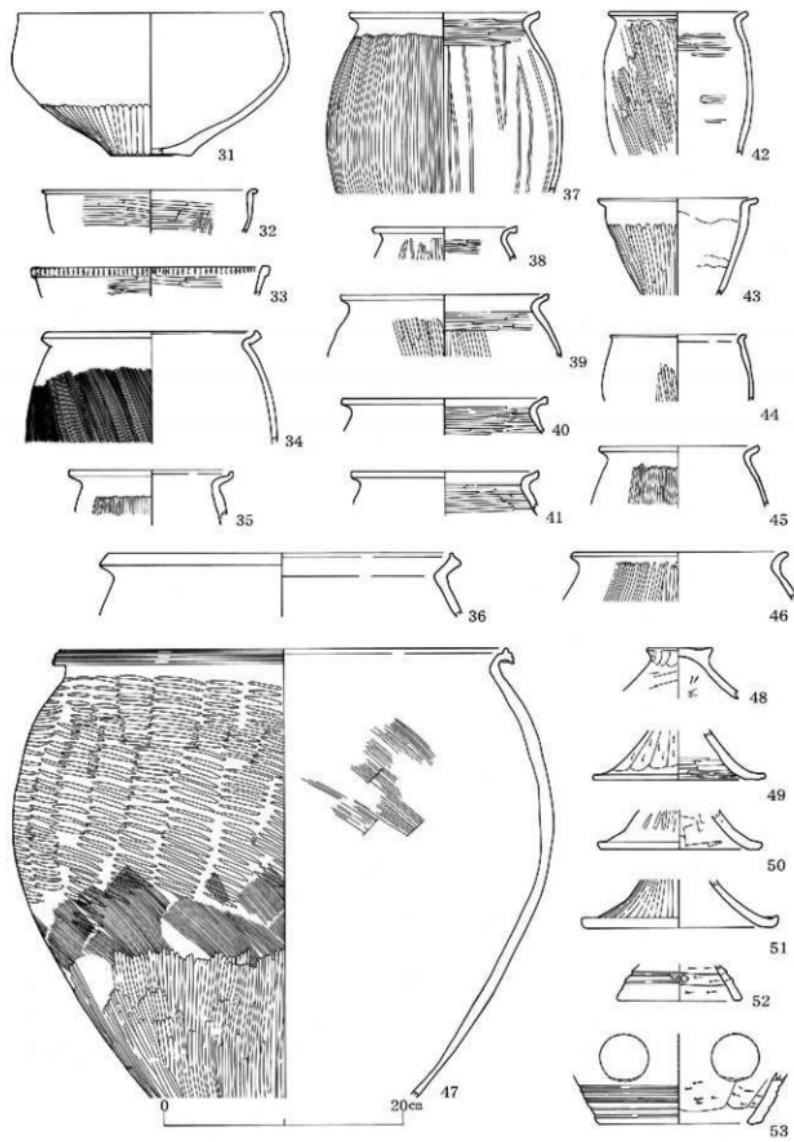
① 弥生土器

S E 1 (第8～10図1～63)

壺・水差形土器・無頸壺・細頸壺・高杯・壺蓋・鉢・甕・甕蓋・脚部・底部がある。1～8は壺である。1・2は口頭部が外反し、口縁端部は面を持つ。1は内外面をナデ調整する。2は口縁端部に櫛排列点文を施す。体部外面を7本/cmのハケメ調整する。3～6は口頭部が外反気味に立ち上がり、口縁端部を下方へ拡張する。3は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。4～6は口縁端部と体部外面向に櫛排列点文を施した後、口縁端部に円形刺突文を施す。内面はナデ調整する。7・8は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。8は体部が球形を呈する。口縁端部に凹線文を施し、口縁部に2ヶ1対の紐穴を穿つ。8は紐穴が貫通していない。7は口頭部をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。8は内外面を4本/cmのハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。2・8は非河内産、他は生駒西麓産。9は水差形土器である。口頭部がやや外反し、口縁端部は丸く終わる。欠損しているが把手を頭部に貼り付ける。把手側の口縁部にはゆるいU字形の切り込みを入れる。外表面はハラケズリ調整の後、ナデ調整する。内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。10・11は無頸壺である。体部から口縁部にかけて内傾する。10は口縁端部が面を持つ。口縁端部近くに紐穴



第8図 SE1出土土器実測図(1)



第9図 SE1出土土器実測図(2)

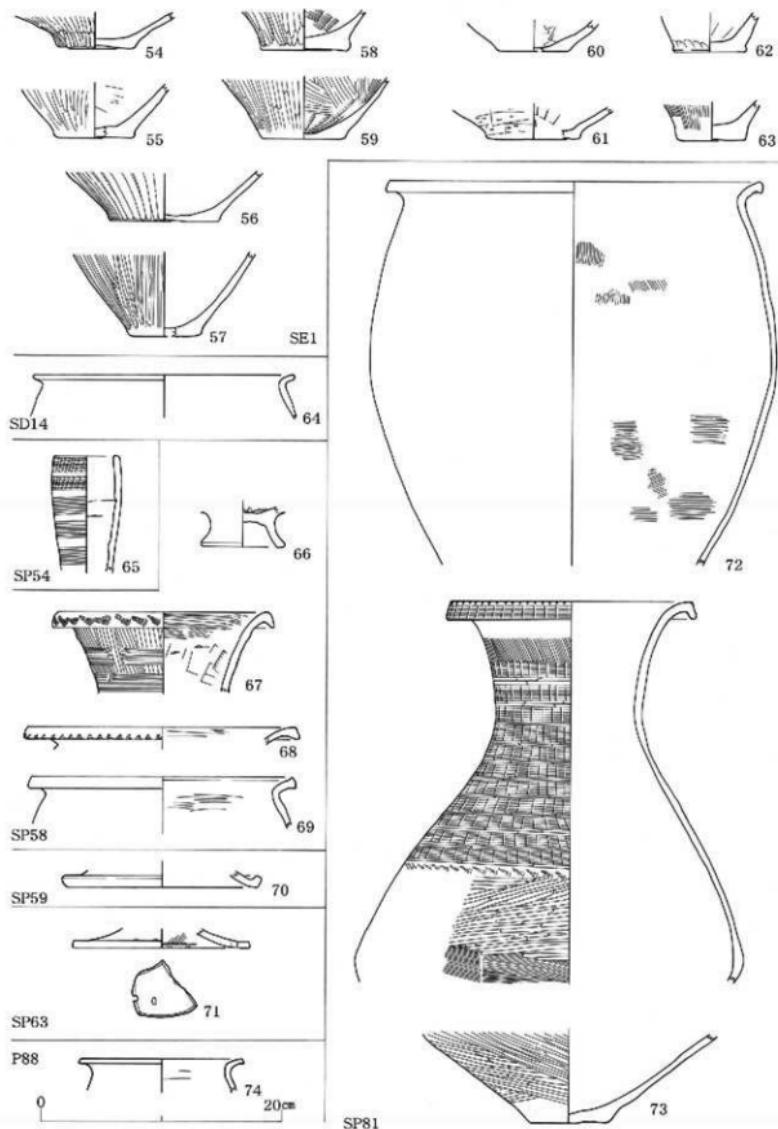
が1ヶ所確認できる。外面を8本/cmのハケメ調整し、内面はナデ調整する。内面に多くの接合痕が残る。11は口縁端部が段を持つ。口縁端部近くに2ヶ1対の紐穴を穿つ。体部外面に櫛描波状文と直線文を施す。内面を7本/cmのハケメ調整する。Ⅲ～IV様式。10は生駒西麓産、11は非河内産。12・13は細頸壺である。頸部が外上方へ伸びた後、口縁部が内傾する。口縁端部は水平方向へ面を持ち、内側にやや肥厚する。内面はナデ調整する。12は外面に刻み目による綾杉文を施し、円形浮文を貼り付ける。円形浮文は3列確認できる。13は外面上半に櫛描列点文、下半に簾状文を施す。口縁部外面に円形浮文を2列貼り付ける。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

14～29は高杯である。14～23は杯部である。14～17は体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら外上方へ立ち上がる。口縁端部は面を持つ。14は外面をナデ調整する。15は外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。内面に炭化物が付着する。18～20は中位で内折し、上方へ立ち上がる。口縁端部は面を持つ。16～20の外面は上半に刻み目による綾杉文を施し、下半をヘラミガキ調整する。内面は放射線状の暗文を施す。17は口縁端部内面に刻み目を施す。18・19は外面に黒斑がある。21～23は口縁部が水平方向または外上方へ伸びた後、口縁端部が長く垂下する。内面に1条の凸帯を廻らし、断面がコの字形を呈する。外面はヘラミガキ調整する。22は体部内面に7本/cmのハケメ調整の後、放射線状の暗文を施す。凸帯部の上下に刻み目を施し、口縁部上面に斜格子の暗文を施す。23は外面の調整が風化により不明である。内面は放射線状の暗文を施す。24～29は脚部である。裾端部を上方へ拡張するもの(24～28)と上下に肥厚するもの(29)がある。24は柱状部が筒状を呈し、中空である。裾部は柱状部からゆるやかに広がる。裾端部先端に刻み目を施し、裾部下方の6ヶ所に小円孔を穿つ。外面は柱状部から裾部にかけて5本/cmのハケメ調整し、裾部下半をヘラミガキ調整する。内面は柱状部をナデ調整、裾部を7本/cmのハケメ調整する。25は裾部下方に小円孔を穿つ。3ヶ所確認できる。27は裾部外面に竹管文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整するものが多い。28・29は内面をヘラケズリ調整する。Ⅲ～IV様式。21・29は非河内産、他は生駒西麓産。

30は壺蓋である。体部から口縁部にかけてハの字形に下方へ広がる。口縁端部は上方へ拡張する。口縁端部近くに2ヶ1対の紐穴を穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。口縁端部に煤が付着する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。31～33は鉢である。31は底部が平底である。底部から体部にかけて外上方へ開きながら張り、口縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁端部は水平方向へ面を持つ。体部外面下半はヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。体部外面に黒斑がある。32は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は短く外折する。口縁端部は丸く終わる。33は口縁端部に段を持つ。口縁端部内外面に櫛描列点文を施す。32・33は内外面をヘラミガキ調整する。外面に煤が付着する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

34～47は甕である。口縁部が大きく外反もしくは外折する。34～36は口縁端部を上方へ摘み上げ気味にやや拡張する。37～41・45・46は口縁端部が面を持つ。42～44は口縁端部が丸く終わる。外面をヘラミガキ調整するものが多い。34は外面を12本/cmのハケメ調整する。37～42は内面をヘラミガキ調整、34・35・43～46はナデ調整する。36は内外面の調整が風化により不明である。47は体部が上方で大きく張り、口縁端部を上下へやや拡張する。口縁端部に凹線文を3条施す。体部外面上半をタタキ調整する。その後、中位を8本/cmのハケメ調整し、下半をヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整の後、ナデ調整する。外面に煤が付着する。Ⅲ～IV様式。36・47は非河内産、他は生駒西麓産。

48～51は甕蓋である。48は口縁部を欠損する。体部はハの字形に下方へ広がる。つまみ部をユビオサエ調整する。体部外面と内面を板状工具によるナデ調整する。内外面に煤が付着する。49～51はつまみ部を欠損する。体部から口縁部にかけてやや外反しながらハの字形に下方へ広がる。口縁端部



第10図 SE1(3)ほか遺構出土土器実測図

が丸く終わるもの（49・50）と上方へ拡張するもの（51）がある。49は外面をヘラケズリ調整、内面をヘラミガキ調整する。50・51は外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。49・50は内面にリング状の煤が付着する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

52・53は脚部である。52は器種が不明である。53は台付無頸壺の脚部と考えられる。裾部がハの字形に伸びるもの（52）と外上方へ伸びるもの（53）がある。裾端部は面を持つ。内面はヘラケズリ調整する。52は外面に凹線文を2条廻らす。小円孔を穿つ。1ヶ所確認できる。53は外面に凹線文を6条廻らす。大きめの円孔を穿つ。1ヶ所確認できる。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

54～63は壺もしくは甕の底部である。底部は平底である。風化しているものもあるが外面をヘラミガキ調整するものが多い。63は外面を7本/cmのハケメ調整する。内面は板状工具によるナデ調整する。58は内面を7本/cm、59は内面を4本/cmのハケメ調整する。63は底部に木葉痕が残る。外面に煤が付着する。Ⅲ～IV様式。56・59・60は非河内産、他は生駒西麓産。

S D14 (第10図64)

64は甕の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面の調整は風化により不明である。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

S P54 (第10図65)

65は細頸甕の口頭部である。口頭部はわずかに内弯しながら上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。外面に2帯の櫛描簾状文と3帯の直線文を施す。内面はナデ調整する。内面に接合痕が残る。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

S P58 (第10図66～69)

66は脚部である。器種は不明である。脚部は短く、あまり広がらずに裾部へ伸びる。裾端部は丸く終わる。脚部内外面はナデ調整する。見込み部は板状工具によるナデ調整する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。67・68は甕である。67は口頭部が外反気味に立ち上がり、口縁端部は下方へ拡張する。口縁端部に櫛描扇形文を施す。口頭部外面は3本/cmのハケメ調整の後、直線文を施す。内面は上半をハケメ調整、下半を板状工具によるナデ調整する。68は口縫部が大きく外反し、口縁端部はやや下方へ拡張する。口縁端部に刻み目を施す。内面は8本/cmのハケメ調整する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。69は甕の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はナデ調整、体部内面は7本/cmのハケメ調整する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

S P59 (第10図70)

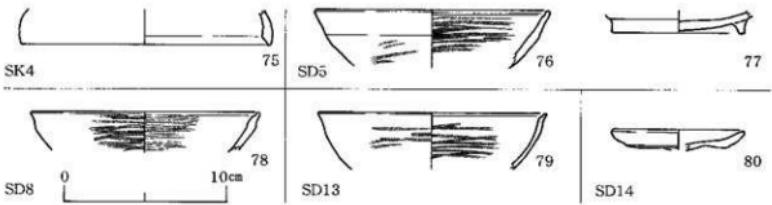
70は高杯脚部である。裾端部は上方へ拡張し、面を持つ。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

S P63 (第10図71)

71は壺蓋である。ゆるやかにハの字形に広がる。裾端部は丸く終わる。2ヶ1対の紐穴を穿つ。外面の調整は風化により不明である。内面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。

S P81 (第10図72・73)

72は甕である。体部は中位で大きく張り、口縁部は大きく外反する。口縁端部は下方へやや肥厚する。外面の調整は風化により不明である。内面は6本/cmのハケメ調整の後、ナデ調整する。Ⅲ～IV様式。生駒西麓産。73は甕である。接合できないが底部と体部上半がある。同一個体と考えられる。底部は平底で、体部は下方で大きく張る。口頭部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は下方へ拡張する。体部外面中程に櫛描扇形文を施し、その上部から口頭部にかけて11帯の簾状文を施す。文様帶間を研磨する。口縁端部は簾状文と刻み目を施す。口縁部外面は7本/cmのハケメ調整する。体部下方はハケメ調整の後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。外面に煤が付着する。Ⅲ～IV様式。



第11図 遺構出土土器実測図

生駒西麓産。

SP 88 (第10図74)

74は甕の口縁部である。口縁部は大きく外反し、口縁端部はやや面を持つ。内面は板状工具によるナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

② 古墳時代以降の土器

古墳時代～中世期の土器がある。須恵器、土師器、瓦器などが出土した。

SK 4 (第11図75)

75は須恵器の蓋杯である。口縁部はゆるやかに内弯し、口縁端部が尖り気味に終わる。内外面を回転ナデ調整する。古墳時代後期。

SD 5 (第11図76・77)

76・77は瓦器の椀である。76は底部を欠損する。体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がる。口縁端部内面に沈線を廻らす。いわゆる大和型である。内外面を粗いヘラミガキ調整する。77は底部である。底部に断面が台形の高台を貼り付ける。内外面の調整は風化により不明である。いぶしは悪い。12世紀前半～中葉。

SD 8 (第11図78)

78は瓦器の椀である。底部を欠損する。体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がり、口縁部がやや外反する。口縁端部内面に沈線を廻らす。内外面を粗いヘラミガキ調整する。いぶしは悪い。12世紀代。

SD 13 (第11図79)

79は瓦器の椀である。底部を欠損する。体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がり、口縁部がやや外反する。口縁端部内面に沈線を廻らす。内外面を粗いヘラミガキ調整する。いぶしは悪い。12世紀前半～中葉。

SD 14 (第11図80)

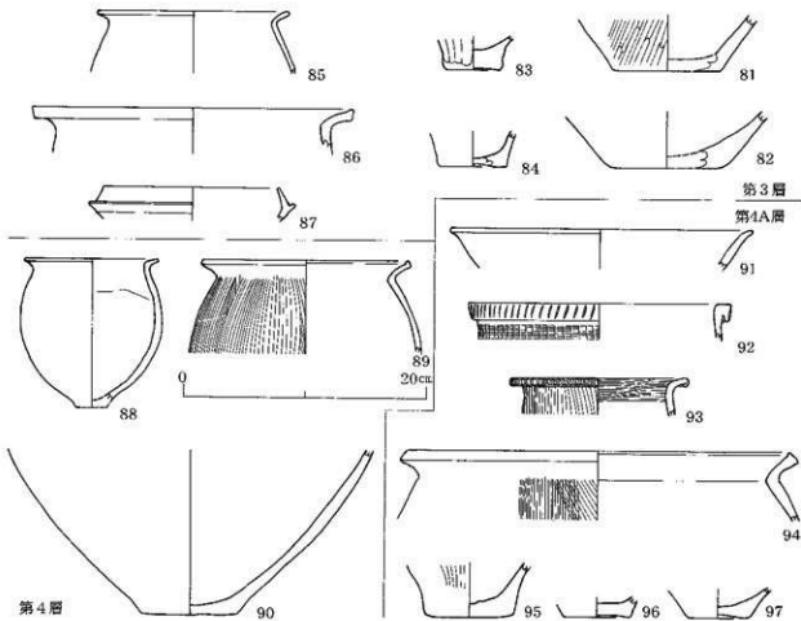
80は土師器の小皿である。口径8.0cmを測る。体部から口縁部にかけて外に開き気味に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面をヨコナデ調整、他をナデ調整する。13世紀代。

(2) 遺物包含層出土土器

第3層 (第12図81～87)

弥生土器と須恵器がある。弥生土器には底部・甕がある。

81～84は甕もしくは甌の底部である。底部は平底である。81・83は外面をヘラミガキ調整する。83は内面をナデ調整する。81の内面、82・84の内外面は風化により調整が不明である。Ⅲ～Ⅳ様式。82は非河内産、他は生駒西麓産。85・86は甕である。口縁部が大きく外反する。85は口縁端部が丸



第12図 第3・4・4A層出土土器実測図

く終わる。86は口縁端部が面を持ち、上方へ摘み上げ気味にやや拡張する。内外面の調整は風化により不明である。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

87は須恵器の杯である。受部は外上方へ短く伸びる。立ち上がり部は比較的長く、わずかに内傾しながら立ち上がる。内外面を回転ナデ調整する。古墳時代後期。

第4層（第12図88～90）

壺・底部がある。

88・89は壺である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。88は口縁端部が丸く終わる。外面の調整は風化により不明である。内面はナデ調整する。内面に接合痕が残る。89は口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。外面は4本/cmのハケメ調整する。内面はハケメ調整の後、ナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。90は壺もしくは壺の底部である。底部は平底である。底部から体部にかけて外上方へ大きく張る。内外面の調整は風化により不明である。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

第4-A層（第12図91～97）

91・92は鉢である。91は体部から口縁部にかけて外上方へ伸び、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面をナデ調整する。92は口縁部が大きく外折し、口縁端部を下方へ拡張する。体部に櫛挂摩状、口縁端部に列点文を施す。内面の調整は風化により不明である。91はⅡ様式、92はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。93・94は壺である。93は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は下方へ肥厚気味に終わる。口縁端部に刻み目を施す。体部外面と口縁部内面を4本/cm

のハケメ調整する。94は口縁部が外折する。口縁端部が面を持ち、上方へ摘み上げ気味にやや拡張する。体部外面は5本/cmのハケメ調整する。内面の調整は風化により不明である。93はII様式。非河内産。94はIII～IV様式。生駒西麓産。95～97は壺もしくは甌の底部である。底部が平底のもの（95・96）とやや上げ底のもの（97）がある。95は外面を7本/cmのハケメ調整の後、ナデ調整する。底部に木葉痕が残る。96・97は内外面の調整が風化により不明である。III～IV様式。生駒西麓産。

5)まとめ

今回の調査では、弥生時代中期の土器が主に出土したが、少量の須恵器が見られることにより、古墳時代の遺構が介在する。このことは、遺構面IIで検出したピットのうち、土色・土質と川土遺物の検討から、大半が古墳時代のもので占めることによって明らかとなった。ここでは、西ノ辻遺跡第45次調査（以下、第45次調査などと略記）や第42次調査の成果を踏まえて、まとめとしておきたい。

（1）古墳時代の遺構

今回の調査地から東へ60mの地点である第45次調査^{*}では、調査地西側のトレントのうち、該期の遺構として、北端部と中央部で各々溝1条と掘立柱建物1棟が確認された。溝の全形は不明だが、幅1m、深さ0.3mを測る。掘立柱建物は南北2間、東西2間で柱間1間は1.6mを測る。建物を構成するピットは長軸0.7m、短軸0.5mの不整円形ないし隅丸方形で深さは0.3～0.4mであった。柱列の南北方向の方位は座標軸より[†] 東に据る。出土遺物から、溝・掘立柱建物とともに5世紀後半から6世紀初頭ごろ埋没されたと推定されている。

いっぽう、第42次調査^{**}では、北トレントのI～J地区で落ち込みと井戸、南トレントのE地区で掘立柱建物が検出された。いずれも出土遺物から古墳時代後期の所産と推定されている。とくに落ち込みと井戸は、第42次調査地の西端部にあたり、今回の調査地の東辺に近接する。ところが、第2系でみたように、鬼虎川遺跡第59次調査地では、明確な古墳時代の遺構は確認されておらず、古墳時代集落は東西で100m内外の範囲に収まる。小規模な集落が営まれたことが窺われる。

（2）SE1とその出土土器

SE1は調査地南端で検出した素掘りの井戸である。今回の調査では一括遺物に乏しいところから、SE1出土上器を手掛りに弥生時代遺構の年代観を考えていきたい。

甌（第9図47）は胎土から非河内産と考えられる。口縁部外面に凹線文が3条施されるが、外面胴部上半にタキ、中位に左上がりハケメ、下位に縦位ヘラミガキが施される。内面胴部上半には左上がりハケメが施される。胎土や調整法から大和產の搬入土器と考えられる^{***}。外面胴部下半にヘラミガキが残存することはIII様式の範疇で捉えられる。いっぽう、口縁端部は上下に拡張して明瞭な凹線文が見られることから、IV様式の特徴を併せ持つ。2つの様式の折衷土器であり、IV様式初頭の年代観が与えられよう。このことから他の土器を見ると大きな矛盾はなく、一部II様式土器の混入品を除くと、概ねIV様式の範囲で捉えられる。弥生時代の遺構は中期後半に位置づけられるものと考えられる。

* 財團法人東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡第45次発掘調査報告書』、2003年。

** 東大阪市教育委員会『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告書』、2001年。

*** 大和弥生文化の会『奈良県の弥生土器集成』、2003年。

第1表 西ノ辻遺跡第47次調査ピット一覧表

遺構名	遺構面	平面形態	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土	弥生	出土遺物		時期不明
								須恵器	古墳	
SP 1	II	横円形	42+	36	18	C				○
SP 2	II	横円形	102+	61	20	B				
SP 3	II	円形	23	21	12	A				
SP 4	II	横円形	21	16	5	C				
SP 5	II	円形	28	27	21	C	○中期			
SP 6	II	円形	48	47	26	A				○
SP 7	II	横円形	37	30	61	A	○中期			○
SP 8	II	円形	45	27+	46	A	○			○
SP 9	II	不整円形	42	39	40	A	○中期			○
SP 10	II	横円形	58	27	15	C				
SP 11	II	円形	30	27	19	B				
SP 12	II	円形	30	30	21	B				○
SP 13	II	円形	10	10	4	C				
SP 14	II	円形	30	28	28	B				
SP 15	II	円形	23	23	10	C				
SP 16	II	横円形	30	19	13	A	○中期			○
SP 17	II	横円形	73	33+	15	B				
SP 18	II	横円形	17	17	7	C				
SP 19	II	円形	18	18	18	C				
SP 20	II	横円形	74	57	4	C	○中期			○
SP 21	II	横円形	50	35	26	A				
SP 22	II	円形	27	22	6	E				
SP 23	II	円形	47	47	26	B	○中期			
SP 24	II	円形	57	57	46	E				○
SP 25	II	円形	43	17+	23	A				○
SP 26	II	横円形	50	23	9	A				○
SP 27	II	円形	29	29	11	A	○中期			
SP 28	II	円形	26	26	13	A				
SP 29	II	円形	28	24	6	C	○中期			
SP 30	II	円形	15	12	2	C				
SP 31	II	円形	20	20	6	C				
SP 32	II	円形	30	28	9	B				
SP 33	II	円形	41	39	16	B				○
SP 34	II	円形	34	32	18	A	○中期			
SP 35	II	円形	25	24	11	B				
SP 36	II	横円形	41	30	21	E				○
SP 37	II	円形	48	46	17	B				○
SP 38	II	円形	21	19	26	C				○
SP 39	II	円形	52	34+	13	A	○中期	○	○	○
SP 40	II	横円形	60	27	28	A				○
SP 41	II	円形	32	30	7	C				
SP 42	II	円形	12	12	12	C				○
SP 43	II	円形	45	45	15	A				
SP 44	II	円形	21	21	17	B				
SP 45	II	円形	21	20	10	C				
SP 46	II	円形	21	21	19	A				○
SP 47	II	円形	30	27	12	A				○
SP 48	II	円形	42	38	14	D				
SP 49	II	円形	25	25	23	D	○中期			
SP 50	II	横円形	46	37	23	A				

遺構名	遺構面	平面形態	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土	弥生	出土遺物		時期不明
								古墳 須恵器	土器	
SP 51	II	円形	28	20	26	D				
SP 52	II	円形	42	34	11	A				○
SP 53	II	円形	18	18	13	A				○
SP 54	II	不整円形	72	55	26	A	○中期			
SP 55	II	円形	42	36	19	A	○中期			
SP 56	II	円形	40	37	36	A	○中期			
SP 57	II	円形	15	15	12	A				
SP 58	II	不整円形	80	65	38	A	○中期			
SP 59	II	円形	30	30	27	D	○中期			
SP 60	II	円形	50	40	38	D	○中期			
SP 61	II	円形	20	15	6	C				
SP 62	II	円形	27	19+	4	C				
SP 63	II	円形	25	25	11	B	○中期			
SP 64	II	円形	22	20	7	B				
SP 65	II	円形	24	24	13	H				
SP 66	II	円形	26	24	22	B				○
SP 67	II	楕円形	30	19		B				
SP 68	III	円形	21	21	15	H	○中期			
SP 69	III	楕円形	47	23	8	G				
SP 70	III	円形	15	15	7	F				
SP 71	III	円形	20	18	7	F				
SP 72	III	円形	33	28	7	F				
SP 73	III	円形	13	13	8	F				
SP 74	III	楕円形	33	18	9	F				
SP 75	III	楕円形	32	19	7	F				
SP 76	III	円形	22	21	8	H				
SP 77	III	円形	23+	21	2	F	○中期			
SP 78	III	円形	25+	21	3	H				
SP 79	III	円形	33	30	6	G				
SP 80	III	楕円形	69	53	10	G	○中期			
SP 81	III	円形	53	47	11	G				
SP 82	III	円形	22	20	5	H				
SP 83	III	円形	21	20	5	F				
SP 84	III	円形	27	23	5	F				
SP 85	III	円形	21	20	15	F				
SP 86	III	円形	37	37	8	F				
SP 87	III	円形	34+	21	9	H				
SP 88	III	楕円形	40	31	20	H	○中期			
SP 89	II	円形	42	40	34	A				

「埋土」 A:第5層に2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土がブロック状に混入
 B:第5層に10YR2/1黒色粘土がブロック状に混入
 C:10YR2/3黒褐色粗粒砂混じりシルト
 D:第4層に10YR3/1黒褐色粘土がブロック状に混入
 E:第5層に10YR2/3黒褐色シルトがブロック状に混入
 F:10YR4/1黒褐色砂混じりシルト
 G:10YR4/4黒褐色シルト混じり粘土と5Y2/1黒褐色砂混じりシルトの混合土
 H:7.5Y2/1黒褐色砂混じり粘土

図版1 西ノ辻遺跡第47次調査

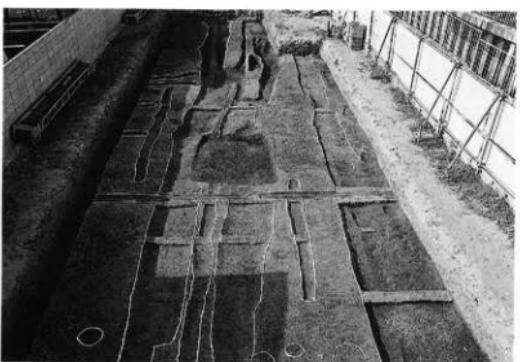
遺構



調査前の状況
(北より)



遺構面I 遺構検出状況
(北より)



遺構面I 遺構掘削後状況
(南より)



SD5検出状況（南より）



遺構面II遺構検出状況全景
(南より)



遺構面II遺構掘削後状況全景
(南より)

図版3 西ノ辻遺跡第47次調査
遺構



図版
4

西ノ辻遺跡第47次調査

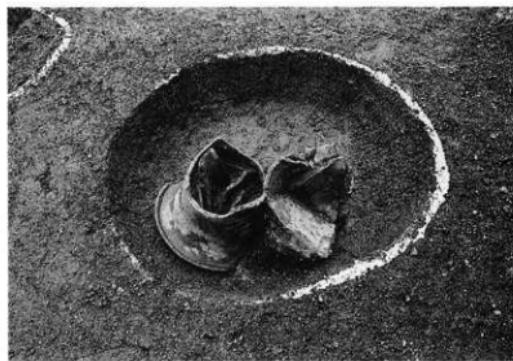
遺構



遺構面Ⅲ遺構検出状況全景
(北より)



遺構面Ⅲ遺構掘削後状況全景
(北より)



遺構面ⅢSP81土器出土状況



遺構面II SE1掘削後状況



遺構面II SE1断面近景



南壁・西壁断面



西壁断面



43



47



31



90

SE1出土弥生土器鉢・甕 第4層出土弥生土器底部



24



25



24'



73



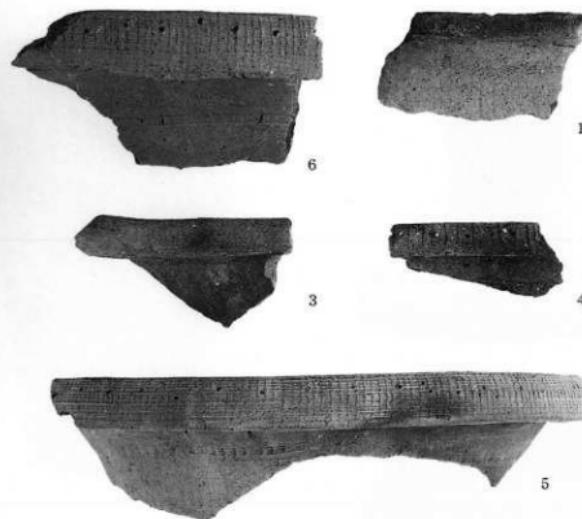
72



73'

SE1出土弥生土器高杯 SE54出土弥生土器細頸壺 SP81出土弥生土器甕・蓋

圖版 8
西ノ辻遺跡第47次調査
遺物

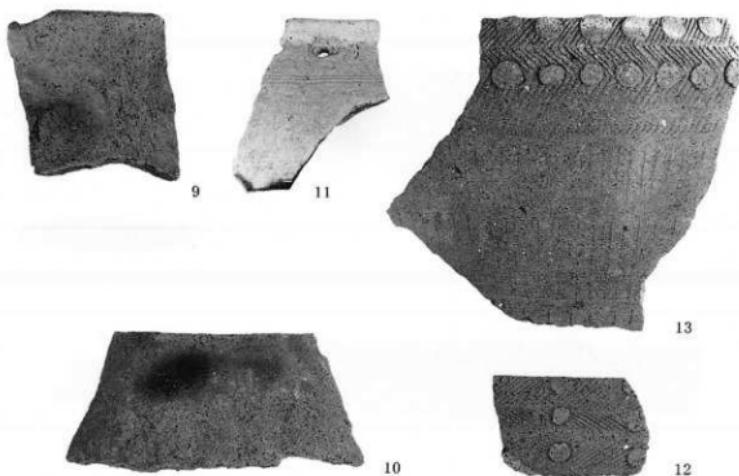


SE1出土弥生土器壺

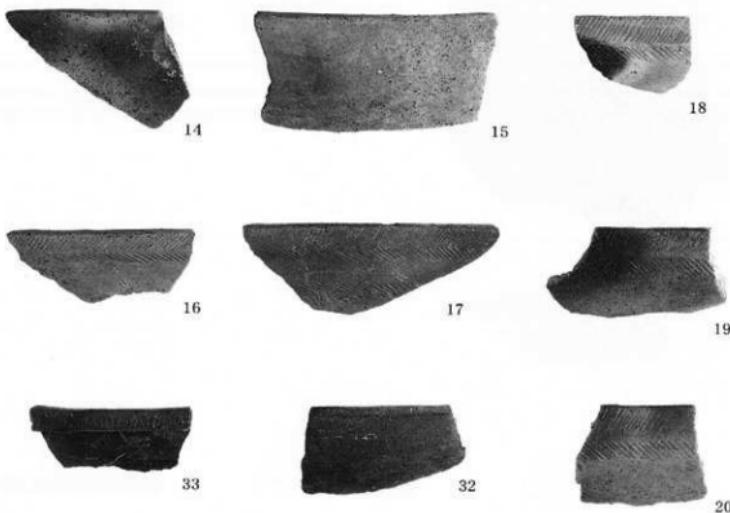


SE1出土弥生土器壺

図版9 西ノ辻遺跡第47次調査 遺物



SE1出土弥生土器水差形土器・無頸壺・細頸壺



SE1出土弥生土器高杯・鉢



22



21



26

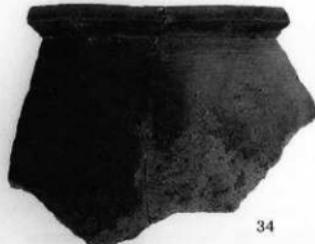


23



27

SE1出土弥生土器高杯



34



45



35



40



38



25



29

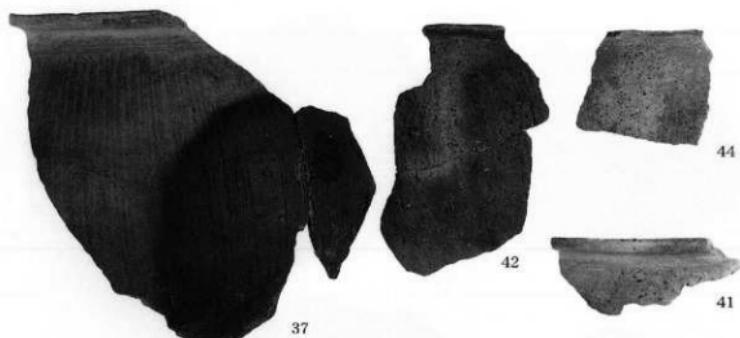


28

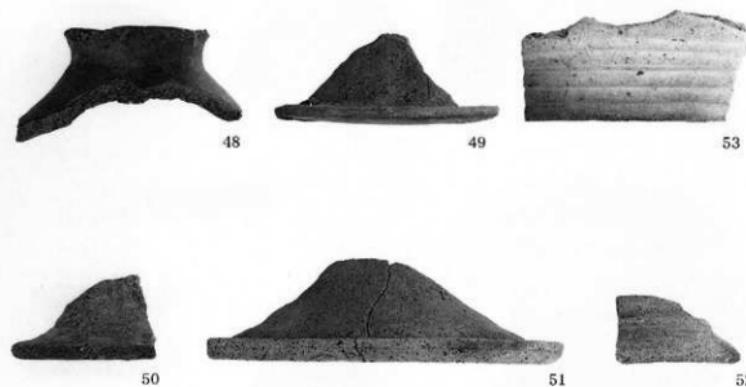


30

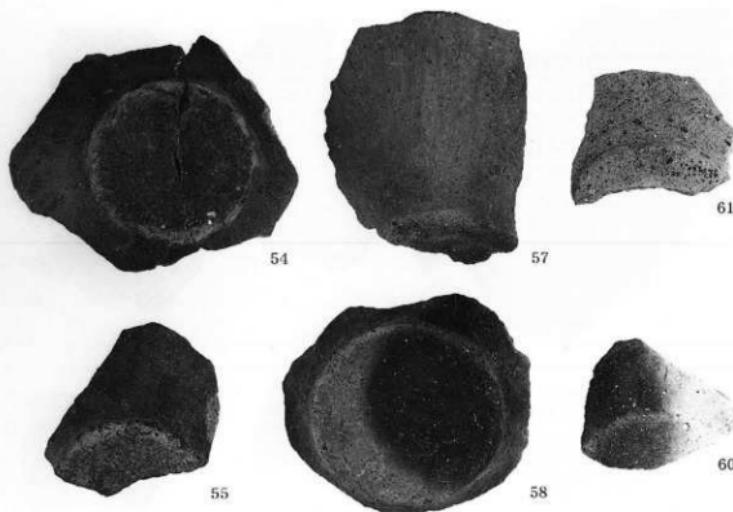
SE1出土弥生土器高杯・壺蓋・甕



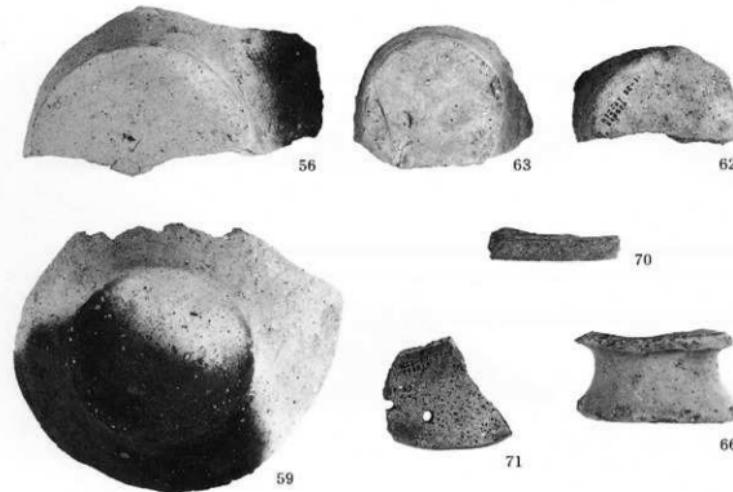
SE1出土弥生土器



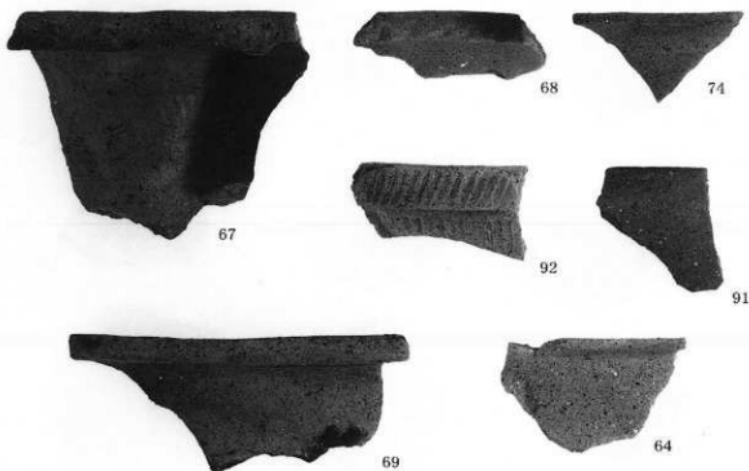
SE1出土弥生土器蓋・脚部



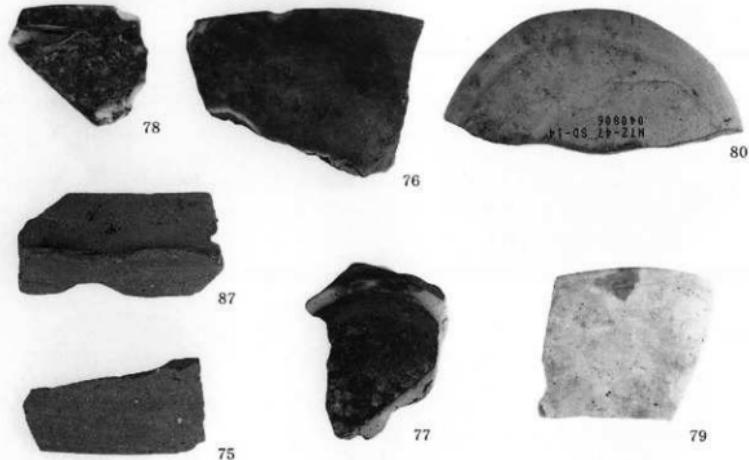
SE1出土弥生土器底部



SE1出土弥生土器底部 SP58出土弥生土器脚部 SP59出土弥生土器高杯 SP60出土弥生土器蓋



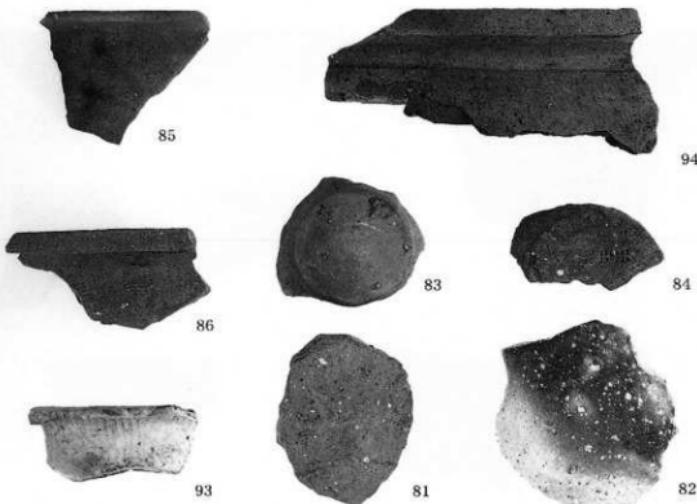
SD14出土弥生土器甕 SP58出土弥生土器壺・甕 SP88出土弥生土器甕 第4 A層出土弥生土器鉈



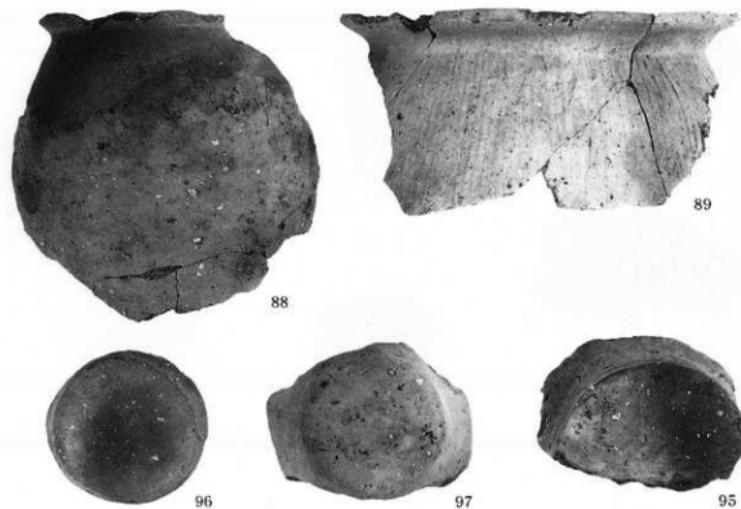
SK4出土須恵器蓋杯 SD5出土瓦器椀 SD8出土瓦器椀 SD13出土瓦器椀 SD14出土師器小皿
第3層出土須恵器杯

圖版
14

西ノ辻遺跡第47次調査
遺物



第3層出土弥生土器表・底部 第4A層出土弥生土器表



第3層出土弥生土器表 第4A層出土弥生土器底部

第6章 河内寺跡第11次発掘調査

1) はじめに

河内寺跡は、東大阪市河内町に所在する古代寺院跡である。寺院は飛鳥時代後期に創建され、鎌倉時代後期まで存続したと考えられてきた。河内直(連)氏一族の氏寺として建立されたのち、河内国河内郡の都寺(郡名寺院)として法灯を伝えている。寺院跡は生駒山地西麓の傾斜地、扇状地扇央部に立地する。標高は27m前後を測る。

河内町443番地に所在する宅地は、周囲の水田・宅地より一段堆く土盛りがなされ、土壇状の高まりが遺存する。周辺は、幕末期に地元喜里川村の豪農で文人であった中西多豆伎により軒丸瓦が採集され、「此ノ瓦ハ(中略)往昔河内寺ノ瓦ナラン」(傍点筆者)との付箋があり、江戸時代末期には寺院址として知られていたことがわかる。下って大正末年には片岡英宗氏により廃寺がまとめられ⁶、その中で、

河内守 河内

村の西北に字河内寺あり。その地一畝余にして土地自ら高く、伝えて伽藍の址と云ふ。その附近の田圃より多く古瓦破片發掘せらる。当寺は行基の開基にて巨刹なりしが、南北朝以降屢兵火に災せられ、遂に天正の頃ほび廃滅せしなりと云ふ。(傍点筆者)



第1図 河内寺跡と周辺の遺跡

* 片岡英宗『中河内郡廃寺』、自費出版、1924年。なお、用字は新字体に改めた。

において、個人住宅の建設が予定された。予定の建築物の西柱通りには鋼管杭、南側前面には掘り込み式のガレージが計画されたことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、事前の確認調査を行なうこととなった。調査は平成16年2月23日に実施した。その結果、試掘坑で倒柱と思われる礎石1個を確認したほか、地表面0.3mで夥しい瓦が出土した。建築主及び代理者と協議を進め、事前の発掘調査を実施することで双方合意した。調査は平成16年3月4日から3月31日まで、平成16年4月1日から4月30日まで、5月21日、12月24日に行なった。調査の経過は別項参照。

2) 河内寺とその周辺の遺跡(第1図)

現在の東大阪市東部は、古代の河内国河内郡にあたる。河内寺は河内郡の中央南寄りに位置する。ここでは、周辺の遺跡について古代～中世期に絞って見ていきたい。

河内寺の北に接して皿池遺跡がある。この遺跡は以前から河内郡の都街跡に推定されてきた。現在まで都街跡の微訛となる建物などは検出されていないが、飛鳥時代から平安時代の遺物や小規模な掘立柱建物などが発見されている。後述のように寺院の下層には古墳時代中期後半の遺物包含層が認められることから、該期の集落が周辺に広がることが予想される。なお、河内寺、皿池遺跡の周辺は『和名類聚抄』に見える河内郡の大宅郷に比定されている。

次に、河内町458番地で小型低方墳の周溝の一部が発見された(河内寺跡第7次調査)。「皿池占墳」と命名されている。周溝の内部から家型埴輪、朝顔型埴輪、備式系土器とともに全形が知られる5世紀後半の舟形埴輪が出土した”。下層集落や居住氏族を考えるうえで重要な資料となろう。

東方に客坊山遺跡群がある。客坊山古墳群・客坊庵寺・客坊城跡の複合遺跡である。客坊庵寺は平安時代後期に浄土教の広がりとともに建てられた山岳寺院である。客坊庵寺と同範の軒丸瓦が河内寺から出土しており、中世期の河内寺の様態を考える上で大きな課題を内包する。

3) 既往の調査成果(第2図)

片岡氏の庵寺紹介から昭和を通じて、河内寺の存在は広く知られるようになったようである。その発端は、土地の耕作・開墾時に多量に出土する瓦によるものであった。昭和30年代から調査地周辺では瓦の採集が行なわれている。また近鉄奈良線に近く宅地開発も盛んに行なわれるようになり、不時に遺跡が破壊されることが懸念された。このような事態に対処するため、寺域の確認調査が必要となつた。調査は1967年11月、国庫補助事業により大阪府教育委員会の担当で実施された(第1次調査)。調査の結果、今回の第11次調査地を中心に3つの基壇が南北方向に連なっていることが確認された。そこで河内寺は南北向の四天王寺式伽藍配置をとることが予想された。

ところが寺院内部の宅地開発はさらに進行した。そこで、特に第1次調査では未着手であった東方部について遺構確認調査が急がれることとなった。調査は1973年1月から東大阪市教育委員会の担当で実施された(第2次調査)。その結果、南北に延び、柱間2.95mを測る單廊式の東回廊を検出した。東回廊は第11次調査地の南面道路付近で1間分西に折れるとされ、第11次調査地に所在する堂塔との取り付きが問題となつた。

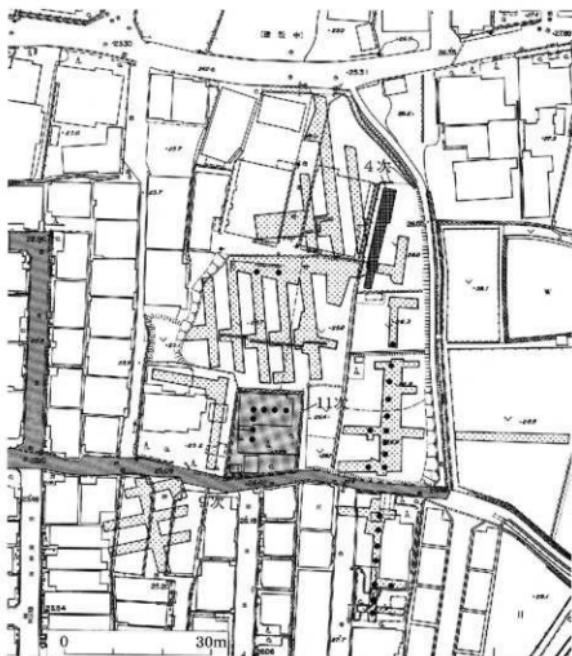
第1次調査検出の堂塔の北側水田で住宅建設が行なわれた際、水田の石垣を掘削したところ、その内部に東西方向に一直線に並ぶ石列が発見された。この石列は堂塔の一部と考えられたため、急速発掘調査を実施した(第3次調査)。調査の結果、推定どおり堂舎の北側基壇であることが判明し、基壇の北西コーナーを検出したことから堂舎の規模がほぼ推測できるようになった。第1次～第3次調査を通じて、河内寺は四天王寺式伽藍配置をとり、第11次調査地は金堂跡と推定されるに至つた。この点については別項で再検討したい。

** 上野利明「東大阪市河内町所在皿池古墳出土の舟形埴輪について」(『宗教と考古学』、勉誠社、1997年。)

第11次調査地の南面道路については、平成13年度に公共下水道工事に伴って、調査が実施されている(第9次調査)。調査では明確な遺構は検出されなかったが、白鳳時代、鎌倉時代の軒瓦ほか多量の遺物が出土した。これは第11次調査地に伽藍の堂塔が所在することを暗示するものであった。

したがって、今回の調査ではその成果によって、調査地での堂塔の性格確定とそれに伴う伽藍配置の検討が期待されるところとなつたのである。

4) 調査の方法と経過
確認(試掘)調査で側柱と思われる礎石を1基検出したため、伽藍堂塔の遺構が良好に遺存していることが予想された。発掘調査は、確認調査で検



第2図 河内寺跡調査トレンチ位置図
(次数を記していないものは第1～3次)

出した礎石を基軸にして、そこから南北・東西に調査トレンチを拡張する方法で進めた。確認調査の礎石は調査地の南西側に偏っており、今回は概ね西半部を発掘したことになる。層位で記すように、表土を除去すると、堅い瓦礫層が露出することから、礎石上面(第3層上面)までは、まず重機で瓦礫層を崩し、人力で遺物を探集しつつ掘り下げる方法をとった。また、以前の調査では地区の設定など必ずしも明確でなかったため、今回の調査では基準杭測量を実施した。基準点測量は株式会社イシヤマエンジニアリングに委託の上、実施した。また後記の塔跡平面図および基壇立面図については空中写真測量を行なった。空中写真測量は株式会社アコードに委託し実施した。さらに調査地が土壇を呈していたため、排土の仮置には限界があった。近隣への土砂流出を事前に防ぐためにも排土の処分が必要となつた。排土処分は安西工業株式会社に委託して実施した。

次に、発掘調査は文化庁および大阪府教育委員会の指導のもとに行なつた。調査着手後ほどなく調査地が塔跡であることが判明し、地権者と遺構保存について協議する必要が生じた。このため、礎石抜取穴は半裁するなど掘削は最小限に抑えた。また階段部の調査中で保存協議のため中断した。心礎も確認のため、四天柱の中間にトレンチを設定したが、1.5mまで掘り下げて時点で中断した。したがつて本報告は中間報告にとどまるものであり、調査成果のまとめについてはごく一部とし、事実報告を中心記述を行なうこととする。

5) 層位(第3図)

調査で検出した土層は以下のとおりである。

第1層 現代の盛土。西壁断面を基本層序としたため、第1層の層厚は大きいが、東側の側柱礎石通りでは現地表下-0.1mで後述の第2層に達していた。

第2層 挙大の礎の層間に多量の瓦片を含む層。文字通り、「瓦礎層」といえる。礎の混入の度合により、上下の2層に細分できた。

第2a層 2.5Y3/2黒褐色中礎混じりシルト。下部の第2b層に比べて礎の混入がやや疎らで、礎間の夾雜物がシルト～細粒砂層。飛鳥～奈良時代の瓦を主体に、微量の近世期の陶磁器片を含む。江戸時代の盛土層である。

第2b層 7.5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルト。礎混入は密で、夾雜物は粗粒砂ないし細礎層。飛鳥～奈良時代の瓦を主体に、中世期の遺物と近世期陶磁器を含む。室町時代中期～江戸時代の盛土層。

第3層 2.5Y3/3暗オリーブ灰色シルト・5Y4/2～2.5Y4/2灰オリーブ色～暗灰黄色シルトで粗粒砂～細礎を含む。基壇上部では第2層の下層、上成基壇では上部を広く覆う。次の各層がある。

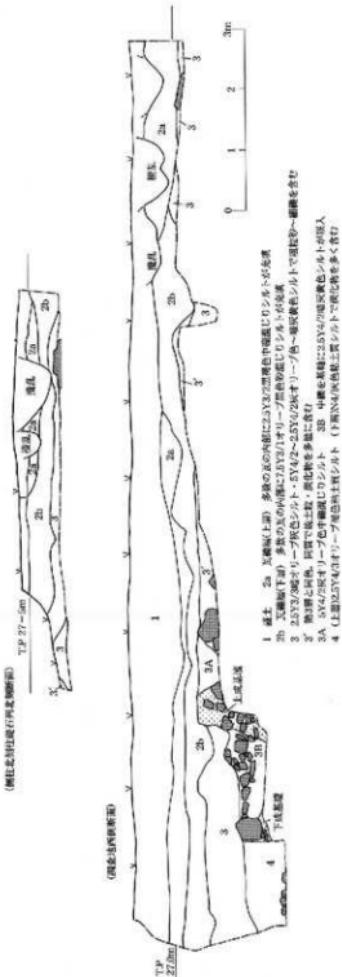
第3'層 基壇上部で第3層の上面に介在し、焼土粒や炭化物を多量に含む層。基部になる土質は第3層と同一であるため第3'層としている。後記の中世仏堂の焼失に伴い堆積した層である。上面は礎石抜取穴の遺構面、下面は礎石の掘形土坑の遺構面。

第3A層 5Y4/2灰オリーブ色中礎混じりシルト。上成基壇の背後に位置する裏込め土。多量の瓦を包含する。

第3B層 中礎を基軸に2.5Y4/2暗灰黄色シルトが嵌入する層。上成基壇と下成基壇の隙間に位置し、上面は中世仏堂築造に伴う小基壇面(整地面)を形成する。

第4層 上層2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト、下層N4/灰色粘土質シルトで炭化物を多く含む。下成基壇廃絶の直後に堆積した炭化物層。第4層の除去後犬走りの礎(円礎で玉石状)が検出された。犬走りの礎間で、退化した「て」の字状口縁をもつ土師器皿が出土した。

第5層 基壇の版築土層。付近に良質な粘土が得にくい環境からか、細粒砂層とシルト層、中礎層



第3図 河内道防護会所断面図

を交互に積んで版築を行なっていることが観察できた。

6) 造構(第4~8図)

今回検出した遺構は伽藍の塔跡である。遺跡保存の観点から、礎石間の断ち割りなどは行なっていない。ここでは調査の所見に基づいて、塔の諸施設等をみていく。

(1) 基壇(第5図)

乱石積基壇を検出した。30~40cm前後の角礫を積む上成基壇と、60~70cm前後の角礫を配置する下成基壇との二重基壇を探る。上成基壇ラインから下成基壇ラインまで1.5m(5尺)を測る。基壇長は、上成基壇が一辺11.5m(約38尺)、下成基壇が一辺14.5m(約48尺)となる。上成基壇上面から下成基壇大走りまでの基壇高は1.4mを測る。

上成基壇の南西コーナーは明瞭ではないが、側柱礎石の柱真からの距離から平面の復元を試みた。上成基壇には用礎の崩落があり、上成基壇に伴う雨落ち溝の上部に下成基壇の用礎の堆積が認められる。さらに上成基壇最下部の用礎基面より下成基壇最上部基面は0.4m高い。このことから、塔創建時の基壇は上成基壇であり、天災などにより基壇石積みが緩んだため、下成基壇を構築したとのと考えられる。ただし、下成基壇用礎据付に使用される瓦は創建時所用の瓦であり、上成基壇から下成

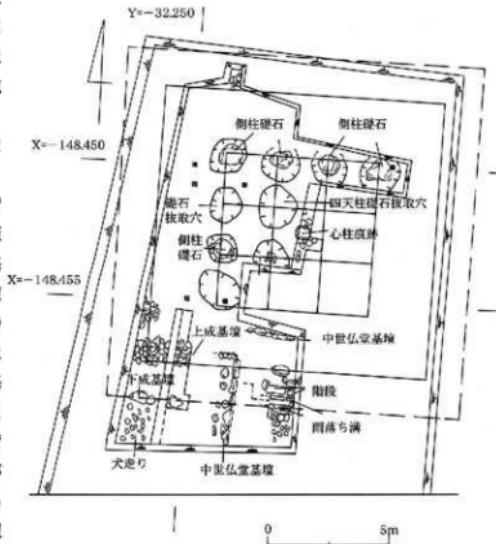
基壇への大きな時期差は想定できず、短時間に上成基壇をもとに補修したことがうかがわれる。

(2) 磁石(第6図)

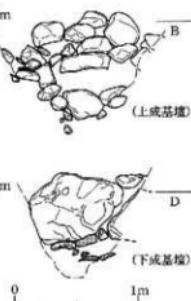
側柱では、東西列で4基、南北で1基の礎石を確認した。初重は3間で柱間は2.1m(7尺)の等間である。側柱礎石は長軸77~98cm、短軸64~85cmを測る。側柱の軸線は、座標北(真北)と一致する。側柱礎石抜取穴の半截後、上面下面の2時期の礎石握付痕跡を確認した。これと抜取穴の検出面の関係から礎石の据え直しが行なわれたことが知られた。抜取穴の層位は次のとおり。

- ① 瓦溜層。瓦が多数充填された内部に2.5Y4/4オリーブ褐色シルト質中粒砂層が見られた。層内には7~8cm大の礫を中量含んでいた。

- ② 25Y3/2里褐色礫層 第2次の礫石掘付に伴う埋土である。



第4図 調査検出過機標略図



第5圖 基壇立面圖

③ 5Y3/1オリーブ黒色礫層。第1次の礫石据付に伴う埋土である。

④ 5Y4/3暗オリーブ中粒砂と5Y6/6オリーブ色中粒砂の混合土。礫石の第1次据付時に礫石上面の水準などを調整するために入れた砂層と考えられる。

四天柱は検出した2基とも礫石は抜き取られていた。北西の抜取穴では据付痕跡は不明瞭であった。礫石抜取の時期は、後述の中世仏堂基壇の廃絶後と考えられる町時代後期ごろと想定できよう。また径70cmを測る心柱痕跡が検出された。

第5層下1.5mまで掘り下げたところ、空洞部を確認し

たため心柱痕跡と想定した。安全を確保する観点から今回は心礎確認を断念したが、心礎は地下式でさらに深い箇所に遺存しているものと思われる。

(3) 階段

東西列の2石と3石の中間で、南面する階段の痕跡を検出した。ステップを2段分確認したが、後述の中世仏堂基壇により、西半部は破壊され、耳石やその据付痕跡は発見されなかった。

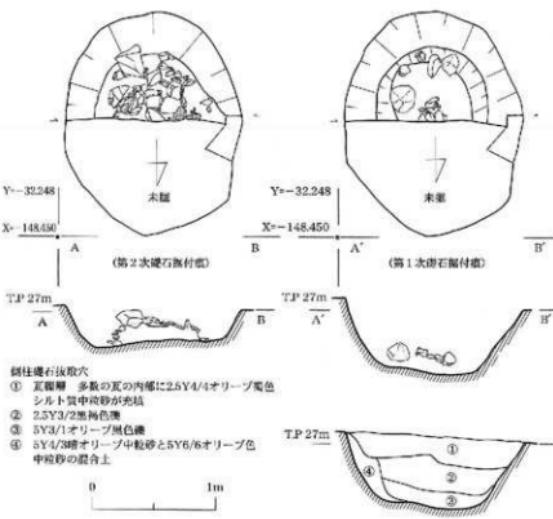
(4) 雨落ち溝

階段の直下で凝灰岩を使用した雨落ち溝を発見した。凝灰岩外面の一辺には、おそらく据付の位置関係を表す記号状の墨書きが施されていた。

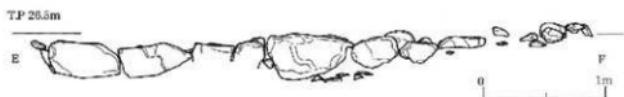
(5) 中世仏堂基壇(第7図)

階段の北方と西方で中世期の仏堂に関わる基壇を検出した。規模等は不明である。基壇の軸線は塔礫石のそれとは合わないこと、一部箇所を掘り下げたところ、この基壇の下面から下成基壇の用礫が認められたこと、から中世期の所産と判明した。中世仏堂基壇の上部に堆積する焼土層出土土器からこれらの仏堂は室町時代まで存続したことが知られた。

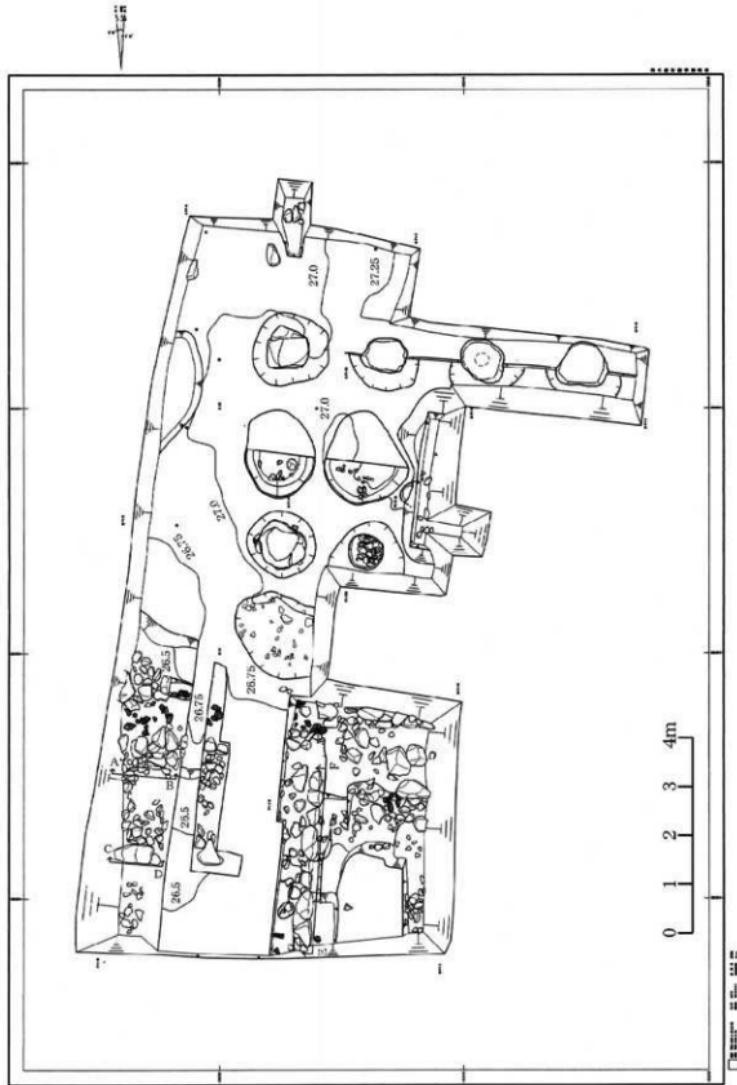
また断面観察から、上成基壇と下成基壇の間にほぼレベルを同じくして角礫を一直線に据える箇所が認められた。この礫上面は上成基壇を再利用し、中世仏堂構築の整地面をなすことが判明した。



第6図 側柱礫石抜取穴実測図



第7図 中世仏堂基壇立面図



第8図 造構平面図 (A～Fは第5図・第7図と対応)

7) 出土遺物

(1) 上器・陶磁器

今回の調査で検出したのは古代寺院の塔跡である。その性格上、該期の一般集落と比して出土土器は僅少であり、かつ全形を知りえる資料に乏しく小片である。また各遺構や堆積層のプライマリーな所属時期から乖離する古相の混入品が多数認められる。このような出土状態に鑑み、ここでは各遺構・堆積層川土例の中で最も所属時期を検討、限定できる資料について詳述し、余については略述にとどめたい。また出土状態の再検討のため個別説明のあと、各層出土土器の概要を述べ参考に供したい。なお、土器の形状・成形、時代観の記述については、以下の文献を参照した(副題は省略)。

平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』、1966年。

平安学園考古学クラブ『船橋Ⅰ・Ⅱ』、1958年・1962年。

中世土器研究会編『概説中世の上器・陶磁器』、真陽社、1995年。

古代の上器研究会編『古代の土器都城の土器集成』、1997年。

京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』第3分冊、1980年。

財団法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第38次発掘調査報告書』、1003年。

堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第20集、1984年。

千喜良淳「中・南河内における上器皿の変遷」(『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』、2002年。)

山田邦和編『平安京出土土器の研究』(古代学研究所研究報告第4輯)、1994年。

近江俊秀「古代末期における粗製窓の展開」(『櫛原考古学研究所論集』第12、吉川弘文館、1994年。)

大橋康二『肥前陶磁』、ニューサイエンス社、1989年。

四天柱礎石抜取穴出上土器(第9図1~3)

1・2は土師器皿である。1は上げ底で体部から口縁部へ直線的に聞く。内外面ともヨコナデ調整。口縁端部は丸く納める。口径8.0cm^{*}。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)。内面は橙色(2.5YR6/6)。15世紀中葉に属する。2は体部から屈曲後口縁部は強いヨコナデのために大きく外反して聞く。口径13.2cm。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面にぶい黄橙色(10YR7/4)。3は須恵器高杯の脚部。透し穴を持つ。

側柱礎石抜取穴出土器(第9図4)

4は土師器の小型鉢である。口縁部は短く外反する。口縁端部は薄い。内外面ともヨコナデ調整。古墳時代中期に属する。

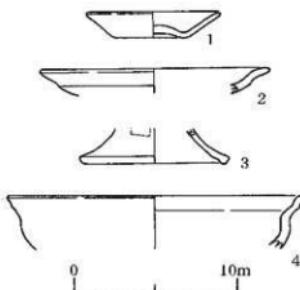
第1層出土土器(第10図5)

5は偏前焼擂鉢である。口縁部外面に2条の凹線、内面に1条の凸線が施される。口径34.8cm。内面の擂目は2.6条/1cmである。類例は若江遺跡第38次調査にあり、19世紀に属すると思われる。

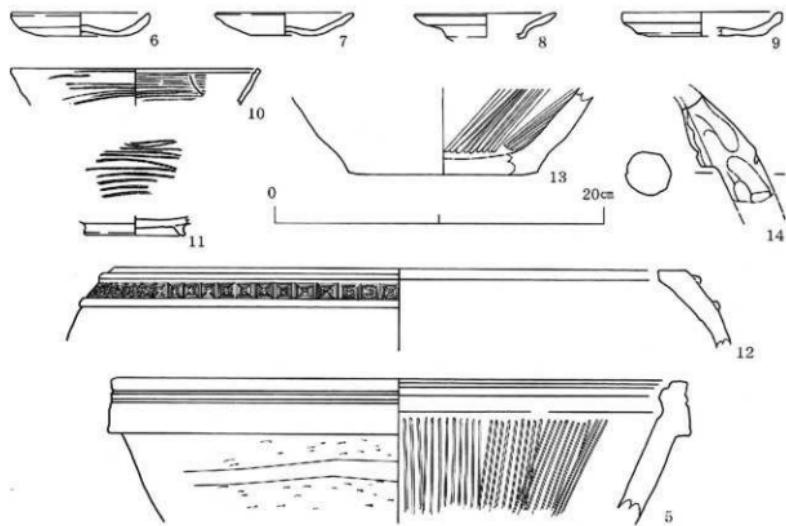
第2層出土土器(第10図6~14、第11図15~20)

6~9は土師器皿である。6はレンズ状に膨らむ底部を持ち、屈曲して口縁部は内彎気味に立ち上がる。

* 口径はすべて復元値である。以下同じ。



第9図 遺構山土七器実測図



第10図 第1・2層出土土器実測図

る。12世紀後半から末ごろに属する。口径8.2cm。色調は内外面ともにぶい黄橙色(10YR7/3)。7は上げ底で口縁部は直線的に開く。15世紀前半に属する。口径8.0cm。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)。8の口縁部は外反して大きく開く。口縁部の器壁は厚い。15世紀後半に属する。口径8.4cm。色調は内外面ともにぶい黄橙色(10YR7/4)。9は平底で口縁部は内轉して立ち上がる。12世紀後半に属する。口径9.4cm。色調は内外面とも浅黄橙色(7.5YR8/4)。

10・11は瓦器碗である。10は口縁部の内端面に沈線を持つ大和型の碗である。12世紀代。口径14.8cm。11は底部である。断面形は台形を呈する。見込みの暗文は平行線状をなすことから和泉型である。高台径は5.8cm。

12~14は瓦質土器である。12は平面円形の火舎で浅鉢Vに分類される〔立石(中世土器研究会)1995〕。外面に凸帯が2条巡らされ、その間を文様帯とする。ここでは幾何学文が施される。15世紀後半に属する。口径34.4cm。色調は外面灰オリーブ色(5Y6/2)、内面にぶい黄色(2.5Y6/3)。13は河内・和泉型の擂鉢である。底部外面に煤の付着が見られる。底径9.4cm。外面灰黄色(2.5Y7/2)、内面灰白色(2.5Y8/1)。14は羽釜の脚である。

15~20は肥前磁器碗である。15は見込みに葉状のものがある。高台径4.8cm。16は体部外面に網目文が見られる。大橋編年のⅢ期に属する。高台径4.2cm。17の見込みは五弁花と見られる。IV期。高台径3.2cm。18の高台は台形を呈する。高台径2.7cm。19の見込みは嘴が長く、鶴と見られる。高台は薄い。高台径5.8cm。20は口径11.8cm、高台径5.0cm。17世紀後半~18世紀代に属する。

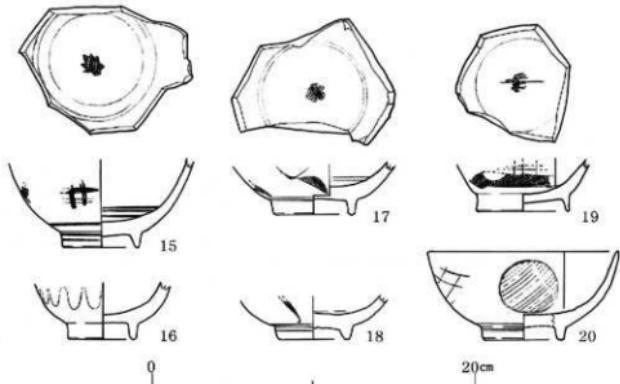
【小結】第2層出土土器には前記のほか、古墳時代後期の須恵器が一定量みられた。層位の項で記したように、第2層は肥前磁器が属する時期の再堆積層である。ただし、再堆積層の下面が塔廐絶面の直上にあたり肥前磁器を差し引けば塔廐絶時期を類推することが可能となる。第2層では鎌倉時代の土師

器、瓦器とともに
15世紀の土師器、
瓦質土器が伴う傾
向が窺われる。

第3層出土土器(第12図21~39)

21~30は土師
器皿である。21・
23は底部から直
線的に外反する。

底部を欠くが他例
から推して上げ底
と思われる。21は
15世紀前半~中
葉に位置づけられ



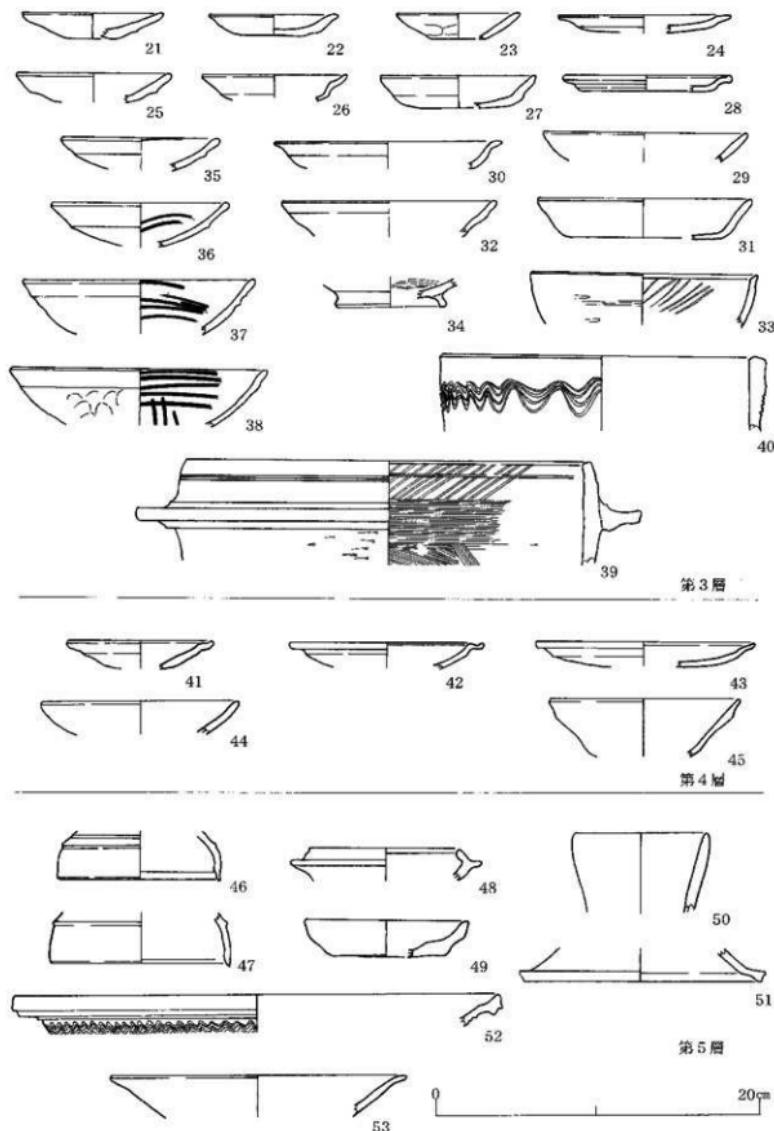
第11図 第2層出土肥前磁器実測図

る。口径 8.6cm。色調は内外面とも灰白色(2.5Y8/2)。23は口径13.2cm。23は体部外面に指痕圧痕を残す。15世紀後半に属する。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面浅黄橙色(10YR8/4)。22・25は口縁部が内彎気味に立ち上がる。24・30は内彎する体部から口縁部は強いヨコナデのため鋭く外反する。22は口縁部の先端が尖り気味である。12世紀末~13世紀初頭に位置づけられる。口径9.6cm。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面浅黄橙色(10YR8/4)。25の先端は丸い。13世紀後半に属する。口径9.4cm。色調は内外面とも橙色(5YR6/6)。27の体部と口縁部の境はヨコナデが強く凹む。12世紀中葉~後半に通例のタイプである。口径9.4cm。色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面にぶい黄橙色(10YR7/3)。28は「て」の字状口縁を呈する。初現期のものと比べ口縁部の水平の伸びはシャープさに欠ける。11世紀中葉まで下る資料と考えられる。口径10.2cm。色調は内外面とも浅黄橙色(10YR8/3)。31~33は杯である。31は口縁部内外面ともヨコナデ調整でヘラミガキは認められない。9世紀中葉に属する。33は体部内面に放射状の暗文が施される。都城の器形分類で杯Cに相当する。口縁部は短く外折する。体部外面はヘラミガキ調整。暗文の間隔は密ではないが口縁部の形態から飛鳥Ⅲ段階に位置づけされ、7世紀後半に属する。口径13.8cm。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。

34は黒土器B類機の底部である。断面は台形を呈し、高い。

35~38は瓦器機である。いずれも和泉型である。体部外面のヘラミガキの痕跡、口径、器形の傾斜度から、35・36は14世紀初頭~前半、37・38は13世紀後半~末ごろに位置づけられる。口径は35が9.6cm、36が10.6cm、37が14.2cm、38が15.6cmを測る。

39・40は瓦質土器である。39は羽釜である。直立して立ち上がる口縁部に鉗部は幅が狭く水平に伸びる。鉗端部は面を持ち終わる。口縁部内面は端面から幅の広いハケメ(4条/cm)、鉗部内面は細かな横方向のハケメ(10条/cm)が施され、ナデ消しは認められない。15世紀代に属する。口径25.0cm、色調は内外面とも灰白色(10YR8/2)を呈する。40は火舎である。平面円形で体部、口縁部は直立して立ち上がる。深鉢IIに該当する〔立石(中世土器研究会)1995〕。体部外面にヘラ書きによる4条の波状文が施される。波状文の瓦質土器火舎は堺環濠都市遺跡SKT14地点SF001出土例〔堺市1984〕などがあるが、該例の場合、体部が内彎して膨らむ浅鉢であり、本例と形態が異なる。ここでは他の深鉢II類と同様、器形から15世紀代とみておきたい。



第12図 第3～5層出土土器実測図

【小結】第3層は塔の焼失以降の堆積層、中世仏堂廃絶後の堆積層である。39の瓦質土器羽釜や40の同火舎は、形態から15世紀代に求められる。また上げ底を指向する十師器III(21)も見られ、15世紀中葉を上限とする時期に仏道は廃絶したことが窺われる。

第4層出土土器(第12図41~45)

41~44は上師器IIIである。このうち41~43は「て」の字状口縁皿である。42は口縁部と体部の境が四線状を呈し古相を示すのに対し、41・43は上方に折り曲げる受け皿状に変化する兆しが認められる。42は10世紀後半、41は11世紀後半に位置づけられる。44の口縁部は内巻気味に立ち上がる。12世紀代か。41は口径8.8cm。色調は内外面とも浅黄橙色(10YR8/3)。42は口径11.8cm。色調は内面灰白色(10YR8/1)、外側灰白色(7.5YR8/2)。43は口径13.2cm。色調は外側灰白色(2.5Y8/2)、内面灰白色(10YR8/2)。44は口径12.0cm。色調は内外面とも橙色(5YR7/6)。

45は粗製杯である〔近江1994〕。直線的に体部が上方に開く形態を持つ。口縁部内外面にはヨコナデが施され、体部外面下半には指頭圧痕を明瞭に残す。10世紀後半以降粗製杯は黒色土器と同一の歩調をとり、器高を増し椀形態を指向する。その観点から本例の形状や口径(11.4cm)を見ると、10世紀初頭から前半のはさみ山82-5区土器窯2~6段階に推定できる。また高台部を欠損するが、口径から見て無高台である可能性が指摘できる。色調は外前にぶい橙色(7.5YR7/4)、内面橙色(5YR7/6)。

【小結】41~43の「て」の字状口縁皿は、いずれも下成基壇の縁辺を廻る犬走り所用礫の上面から出土した。礫上面に炭化物が含まれていたことから、塔の1次倒壊の時期が推定できる資料である。

第5層川土土器(第12図46~53)

46~52は須恵器である。46・47は杯蓋である。46の口縁部は垂直に立ち、内巻して天井部に続く。上半で膨らみを見せる。端面は下面に段状の内傾斜面を持つが、他例と比べて段は弱い。また天井部と口縁部を分ける稜は鋭さに欠け、わずかに突出する。内外面とも回転ナデ調整。TK47型式併行。5世紀末~6世紀初頭に属する。口径9.8cm。47は46と比べて口縁部が高い。口縁部はやや外反する。下端面の段はない。内外面とも回転ナデ調整。46より後出でMT15型式併行。6世紀初頭~中葉。口径11.0cm。48・49は杯身である。48の口縁部の立ち上がりは短く内傾する。受部は外上方へ伸びる。内外面とも回転ナデ調整。口径9.2cmでTK217型式に属する。7世紀初頭~前半。49の底部は平坂で屈曲後外上方へ聞く。口縁部は内巻気味に立ち上がる。先端は尖る。内外面とも回転ナデ調整。口径9.8cm。器高2.3cmを測る。都城の器形分類で杯Gに相当する。飛鳥II段階、7世紀後半に属する。50は平瓶の口縁部である。外上方に立ち上がる。端部は外反せず直立気味である。内外面とも回転ナデ調整。口径8.0cm。口縁部の形態からTK217型式から飛鳥II段階に位置づけが可能である。51は高杯の脚部である。端面の上下が拡張し内端面が接地する。内外面とも回転ナデ調整。TK209型式、6世紀末~7世紀初頭に属する。脚端径14.4cm。52は甕の口縁部である。端部は上下が拡張する。頸部には櫛描き波状文が施される。内外面とも回転ナデ調整。口径30.0cm。

52は土師器高杯の口縁部である。杯部は外上方に大きく開き、口縁部はゆるやかに外反する。先端は丸い。杯部は浅い。内外面ともヨコナデ調整。色調は内外面とも橙色(5YR6/6)を呈する。古墳時代中期に属する。

【小結】第5層は塔基壇の版築土層である。6世紀中葉以前に属する須恵器・土師器は、寺院造営以前に調査地周辺で該期の集落が存在したことを示唆する。

いっぽう、7世紀前半の須恵器坏(48)は、後述の瓦の年代觀から、金堂建築前後にあたる。この資料によって伽藍内堂塔の建築順序を窺うことができる。7世紀後半の須恵器坏(49)は、塔基壇の築造時期を反映した資料と捉えられる。

(2) 瓦

第11次調査で、瓦類はコンテナ約300箱分出土した。以下、軒瓦と鬼瓦について報告する。記述にあたっては、次の文献を参照した。紙数の関係で瓦色調の数値は省略した。

藤井寺市教育委員会『藤井寺市及びその周辺の古代寺院(上)(下)』、1987年。

市本芳三「瓦」(中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』、真陽社、1995年。)

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料IV』[瓦編4]、1977年。

奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』、1996年。

法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝』第15巻、1992年。

福永信雄「生駒山西麓の山岳寺院(大阪府)『仏教藝術』265、2002年。

芦山淳一「興福寺の中世軒平瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』III、2001年。

軒丸瓦

今回出土した軒丸瓦は7類10種に分類できた。

軒丸瓦 I類(第13図54・55)

素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。第1次～第3次調査で型式分類された「河内寺跡出土端瓦第I形式」に相当する。飛鳥時代後期。54の中房は扁平で1+6の蓮子が巡る。中房径2.6cm。内区には八葉の素弁を持つ。花弁は扁平で先端は尖る。弁間に珠点は伴わない。周縁は扁平である。瓦当内面はナデ調整。残存長13.1cm、残存幅4.5cm、厚さ2.7cmを測る。55の周縁は素紋でヘラケズリによる面取りが見られる。瓦当内面はナデ調整。残存長8.2cm、残存幅3.0cm、厚さ2.6cmを測る。54・55いずれも胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産である。色調は灰色ないし褐色を呈する。今回の調査で5点出土した。

軒丸瓦 II類(第13図56～58)

単弁十三葉蓮華文軒丸瓦である。白鳳時代。範別に3種がある。いずれも端瓦第II形式の亞種である。56はA種で、中房は突出する。弁間に間弁がある。花弁はやや凹み、先端は丸く、中輪は凸線を持つ。外区外縁は素文、内縁は珠文が巡る。周縁は低縁である。瓦当内面はナデ調整、丸瓦部凸面はナデ調整、凹面は布目。残存長10.4cm、残存幅12.1cm、厚み3.3cm。胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産である。色調は黄灰色～灰色を呈する。57はB種である。外区外縁に圓線を持たないこと、珠文がA種より密であることから別範であることがわかる。瓦当内面はナデ調整、丸瓦部凸面はナデ調整。残存長7.6cm、残存幅8.9cm、厚み2.7cm。胎土は56と同様、生駒西麓産である。色調は灰色～オリーブ灰色。A種・B種で16点出土。58はC種で、瓦当底部側縁に○文が押捺される。外区外縁の周縁、内縁珠文の粗密はA種と同様である。瓦当内面はナデ調整。残存長7.3cm、厚み2.4cm。生駒西麓産。色調は灰白色。C種は1点出土。

軒丸瓦 III類(第13図59・60)

単弁十二葉蓮華文軒丸瓦である。端瓦第III形式。平安時代中期。四天王寺境内出土軒丸瓦に類例がある。59の中房は突出し、1+5の蓮子が巡る。中房径3.5cm。内区には十三葉の単弁を持つ。花弁が完結せず、別の花弁と重なる箇所が見られる。花弁は膨らみ、先端は丸い。内部に子葉を持つ。外区外縁は線鉛歯文、内縁は珠文が巡る。周縁は中高縁である。瓦当内面、丸瓦部は剥離して調査法不明。残存長11.2cm、残存幅4.0cm、残存厚み1.8cm。胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産。

* ここでは、河内寺跡調査の学史上の位置付けを踏まえて、そのまま「焼瓦」としておく。以下同様で「端瓦第〇形式」と略記する。

色調は灰黄色。60は小破片である。周縁は中高縁。調整法不明。残存長7.2cm、厚み2.6cm。2点出土。

軒丸瓦IV類(第13図61)

複弁蓮華文軒丸瓦である。新種。奈良時代。内区の複弁上に珠点をもつ。周縁は高縁。残存長4.8cm。胎土は石英・長石・雲母を含む。色調は灰色。2点出土。

軒丸瓦V類(第13図62)

複弁蓮華文軒丸瓦である。新種。奈良時代。外区外縁が素文で内縁にやや粗略な珠文が巡る文様構成は、平城京軒丸瓦6227E型式と同様と考えられる。内区の花弁は小さいことから中房は大型と推定される。周縁は高縁。残存長5.6cm。胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産。色調は灰色～灰白色。1点出土。

軒丸瓦VI類(第13図63・64)

巴文軒丸瓦である。端瓦第V形式。鎌倉時代。巴文は左廻りである。2種ある。63はA種で、巴頭部はやや尖るが隔絶し頭部に空間を持つ。珠文帯の周縁とは独立していない。珠文はやや疎らである。外縁幅は広く、外縁高は高い。調整法不明。残存長13.0cm、残存幅3.6cm、瓦当厚さ2.2cm。胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産。64はB種で、巴頭部は丸く空間を持つ。珠文帯周縁と独立する。珠文は密に施される。外縁幅は広く、外縁高は高い。調整法不明。径15.6cm、残存幅6.1cm、瓦当厚さ2.1cm。胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産。色調は灰色。A種・B種で21点出土。

軒丸瓦VII類(第14図65・66)

巴文軒丸瓦である。平安時代後期～鎌倉時代。巴文は右廻りである。65の巴頭部はやや尖り大きい。文様断面は台形を呈する。平安時代後期の可能性がある。調整法不明。残存長13.0cm、残存幅3.6cm、瓦当厚さ2.2cm。66の珠文は密である。外縁幅は広く、外縁高は長く高い。残存長5.5cm、残存幅3.3cm、瓦当厚さ1.9cm。いずれも胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産。色調は灰色ないし黃灰色。3点出土。

軒平瓦

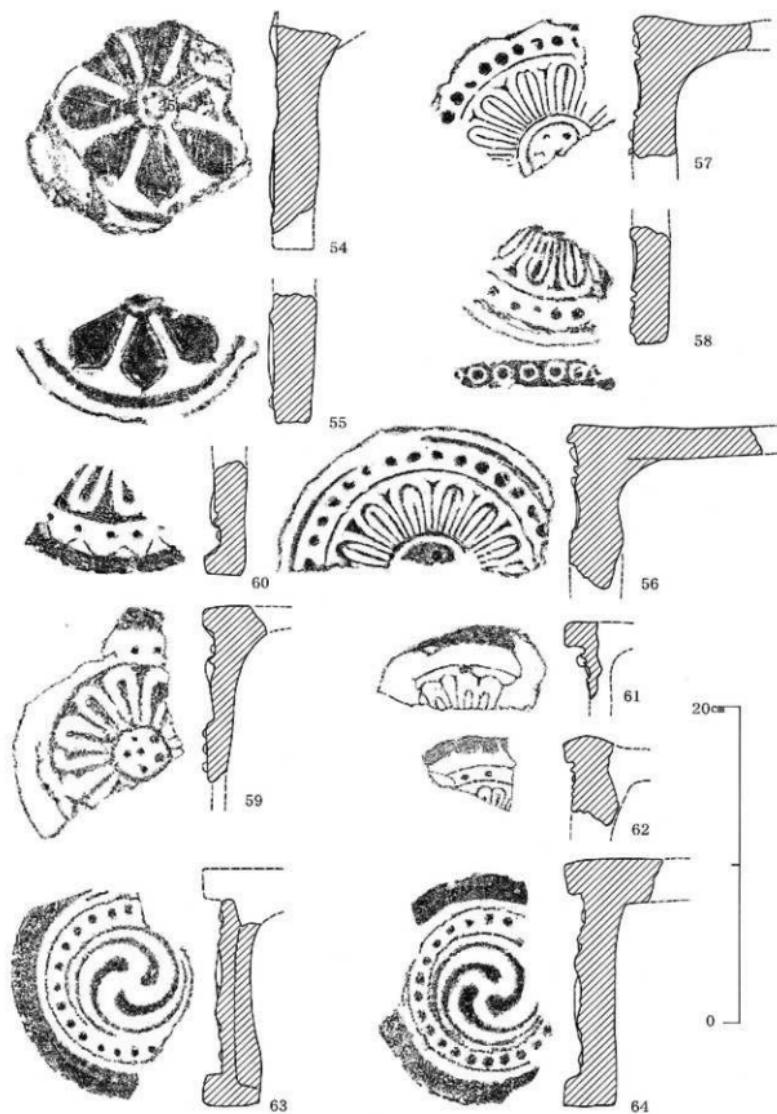
今回出土した軒平瓦は13類17種に分類できた。

軒平瓦I類(第14図67・68)

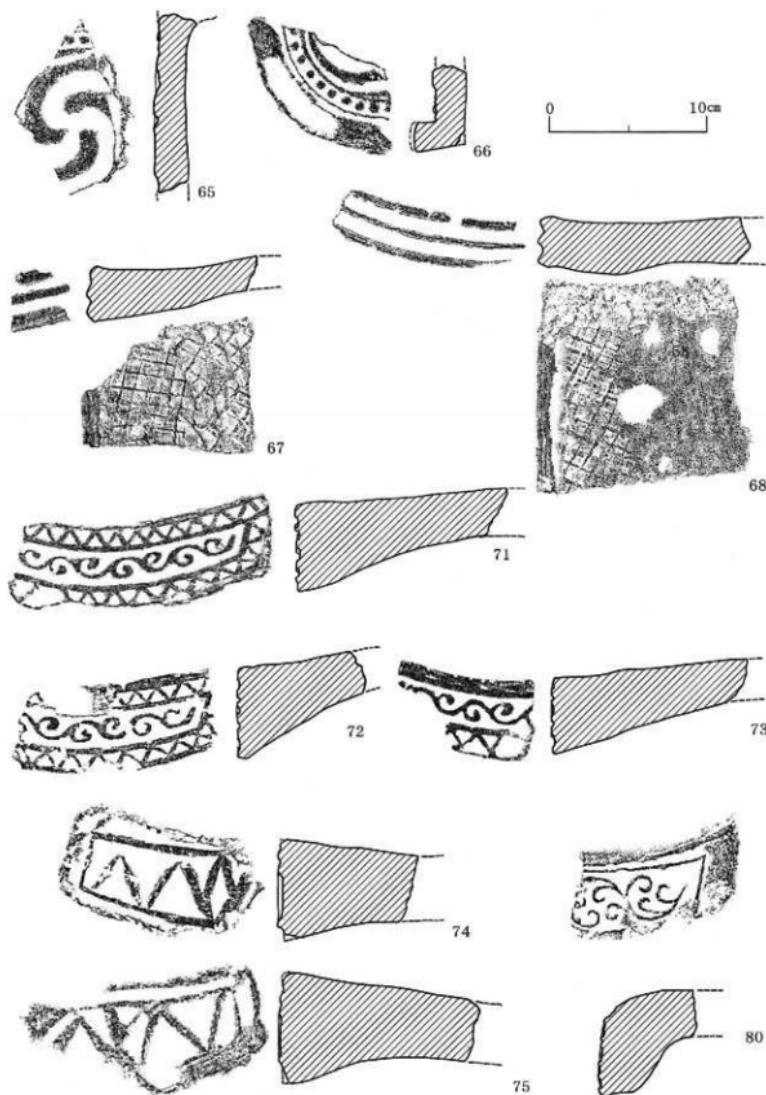
三重弧文軒平瓦である。端瓦第I形式。飛鳥時代後期。67・68とも頸は曲線頸。67の平瓦部凸面は2種の格子タタキ、凹面は布目。瓦当面厚さ3.6cm、残存長10.4cm。68の平瓦部凹面は格子タタキのちナデ調整。凹面布目。瓦当面厚さ3.6cm、残存長13.4cm。いずれも胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み生駒西麓産。色調はとともに凸面灰色～灰黄色、凹面にぶい黄橙色。2点出土。

軒平瓦II類(第15図69・70)

変形重弧文軒平瓦である。白鳳時代。3種ある。既往調査川土と同文・同形態をA種とする。これは端瓦第II形式、類例として藤原京軒平瓦6561型式がある。図示したのは頸部から平瓦部凸面にかけて文様が見られるものである。69をB種とする。頸は曲線頸である。平瓦部との接合痕が遺存する。六重弧文を配し上部にヘラ書きの×文、中部に押捺の○文、下部にユビを斜めに押圧する。頸部先端から凸面にかけて沈線を施して文様帯を形成し、順にユビ押圧、×文ヘラ書き、○文押捺、×文ヘラ書きを巡らす。このような施文は塔の軒内面の加飾と考えられる。平瓦部凸面はナデ調整、凹面は布目。瓦当面厚さ3.6cm、残存長13.4cm。胎土は生駒西麓産。色調は灰黄色。70をC種とする。頸は直線頸である。瓦当部、頸部から平瓦部凸面にかけての文様構成は69と同様であるが、文様の重複、輻輳が著しく認められる。平瓦部凸面はナデ調整、凹面は布目。瓦当面厚さ5.1cm、残存長19.0cm。胎土は



第13図 軒丸瓦実測図



第14図 軒丸瓦・軒平瓦実測図

生駒西麓産。色調はにぶい黄橙色。A種が10点、B種・C種併せて6点出土。

軒平瓦Ⅲ類(第14図71~73)

偏行唐草文軒平瓦である。白鳳~奈良時代。2種ある。71・72はA種である。端瓦第Ⅲ形式に相当する。頸は曲線頸である。内区には支葉1個を左偏行とする。外区、脇区には太い線鋸齒文が巡る。平瓦部との接合痕が遺存する。平瓦部凸面はナデ調整、凹面は布目。71は瓦当面厚さ5.6cm、残存長13.2cm。色調は凸面凹面灰黄色、瓦当面浅黄橙色。72は瓦当面厚さ5.8cm、残存長8.2cm。色調は凸面灰黄色、凹面にぶい黄橙色、瓦当面浅黄橙色。いずれも胎土は生駒西麓産。A種は軒丸瓦との組合せから考えて白鳳時代に位置づけられる。73はB種である。頸は曲線頸である。上外区を工具でナデ消すが鋸齒文の殘滓が破線状に見える。範傷が進行したためと考えられる。平瓦部凸面はナデ調整、凹面は布目。瓦当面厚さ4.8cm、残存長12.3cm。色調は凸面灰色、凹面黄灰色、瓦当面灰色。胎土は生駒西麓産。B種はA種の後出型式であり、奈良時代に下るものと考えられる。A種は17点、B種は1点出土。

軒平瓦Ⅳ類(第14図74・75)

偏行山形文軒平瓦である。平安時代中期。端瓦第Ⅳ形式。頸は曲線頸である。内区に逆V字型の山形文を右偏行とし、瓦当部中心付近にはV字あるいは逆V字の文様を配す。極めて瓦当面が厚い。外区、脇区とも素文である。平瓦部凸面は繩目タタキ、凹面は布目。74は瓦当面厚さ6.1cm、残存長8.9cm。色調は凸面灰白色、凹面灰白色、瓦当面灰色。75は範傷が進行し、頸部に朱が遺存する。瓦当面厚さ7.0cm、残存長12.6cm。色調は凸面凹面瓦当面とも灰色。胎土は生駒西麓産。2点出土。

軒平瓦Ⅴ類(第15図76・77)

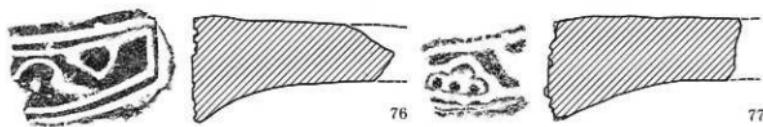
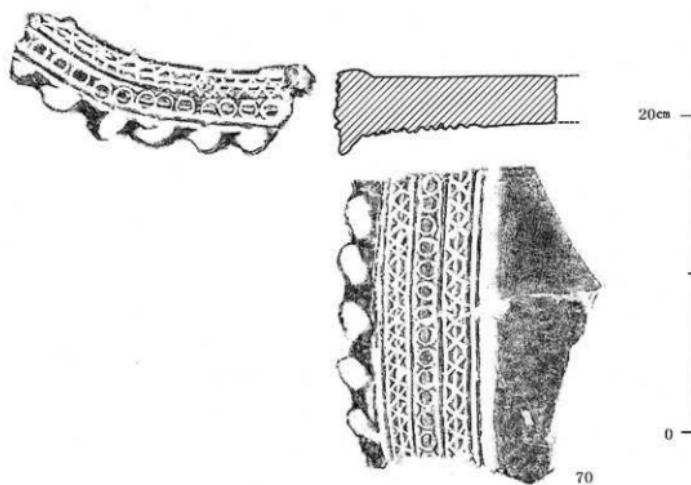
変形山形文軒平瓦である。新種。平安時代後期。文様は陰刻する。頸は曲線頸である。76・77で同一個体と見られる。いずれも瓦当面は厚い。76は瓦当面右縁部で緩やかなV字状の山形文が接続する。山形文の内側に陰刻の珠点を持つ。平瓦部凸面は繩目タタキのちナデ調整、凹面は布目。瓦当面厚さ6.6cm、残存長12.8cm。色調は凸面凹面瓦当面とも灰白色。77は雲形状文様に陽刻の珠点3個を内包する。平瓦部凸面は繩目タタキのちナデ調整、凹面は布目。瓦当面厚さ6.0cm、残存長12.4cm。色調は凸面凹面瓦当面とも灰白色。胎土はいずれも生駒西麓産。2点出土。

軒平瓦VI類(第16図78・79)

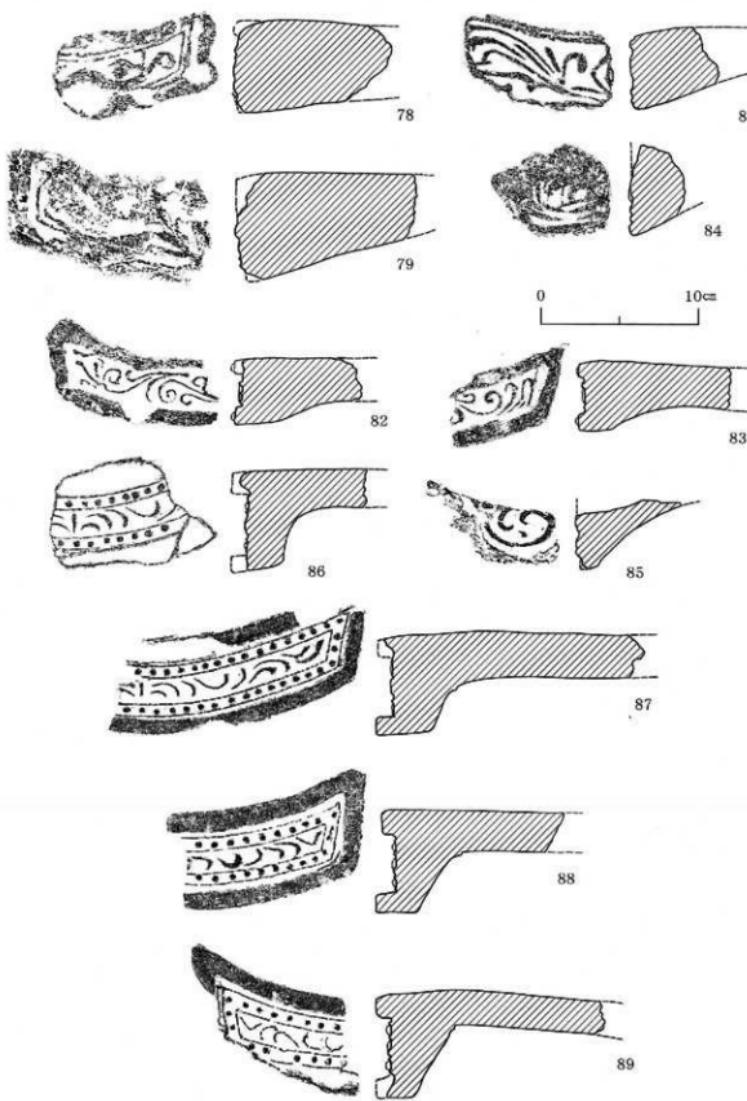
唐草文軒平瓦である。第2次調査出土例に類品がある。奈良時代。頸は曲線頸。瓦当面は厚い。78・79とも外区、脇区との境に二重界線が施される。79は瓦当面が剥離し文様不明であるが、二重界線の存在をもって78と同類とした。78は右縁部で支葉1対が見られる。脇区へは推定の中心飾りから2回転半程度と考えられる。79は脇区に珠点1個が認められる。いずれも平瓦部凸面は繩目タタキ、凹面は布目。78は瓦当面厚さ5.9cm、残存長10.1cm。色調は凸面瓦当面とともにぶい褐色、凹面灰褐色。79は瓦当面厚さ6.8cm、残存長11.6cm。色調は凸面凹面ともにぶい褐色、瓦当面灰褐色。2点出土。

軒平瓦VII類(第16図80)

偏行唐草文軒丸瓦である。新種。平安時代中期~後期。平瓦部の広端面の先端を折り曲げて瓦当とするため、頸は三角形に近い曲線頸を呈する。支葉3個を1単位として2回転の左偏行とする。施文は細い。外区、脇区とは界線で区画する。平瓦部凸面はナデ、凹面は布目。瓦当面厚さ5.3cm、残存長6.1cm。色調は凸面凹面瓦当面とも灰色。胎土は石英、長石、雲母を含むが、観察から生駒西麓産ではなく非河内産と考えられる。1点出土。



第15図 軒平瓦実測図



第16図 軒平瓦実測図

軒平瓦VII類(第16図81)

均整忍冬唐草文軒平瓦である。新種。法隆寺式軒平瓦に相似するが、文様の崩れが認められ、年代としては奈良時代に下る資料と推定される。頸は曲線頸である。瓦当面は狭い。宝珠形ないし紡錘形の中心飾りから1葉半のパルメットが2回転分見えるが、茎部とは結節せず株点で代用させており、便化が窺われる。平瓦部凸面はナデ、凹面は不明。瓦当面厚さ4.7cm、残存長5.6cm。色調は凸面凹面瓦当面とも灰黄色。胎土は生駒西麓産。1点出土。

軒平瓦IX類(第16図82・83)

均整唐草文軒平瓦である。新種。平安時代後期。2種ある。82はA種で支葉2個を1単位に2回転分見られる。頸は段頸に近い曲線頸である。83はB種で八尾市向山瓦窯製軒平瓦と同范(福永2002)。客坊山遺跡群第2次調査出土軒平瓦に類品がある。軒平瓦VII類と同様施文は細い。いずれも外区、脇区に珠文を持つ。平瓦部凸面はナデ、凹面は布目。82は瓦当面厚さ4.2cm、残存長8.1cm。色調は凸面凹面瓦当面とも灰白色。83は瓦当面厚さ4.2cm、残存長9.6cm。色調は凸面にぶい黄橙色、凹面瓦当面とも灰白色。胎土は生駒西麓産。1点出土。

軒平瓦X類(第16図84)

瓦当面が大きく剥離しているが、唐草文軒平瓦と思われる。新種。平安時代後期。頸は曲線頸と見られる。詳細不明であるが、内区に2本の支葉が認められる。残存長3.5cm。瓦当面は灰黄色を呈する。胎土は生駒西麓産。1点出土。

軒平瓦XI類(第16図85)

X類と同様瓦当面上半部を欠損するが、唐草文軒平瓦と思われる。新種。平安時代後期。頸は曲線頸。支葉先端の表現が2箇所遺存する。施文はやや太い。平瓦部凸面はナデ調整。残存長6.6cm。瓦当面は青灰色を呈する。胎土は石英、長石を含み、非河内産である。1点出土。

軒平瓦XII類(第16図86・87)

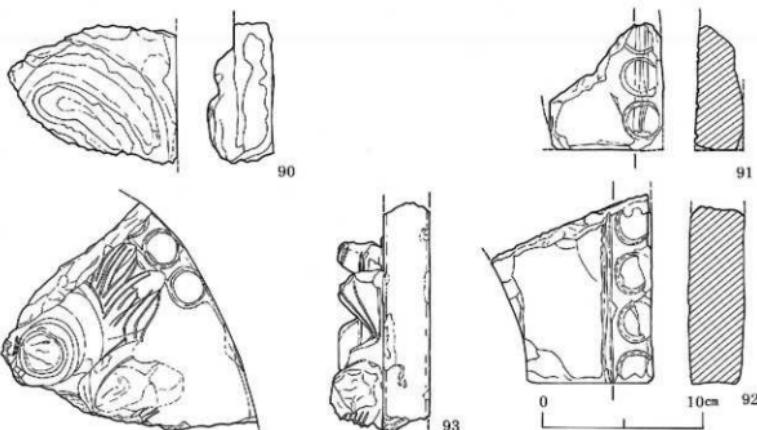
均整唐草文軒平瓦である。端瓦第V形式に相当する。鎌倉時代。頸は段頸で外区、脇区は大きく突出する。瓦当面は厚い。興福寺出土例と同范である(芦田2001)。中心飾りは1対の半円状主葉で、非連続の短い支葉が4回転する。外区、脇区には密な珠文が巡る。86・87ともに平瓦部凸面はナデ、凹面は布目。86は瓦当面厚さ6.3cm、残存長8.1cm。色調は凸面灰黄色、凹面瓦当面とも灰色。87は瓦当面厚さ6.3cm、残存長16.9cm。色調は凸面凹面瓦当面とも黄灰色。胎土は生駒西麓産。瓦当面の破損等があり可能性のあるものを含めると5点出土。

軒平瓦XIII類(第16図88・89)

均整唐草文軒平瓦である。端瓦第V形式の亞種である。鎌倉時代。頸は段頸で外区、脇区は大きく突出する。瓦当面は厚い。XII類と比較すると、外区、脇区の珠文の巡りがやや疎らであること、内区での支葉の回転が異なるなどの違いがある。88・89ともに平瓦部凸面はナデ、凹面は布目。88は瓦当面厚さ6.5cm、残存長19.1cm。色調は凸面凹面瓦当面とも灰色。89は瓦当面厚さ6.5cm、残存長14.8cm。色調は凸面褐灰色、凹面黄灰色、瓦当面灰白色。胎土は生駒西麓産。7点出土。

鬼瓦(第17図90~93)

90~93は鬼瓦である。90の肉厚な盛上りは肩を表現するものと考えられる。91・92は鬼瓦の地板基底部でいずれも周縁に竹管による○文の押捺が施されている。とくに92は地板の弧状部が残存している。周縁の竹管と鬼面部との境にはヘラによる沈線が見られる。93では周縁の竹管の押捺は91・92と同様である。突出した眼球、隆起した膝と頬で忿怒を表現する。93で残存長14.4cm、色調は内外面とも黄灰色。91~93は竹管の大きさから同一個体の可能性がある。いずれも鎌倉時代に属する。



第17図 鬼瓦実測図

(3) 研(第18図)

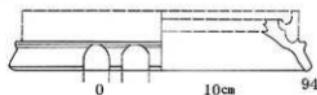
94は背面観である。脚部を欠くために全形は不詳であるが、脚部の剥離痕の間隔から、蹄脚と考えられる。また脚部が剥離していることから硯部、脚部、脚台部を個別に作り、その後で合体させた製作方法をとったことがわかる。

この手法は、硯部と粘土帯状の脚台部の合体の後、脚部間の透かし孔を搔きとる手法より先行する。従って、白鳳～奈良時代の位置づけが可能である。残存底径23.8cm、残存高4.3cm。内外面とも自然釉が付着している。色調は灰色。

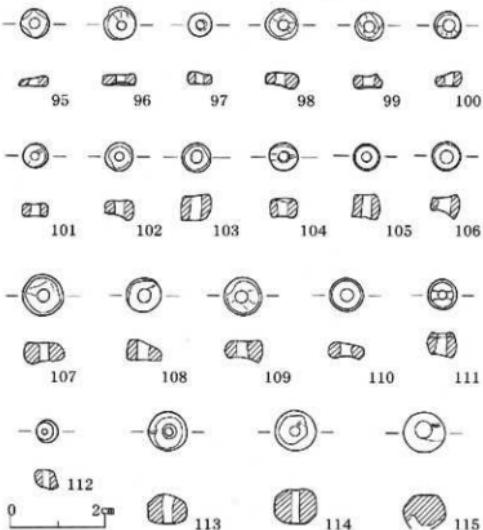
(4) 玉類(第19図)

全て心礎確認トレンチの第5層(版築土層)から出土した。95～111は滑石製白玉。器高は2～3mm大と5mm大の2種に区別できる。前者は緑黒色、後者は淡緑灰色を呈する。

112・113はガラス玉である。112は碧緑色を呈する。114は埋木製の玉。115は金属製玉状製品である。



第18図 研実測図



第19図 玉類実測図

8) 調査成果

今回の調査はいわば中断の形を採っており、調査としては今後も継続する必要がある。このため、本項では、調査の成果を列挙し、まとめにかえておきたい。

(1) 伽藍配置の再検討と塔の規模(第20・21図)

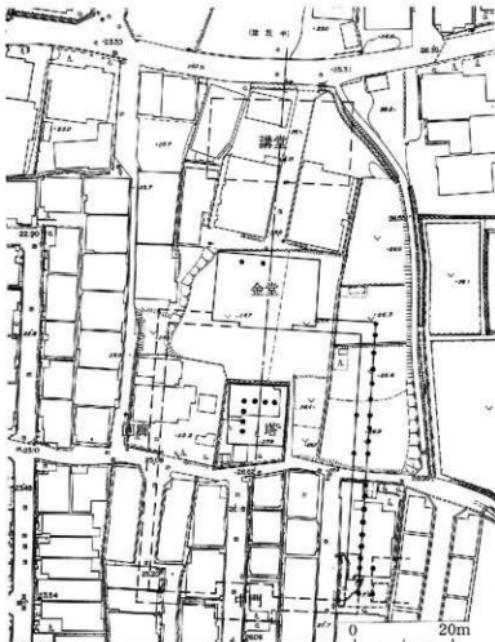
今回検出した遺構が、塔跡で確定したことにより、従前知られてきた伽藍位置の見直しが必要となった。従前の伽藍配置では、①第2次調査検出の回廊礎石の規模が南北で差があること、②北側水田で回廊礎石が1間分西にずれること、から礎石の据付には時期差があると判断し、第1次・第3次で検出した伽藍内建物は講堂、今回の調査地は金堂跡と推定された。回廊は当初金堂に取り付いていたのが、後に1間分西にずれて講堂に取り付くようになったと考えられた。

説得力のある推論であるが、調査の結果、金堂跡と推定された今回の調査地が塔跡であることが確定した。従前の講堂跡は金堂跡と考えられる。当初講堂とされた建物は、他寺の講堂の規模と比して極めて小型であった。いまこれを金堂とすると、基壇長は東西22m(約73尺)、南北14.5m(約48尺)となり、川原寺西金堂(72尺×49尺)・崇福寺弥勒金堂(75尺×52尺)とほぼ同規模となる。この2例と同様、5間×4間の金堂建物が推定されよう。

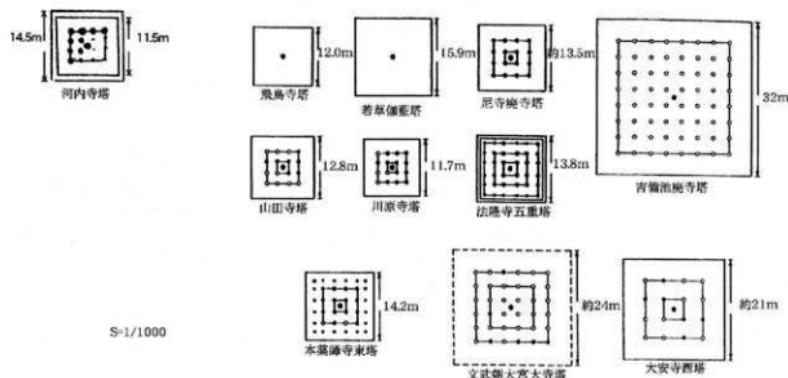
講堂はこれまでの調査では未確認であり、講堂の北に位置すると思われるが、市立縄手北中学校・縄手東小学校の南面にある南北道路は古地図に見えることから、寺地を画する何らかの名残りの可能性がある。このため、講堂はこの道路の南側に収まるものと推定した。

また既往の調査の図面を検討した結果、回廊のずれは一部のトレンチで確認されたにとどまることから、他の建物、たとえば経蔵などを構成する礎石の一部と考え、回廊は南北一直線に延びるものとした。ただし、従前の伽藍配置案と同じく、金堂に回廊が取り付く形式に変更はない。

今回検出した塔の基壇長を他寺の例と比較してみよう(第21図)**。河内寺塔上成基壇11.5mは川原寺塔11.7mと同規模、下成基壇14.5mは本薬師寺塔14.2mに類似する。法隆寺五重塔は13.8mである。大和の三重ないし五重塔とほぼ同規模であることが知られる。河内の一例を挙げると、柏原市片山庵寺の塔基壇は11.87mで39.5尺に復原されている**。したがって、河内寺塔も三重ないし五重の層塔であることが知られるが、いずれに属するかを決定するのは、現在までのデータからは困難と言わざるを得ない。



第20図 河内寺伽藍配置復元試案



第21図 塔の平面比較

(2) 瓦・土器から見た河内寺塔の変転

今回の調査で、軒丸瓦I類(素弁蓮華文軒丸瓦)は5点、軒丸瓦II類(単弁蓮華文軒丸瓦)は17点出土した。いっぽう、軒平瓦I類(重弧文軒平瓦)は2点にとどまるが、軒平瓦II類(変形重弧文軒平瓦)は16点、軒平瓦III類(偏行唐草文軒平瓦)は18点となった。これらの数的特徴から、軒丸瓦I類・軒平瓦I類のセットは塔建立に先立つ金堂所用瓦であると考えられる。軒丸瓦II類は外区外縁に圓線を持つA種と持たないB種に大別できることから、これらと組み合った軒平瓦は、前者がII類、後者がIII類にあたると考えられる。なお、從来奈良時代に位置づけられてきた軒丸瓦III類(単弁蓮華文軒丸瓦)は、上原真人氏から復古瓦とのご教示をいただき、平安時代中期に下ることが判明した。

軒平瓦では、今回平安時代中期から後期にかけての新種が多く発見されたことが特筆される。軒丸瓦III類とともに、該期に伽藍の再整備が行なわれ、差し替え瓦として所用されたことがわかる。その中で軒平瓦IX類82(均整唐草文軒平瓦)は、八尾市向山瓦窯の作製にかかり、客坊庵寺出土例に同文品があることから、すでに平安時代後期から河内寺と客坊庵寺とは接触の機会があったことが窺われる。寺院の壇越であった河内直(のち改姓して連)氏は河内郡の大領として活躍するが、昌泰2年(899)の河内郡土地充売を最後に史上から姿を消してしまう。このことと前記軒平瓦の状況を考え合わせると、平安時代後期以降、河内寺は壇越の勢力衰退から独自の寺院経営に行き詰まり、山岳寺院である客坊庵寺の一端として内包されていく動向が推測できる。

塔は、下成基壇大走り出土の土師器皿(第12図41~43)の年代観から、11世紀後半に一次的に倒壊するものの、その後12世紀代までは存続するようである。その後焼失し、塔の舍利蔵、厨などは盜難から防ぐために小規模な仏堂が築造される。しかし仏堂も鎌倉時代には焼失する。第2層の状態から、江戸時代まで断続的に瓦礫を盛って、保存が図られてきたことが窺われる。以降、伽藍堂塔の中心地として言い伝えられ、現代に至った。

* 他寺の金堂基壇長は、鶴垣賀也「近畿」(『新版仏教考古学講座』第2巻寺院、雄山閣、1975年。)に掲げる。

** 第21図は、奈良文化財研究所『吉備池廻寺』、2003年。P184所載の図を一部改変したものである。

*** 柏原市教育委員会『片山庵寺塔跡発掘調査概報』、1983年。

図版1

河内寺跡第11次調査
遺構



調査前の状況



第2層内肥前磁器出土状況



第3層上面瓦溜検出状況（北より）



第2層内軒丸瓦出土状況

圖版 3 河内寺跡第11次調査 遺構



第2層内軒丸瓦出土状況



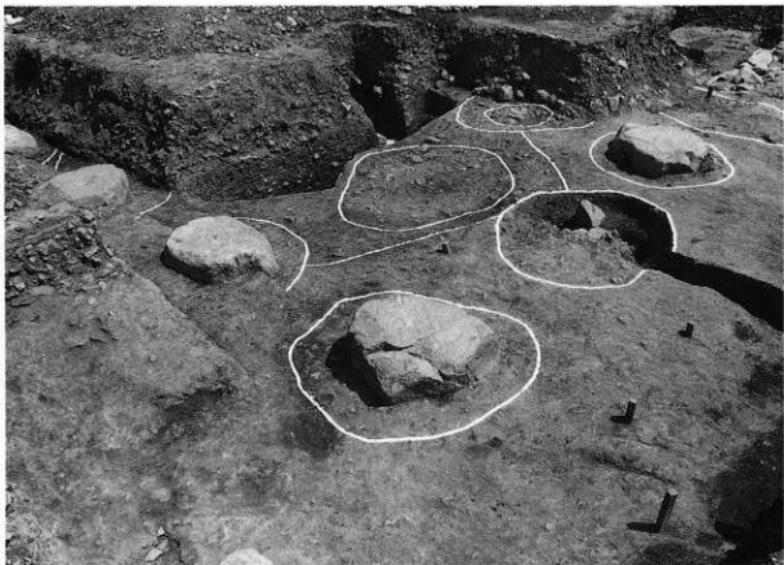
第2層内軒丸瓦・軒平瓦出土状況



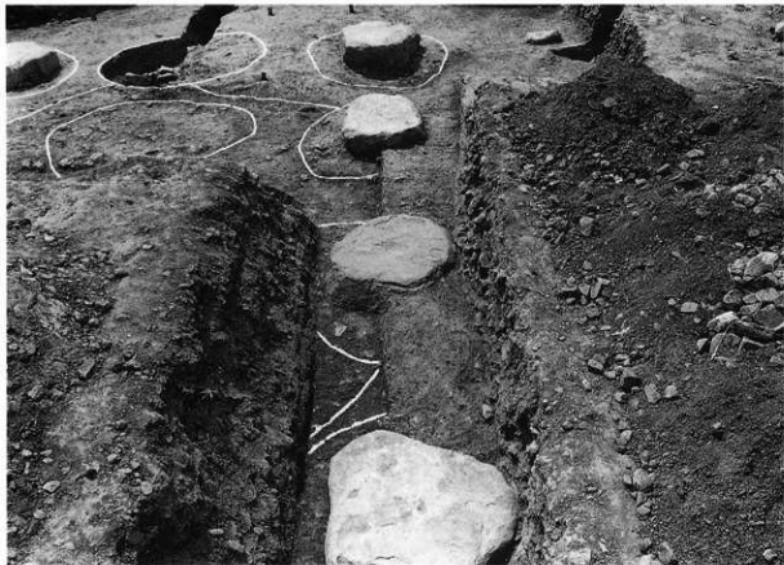
中世堂舎1検出状況
(西より)



中世堂舎2検出状況
(南より)



塔側柱礎石列検出状況全景（北西コーナーより）



塔側柱北側礎石列検出状況（東より）

図版 6 河内寺跡第11次調査 遺構



上成基壇検出状況（南より）



上成・下成基壇検出状況全景（南東より）



上成基壇検出状況（南より）



下成基壇検出状況（南より）

図版8 河内寺跡第11次調査 遺構



下成基壇下部石組検出状況



下成基壇走り検出状況



階段上部検出状況



階段下部雨落溝所用凝灰岩検出状況



礎石抜取穴 1 内礎石抜取痕跡（上部）検出状況



礎石抜取穴 1 内礎石抜取痕跡（下部）検出状況



四天柱礎石抜取穴NW内礎石抜取痕跡検出状況



調査地西側壁面



心礎トレンチ内心柱状柱痕跡検出状況



心礎トレンチ内心柱状柱痕跡断面



軒丸瓦



軒平瓦



54



58



58'



55



59



56



57



61

軒丸瓦

圖版 15

河内寺跡第11次調査
遺物



60



63



62



64



65



66

軒丸瓦



67



68



67'



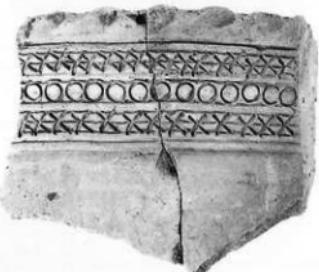
68'



70



69



70'



69''

軒平瓦



71



74



72



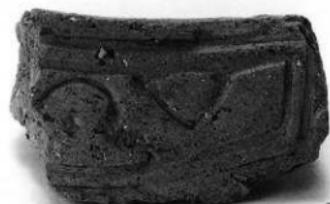
75



73



76



77



78



79

軒平瓦



81



85



82



87



83



88



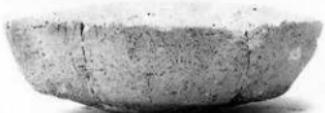
86



89



84



49

軒平瓦 心礎出土須恵器杯



90



93



92



91

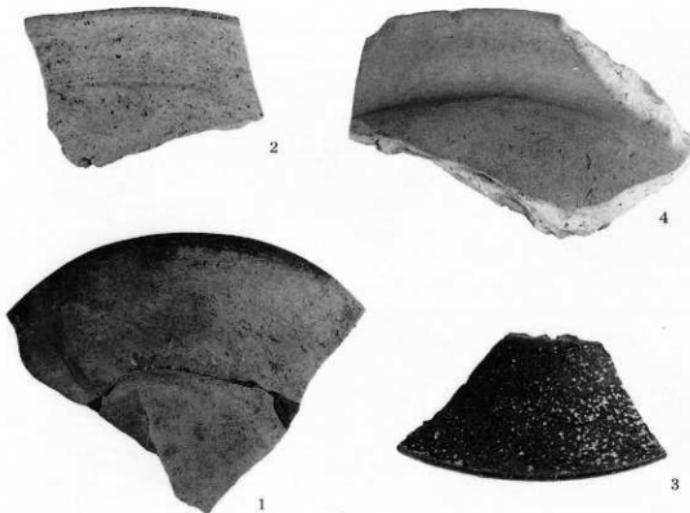


94

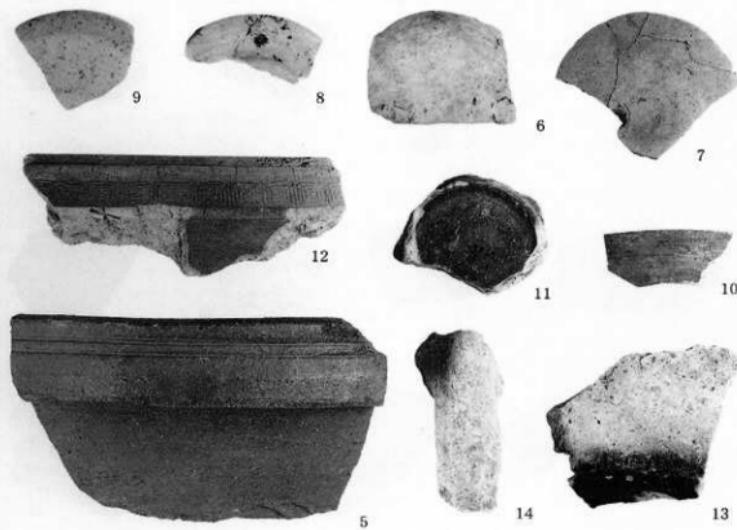


94'

鬼瓦 円面観



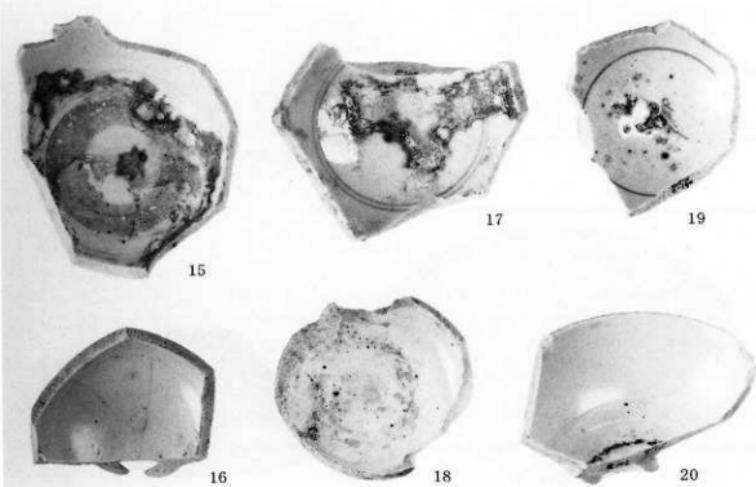
遺構出土土師器皿・鉢、須恵器高杯



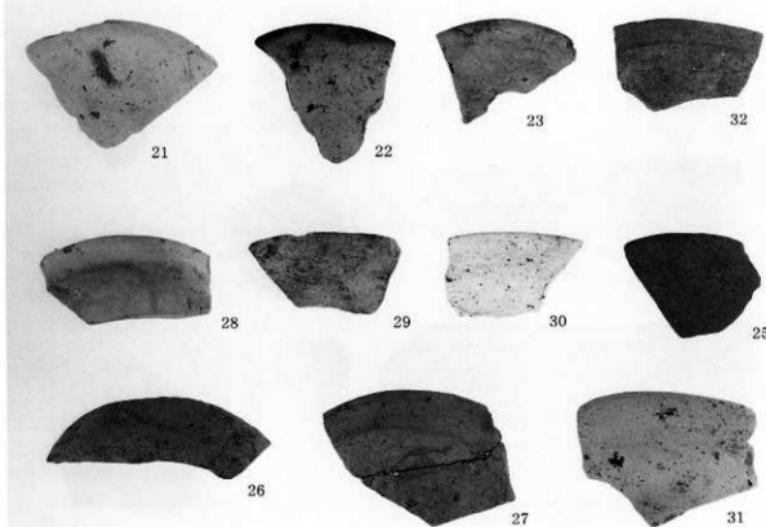
第1層出土土器前焼擂鉢 第2層出土土器皿、瓦器椀・火舍・擂鉢・羽釜

圖版
21

河内寺跡第11次調査
遺物

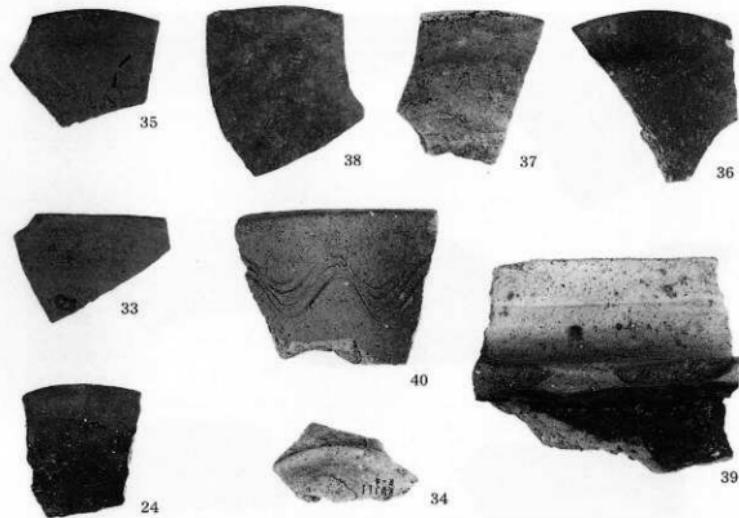


第2層出土肥前磁器碗

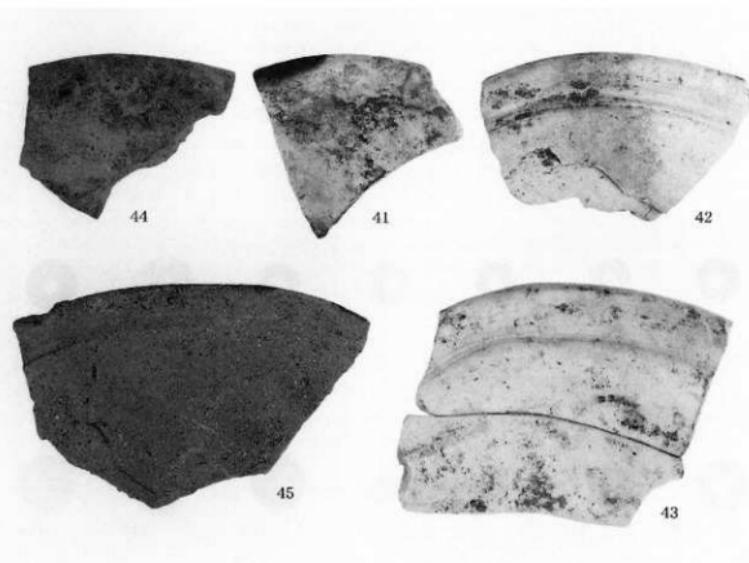


第3層出土土師器皿・杯

圖版 22 河内寺跡第11次調査 遺物



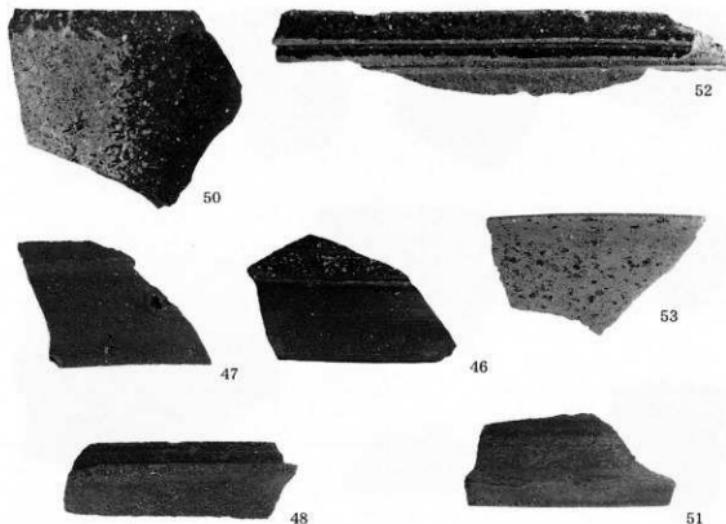
第3層出土土師器皿・杯、黒色土器椀、瓦器椀、羽釜・火舍



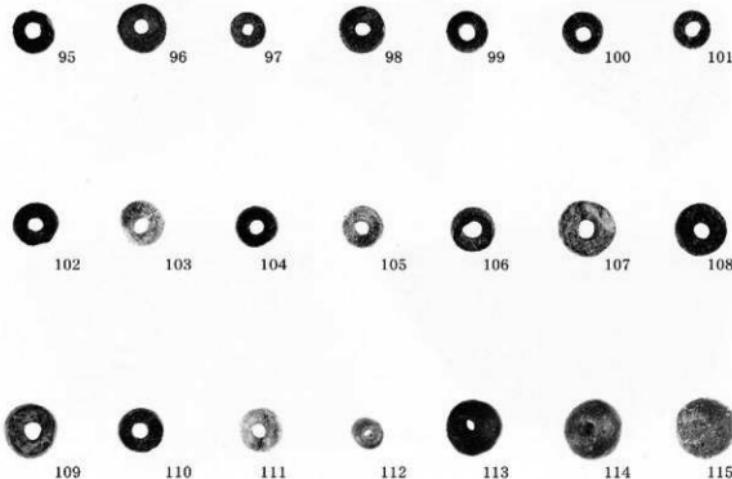
第4層出土土師器皿・杯

圖版 23

河内寺跡第11次調査
遺物



第5層出土須恵器杯蓋・杯身・平瓶・高杯・壺、土師器高杯



玉類

報告書抄録(その1)

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう —へいせい16ねんど—
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報－平成16年度－
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太 釜田有理絵 市田英介 安部きみ子 高志こころ
所在地	〒577-0843 東大阪市荒木北50番地の4
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
きとらがわいせき 鬼虎川遺跡	東大阪市弥生町 1401-2番地	27227	46	平成15年12月16日 ～平成16年1月28日	270m ²	賃貸 共同住宅 建設
わかえいせき 若江遺跡	東大阪市若江本町 4丁目536-8番地	27227	98	平成16年2月12日 ～2月18日	22m ²	個人住宅 建設
わかえきたいせき 若江北遺跡	東大阪市長堂1丁目 70-6,70-11番地	27227	97	平成16年8月17日	10m ²	個人住宅 建設
にしのつじいせき 西ノ辻遺跡	東大阪市弥生町 1414-1番地の一部	27227	45	平成16年7月30日 ～8月30日	137m ²	賃貸 共同住宅 建設
かわちてらあと 河内寺跡	東大阪市河内町 443番地	27227	63	平成15年3月4日 ～3月31日 平成16年4月1日 ～5月21日	100m ²	個人住宅 建設

報告書抄録(その2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鬼虎川遺跡 (第59次調査)	集落跡・貝塚・その他の墓	弥生時代	大溝・土坑墓	弥生土器 須恵器 石器	人骨 検出
若江遺跡 (第81次調査)	集落跡・官衙跡 城館跡・社寺跡	古墳時代～奈良時代	溝・ピット	土師器 須恵器 瓦器	
若江北遺跡 (第10次調査)	集落跡・水田	鎌倉時代～安土桃山時代	濠	土師器 瓦器	
西ノ辻遺跡 (第47次調査)	集落跡・その他の墓	弥生時代 ・古墳時代 ・鎌倉時代	ピット・土坑 ・掘立柱建物 ・井戸	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器	
河内寺跡 (第11次調査) (中間報告)	社寺跡	飛鳥時代～江戸時代	塔	土師器 須恵器 瓦器 軒瓦 鏡	遺存状態の良好な塔 検出

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

-平成16年度-

発行日 平成17年3月31日
 編集・発行 東大阪市教育委員会
 〒577-8521 東大阪市荒木北50番地の4
 TEL. 06-4309-3283
 印刷所 グランド印刷(株)

